

325

208



始



90112



雨立

泉案



大正

8. 1. 19

内交

原

題自影

(征露役洗軍時年二十有八)

碌々三十季

藥官又藥位

讀書洗爾自

羊生空消過

三十七年五月於靜岡兵營

真解題



石原正三

銘碑師得日

師小字真平、薙染稱真解、號一道院、日得其名也、伊豆天城人、父柴崎真助、母渡邊氏、有故冒石原氏、甫七歲、師事下田了仙寺日宗而受戒、及長從法叔駿河感應寺日彰而學、尋遊身延小檀林、轉入大檀林、孜孜矻矻、學行大進、嶄然見頭角、人皆屬望、居數年、師母偕病、師半途廢學、歸省奉養、無所不至、有餘力則以讀書、嚮征露之役起也、師亦應徵從第三師團而航清、轉戰于鞍山站及沙河、遼陽間、而皆有功、孤家子役中丸而傷、遂不起、實卅七年十月十四日也、距其生明治十年四月、世壽二十八、法臘二十一、管長日龜大僧正悼其死、叙之大講師、贈院日號、以旌表其功、蓋特典也、今茲乙巳十月丁其一周忌辰、日宗日彰及檀信等胥談葬遺骨于了仙寺瑩域、建碑其上、傳之不朽、且以師加了仙寺二十一世嗣、準感應寺四十七世歷、亦出於頌德之意也、師受檢其遺篋、唯得高祖遺文錄、輿向二記、佛說孝子經、及自著嘉祥大師稿本云、可以知其為人矣、銘曰、

竭孝師母 效忠君國 學雖不成 忠孝兩得

遺篋經書 涵養厥德 卓彼德行 貞珉永勒

從軍沙門 星下僧正 幾惇日毅 撰

はしがき

蕭殺たる満州の野に吾等が想友を失ふてより、既に十星霜を閲せり、徒に惆悵追懐の情、去來するもの幾たびぞ、胸に萬斛の熱血を湛へて、長虹の氣を吐き、富贍なる才藻を懷きて、到る所吟詠を恣にせる彼が生や死や、斐然たる一篇の詩なりき文なりき。

彼れもと熱烈不羈慷慨悲歌の人、滔々たる一世の風潮に反抗して、専ら侃諤の硬論を主張し、燃ゆるが如き靈火を以て世の荆棘と腐敗とを焼盡せしめずんば止まざらんとするの概ありき。彼れが稜々たる健骨、蓬々たる鬚髯、腫黒く眉秀でたる風、丰は、たとへば金色の牡獅子が沙漠の月に號呼するの雄姿にも似たらすや。而も又一たび涌然たる感興を呼び來りては、月に泣き花に詠じ、其の琅々たる彼が吟聲は、人をして恍惚忘我の境に入らしめき。され厭世脱俗徒に閑雲野

鶴を友として風月に嘯くの人にあらず、更に一步を進めて宇宙の妙諦に慕進し、直観せんとするの眞摯と敬虔とを忘れざりき。

彼れが向上欣求の理想は燦然として章をなし、現實の悲哀と醜惡とに濺げる紅涙は、凝つて痛恨の歌となり詩となるもの、前後大凡一
百有餘篇、皆これ衷心内容の聲、修飾もなく虚偽もなく、全く彼が心血
の文字のみ、乃ち遺友胥謀り、之を上梓して世に問ひ、聊か彼が常在の
靈を慰むる所あらんとす。

嗚呼、彼が肉彈を以て君國の急に殉じてより、春風秋雨白骨は空しく沙河の原頭に朽ちたり、秋老いて欄外の木枯し蕭條たる夕、彼が遺稿のはしがきを草せんとすれば、徒に懷舊の情胸裡に往來じて文遂に成らざるを如何、靈泉の墳塋は豆の下田に在り、行人墨客、斷腸の花を手向くるもの豈吾等遺友のみならんや。

遺友梅洞涙記

集 ← 泉 ← 靈 ←

刊行に莅みて

亡友の遺稿を輯めて、せめてもの面影を留めたいと思つた私どもに共鳴されて、當時有情の諸賢かち若干の醜金を辱う致しました。然るに私どもは出版の經驗なく、従つて數字上の定見なかりし爲め、こ
と志と違ひ幾多の違算を生じて、茲に遺稿出版の微志は一頓挫を來
したのであります。

併しながら此まゝ、初一念を抛棄することは、管に同情者の好誼に背くのみならず、亡友の靈を弔ふ所以でなし、又私どもの本意でもありません、乃ち兩人胥議つて秋山某氏の無盡講に加名し、之を以て出版費の不足額を補ふことに決しました。刊行が在、萬今日に至つたのは實に斯かる事情に餘儀なくされたので、固より私ども不明の罪ではあります、又その苦衷も頼ひに御察察を得たいと思ひます。

← 刊 行 に 莅 む に て →

今次漸く刊行の目的を遂げ、遅延ながらも聊か亡友の靈を慰むるに至りましたのは、今は私共に切めてもの心遣りであり、靈泉生前の道交知己詞友諸賢も亦恐らく、私共と此悦びを同じくして下さること、信じます、たゞ編輯裝訂等に關しては、私共の未熟と豫算の關係から、偏に諸賢の諒恕を請はねばなりません。

表紙の外題は生前親しく薰陶に浴せし縁由を以て、當年の第二學區中檀林長、現身延法主小泉大僧正猊下の染筆を煩しました。又表紙の背文字及び扉は詞友片野晃陽君の揮毫に係ります。終りに本書刊行に關し前きに多大の同情を寄せたまひし小泉大僧正猊下、並に靈泉の法叔今井眞澄師等の好意に對し、茲に刊行に茲んで感謝の意を新たに致します、更に編輯に關する淺井弔星君の有益なる注意を感謝します。

大正第三年一月十四日

山田良雄 敬白
水村遵祥

目次

嘉祥大師	一
我が父	六
玄題旗を捧持するに就ての感	七
警世旗感想	八
最蓮房	八五
詣暹公廟	九〇
次夢醒集龜上人韻送野口泰晴君東行	九〇
再次往日贈呈詩韻紀于野口君金蘭薄	九一
題同影寫真後	九二
戊戌七月某日與衆朋會於福住樓席上似諸氏	九三
歸省偶感	九四
花月嘆	九五

贈某生獲病歸鄉	九六
錄岡本圓達君之金蘭薄	九七
錄于重盛快進君金蘭薄	九八
題于學室	九九
休課歸省前一日張別宴於福住樓席上似諸友	一〇〇
送丹澤教師辭任之東國	一〇一
送清水歸一歸君鄉 <small>二篇</small>	一〇二
送深見靈照師榮轉之行	一〇三
題大慶寺靈松	一〇四
花月歌	一〇四
玉爭歌	一〇五
紀事	一〇五
次韻酬田中耀運氏	一〇七

贈山潤兮代簡	一〇八
次韻新佛教健兒詩	一〇九
擬留別花月歌	一一〇
代簡酬潤兮雅友	一一一
紀于池田博耀兄金蘭薄	一一三
江南花月歌	一一三
殿山花月歌	一一四
狂兮歌	一一四
三俊歌	一一五
日曜紀行	一二六
橫川御庵趾	一二八
龍華寺に眠れる高山氏を追懷する詩	一二三
冬の夜	一二六

送臺灣布教師渡邊佐野二師赴任地序

八

一三〇

蜂巢說

一三一

讀莊子

一三二

送栗原師赴任于教授池上序

一三四

春園招客記

一三五

吟社友記

一三七

題春山讀書圖

一三八

題高祖宴干沛圖

一三九

題鴻門會圖

一三九

朝鮮今後策如何

一四〇

跋梅花譜後

一四三

題桃源圖

一四四

插花說

一四四

送友人錦衣歸故鄉序

一四五

送深見教師序

一四七

題呂望圖

一四九

讀始皇本紀

一四九

蟻說

一五一

竹雨亭記

一五二

鼠說

一五二

題青砥藤綱滑川撈錢圖

一五三

移竹記

一五四

題百里奚飼牛圖

一五五

祭日治上人文

一五六

金衣公子傳

一五七

雜興漫筆

一五六

日曜紀行

一五九

送臘迎正之感

一六〇

九

目次

日蓮上人を讀む	一六二
劍光銃影	一六六
小慷慨家	一九六
滴露	二〇三
火葬場	二二二
橋上觀	二二三
巖上松	二二四
曉霜錄	二二七
乞食日記	二三三
貞松學園懷舊記	二三五
送中檀林卒業生序	二三九
卒業生の價值に就て	二三三
宗教家と衛生	二三九

靈 泉 集 嘉祥大師

目次

一 緒 論	
二 吉藏法師傳	
イ 幼時及修學時代	
ロ 行化宣教時代	
ハ 退隱時代と入滅	
ニ 概 括	
三 法師の體解心辭	
四 祖書に於ける吉藏法師上	
五 祖書に於ける吉藏法師下	
六 結 論 (本文終)	

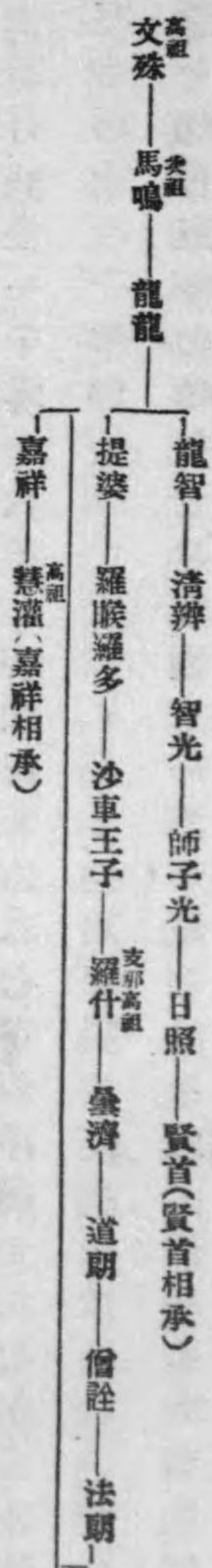
靈 ← 泉 集 →

義淨三藏曰く「天竺大乘無過二種一則中觀二則瑜伽」と海南寄歸内所謂法傳卷一序所謂「瑜伽」は後世の「法相宗」にして世親之を傳へ、「中論」は「三論宗」にして龍樹より稟承す、世尊滅後一千百年、護法、清辨の二論師出で、龍樹、世親の後を稟け「有」、「空」の諍を爲すや、水火反背殆ど讐敵も管ならず、一味の大乘此時より派別を見る、後玄奘法師渡天の時に方り、戒賢、智光の二大論師各帷を垂れ、徒衆を率ひ、盛に法幢を樹つ、而して戒賢は之を護法に承けて世親の「有宗」を弘通し、智光は清辨より傳へて龍樹の「空宗」を光宣す、此二派系統條然として源流混せず、支那に入り、朝鮮、日本に傳りて「三論」「法相」の二宗となる。

羅什、玄奘の二大三藏、支那傳道の巨匠と號す、而して一は「三論宗」を傳へ一は「法相宗」を傳ふ、即ち印度、支那の佛教之を大別して二大宗派となす事を得べし、今「三論」「法相」二宗の元始に溯りて之を討ぬるに、其系統凡

そ左に圖表するが如し。

三論宗系統



法相宗系統

彌勒高祖 無著次祖 世親 護法 戒賢 玄奘支那高祖 魏基 惠沼 智周

即ち印度、支那に於ける佛教の二大系統は「法相」「三論」の二宗に歸す道詮曰く「四河海に入る同く無熱池より出で、七宗鑪を分つも俱に三論宗より分る、三論は是れ七宗の本、諸宗は是れ三論の末、豈に龍樹の心府に入らざるの宗あらんや」と、蓋し私言に非るなり、斯の如くにして「三論」二宗法統連綿、一瓶相瀉ぎ、法燈相繼ぐ、良に兩國佛教の嫡系たり、而して嘉祥卓絶の資を以て其後を耀し、集めて其れ大成す、之を「三論」二宗掉尾の偉業とな

師 大 祥 嘉 ←

す、而して「法相」の巨匠玄奘、慈恩に先ち、嘉祥と時を同ふして龍興し、支那佛教の混沌を判し、各宗派の美を採り芳を摘み、之を合して打つて一丸となし、一大佛教を統一して、英名五天にまで震ひたるもの、之を天台智者大師となす、此諸傑相前後して隋末唐初の時に出現す、眞に佛教史上の一大偉觀と云ふべし、今予がこゝに嘉祥を論ずるは専ら天台を中心とし、慈恩等を以て旁證となし、一に吾が本化聖祖の批判を以て、之を論斷せんとするに在り矣。

夫れ佛日遠く西に没して、遺光東北に耀き、佛陀の眞文遍く南瞻部洲に傳ふ、即ち滅後一千零十六年——神武紀元六二七年西洋紀元六七年——後漢の明帝の永平十年、佛教始て支那に到る、迦葉摩騰竺法蘭佛像經論を齎らす、之を佛教東漸の嚆矢となす、爾來一瀉千里の勢を以て、漢、魏、晉、宋、齊、梁、隋唐、宋の間に流傳し、姚秦蕭梁の世、李唐趙宋の代、特に其浩渺を極め、元明に至て漸く沈滯して振はず、東漸の後三百年を経て、東晉の時代に入り、羅什

關中に入りてより、延いて元の至元年代に至る迄、其間殆ど五百年、佛教至盛の極に達す、此間支謙、安世高、支婁迦讖、羅什、法顯、玄奘、義淨等の三藏法師相續て經律論を翻譯せし者、概ね五千六百餘卷、支那佛教の諸宗亦皆此間に興れり、曰く「三論」「成實」「涅槃」「地論」「淨土」「禪」「攝論」「天台」「華嚴」「法相」「毘曇」「律」「眞言」の十三宗是なり、東漸の始、三百年間に於ては、其主と

する所、一に傳譯の業に存して、大乘玄妙の經論ありと雖も、之を弘通し、宗奉するに至らず、東晉の代に至て、道安、慧遠僅に其端緒を開き、羅什に及で大乘始て蔚興す、尋で梁に至て眞諦「起信論」を譯出して、「眞如隨緣」の説盛行はれ、同時に達磨西來して、「教外別傳」の宗を傳へ、大に教家を睥睨す、而して「天台」「華嚴」「諸法實相」「法界圓融」の談、隋唐の間に盛なり、又唐の初玄奘西域より歸り、盛に新譯の經論を出せしより、新舊義を異にし、學者各其見を新にす、其盛なる者を「法相宗」とし、後中唐に光揚せし者を「密教」となす、是の如く法運年を追て盛なりしも、後屢ば否塞の難あり、三武一

宗の排毀是なり、之が爲に經典焚燒せられ、僧尼沒落して、教法殆ど地を拂ふの慘狀を呈するに至れり、然れども大凡そ唐宋の世、諸宗の蔚興せしは、蓋し其反響にして、復び法運の興起を見る、降て元、明、清の世に至ては、「喇嘛教」新に弘通して、新舊の諸宗並び行はれたり、然れども舊宗遂に振はず、頗る光輝を失ふ、此時に當て、佛陀の眞義一たび支那に隠れて、東方大日本國に其光明を發揮し、迦文の金口昭々乎として、今に暨で益す光揚せらる、之を嘉祥が勃興せし前後に於ける、支那佛教歴史の大勢となす、而して嘉祥の大成に係る、「三論」二宗の支那に於る系統、及び嘉祥の位地は如何、始め姚秦の時に當りて、羅什三藏支那に來り、大に經論を翻じ、専ら三論を傳ふ、所依の四論中論、百論、十二門論、大智度論は、悉く什師の所翻なり、師翻譯の美、古今譽を流し、深智の才、三國の尊ぶ所、門徒繞り仰ぐこと、衆星の日月を圍むが如く、朝野歸宗すること、衆流の大海に會するが如し、生、肇、融、叡の四上足肩を並べて相承け、影、觀、恒、濟、志を同ふして美贊す、道生法師の上足曇濟之を傳て弘

宣し、以て道朗に授け、朗は之を僧詮に授け、詮は之を法朗に授け、朗は之を嘉祥に授く、嘉祥は實に「支那三論宗」の後殿にして、亦これ大成者なりし也、傳に曰く原漢文今和譯して此に出す以下引據考證皆之に倣ふ

法朗、嘉祥大師に授く、大師は本胡國の人なり、幼にして父に隨て漢地に來り、法朗大師に従て三論を受學す、寔に是れ法門の綱領、古今に卓出し、威德巍巍々として、象王の威を現じ、智辯明々として、日月の照を奪ひ、製作繁多、廣く部帙を施す、三論法華並に心府となし、大小兩乘悉く玄底を窮む、三論甚だ盛なること、専ら此師に在り、諸祖の中、特に大祖と定む、解釋理を盡すこと、之に如くべからず、遂に三論を以て、高麗の惠灌僧正に授く。八宗綱要卷下

「三論甚盛、專在此師、諸祖之中、特定大祖」と、以て嘉祥の偉業を想ふべきなり、而して「三論」の法系二派あり、一は前來言ふ所の嘉祥の相承にして、他は賢首相承なり、二派中嘉祥相承を以て正となす、十二宗綱要上卷四十六往看之を要す

るに「三論」の宗義嘉祥に至て其幽微を闡き、特色を發し、之を古説に比するに、少しく變異なきにあらず、是に於て一宗新古に分れ、嘉祥以前を「古三論」と名け、又「北地の三論」と稱し、以後を「新三論」と名け、又「南地の三論」と稱す。三國佛教史卷上二十八往見

今嘉祥大師を研究せんと欲するに、法義學說、高遠深遠、容易に測り得べきにあらず、況や德望一世に高く、學識古今に卓出せる、此一宗の太祖に對して余輩凡庸菲才、輒く能く一枝を著くべきにあらず、又唐宋の僧傳、歴代の記録あり、既に業に其德行英蹤は、字々金玉、句々錦繡の筆を以て、盛に頌揚せられたるに於てをや、唯余輩聊か法師に對する、一の深き自信の存するあり、茲に法師を叙して、大に本化門下の注意を促し、併せて各佛教諸家の學者に向て、大に警省せしむる所あらん事を期す、故に吾人研究の目的は、法師の史蹟にあらず、法義にあらず、祖書の上に顯れたる中の一部に就て筆を試むるのみ、而して今は僅に端緒を發するのみ、其完成は更に他日

を期し、併せて識者の大正を冀ふと云ふ。

第二章 吉藏法師傳

1 幼時及修學時代

嘉祥の吉藏法師、俗姓は安氏、本安息の人也、祖父の時亂を避て南海に移り、因て遂に交廣の間に家す、後金陵に遷るに及で法師を生む、年孩童に在り、父嘗て法師を引いて真諦三藏に見せしめ、仍て法師に名けんことを乞ふ、蓋し真諦始て支那に來り、威望遠近に傳り、當時の貴賤争うて謁を得るを榮とす、父乃ち此事あり、三藏問て曰く、其所懷如何、答て曰く、「吉藏」と爲すべしと、三藏曰く可なり、因て遂に名くといふ、法師の家、歴世佛門に奉ずること厚し、其父出家して、名を道諒といふ、精勤苦節、清行倫少し、其日常乞食聽法を以て業とし、毎日鉢を持て將に還るや、跣足塔に入り、遍く佛像に献じ、然して後分施し、方に始て之を進む、乃ち涕唾便利に至るまで、皆手を

以て承け、之を應食の衆生に施し、然して後遠く棄つ、其謹篤の行、初より中失なし、法師幼にして此家庭に養はる、他日道風遠く扇ぎ、徳香廣く及ぶ者、既に此時に胚胎せり、幼時父恒に法師を將て、興皇寺道朗大師の講を聴く、法師聞くに隨て領解し、悟ること天真の如し、蓋し父厚く三寶を信じ、夙に身を以て給侍す、法師幼にして穎悟、時に師をして驚歎せしむ、宿縁薰發遂に之を動機となし、年七歳に至て道朗大師に投じて出家す、生智妙悟、玄猷を採涉し、日に幽致を新にす、凡そ諮稟する所、妙に指歸に達し、論難に標する所、獨り倫次に高く、詞吐瞻逸、弘裕奇多し、好堅樹の地中に在て芽已に百圍し、頻伽鳥の殻に在て聲衆鳥に勝る者、蓋し以て法師の當年に譬ふべし、之を幼年時代となす、

年十九歳に至り、衆中に處して經論を覆述するに、精辯鋒遊、時彦に酬接して、綽として餘美あり、乃ち譽を進め、其郷邑を揚げ、學衆の中に光輝あり、想ふに法師の儕輩の間に在る、昂々焉として猶ほ野鶴の群鷄中に在りし

が如き乎、是より名望漸く高く、風聲稍や傳はる、具戒の後に至りて聲聞轉た高し、陳の桂楊王、法師の徳望を聞き、其風采を欽しみ、義旨を吐納し、恭敬之に奉ず、此時法師年漸く未だ三十に満たず、而して鬱然として既に家を成す、蓋し稀世の俊髦たるを知るべし、之を幼年及び壯年修學時代となす、

□ 行化宣教時代

後隋の百越を定るや、法師遂に東して秦望に遊び、嘉祥寺に止泊し、帷を垂れ講を開く、嘉祥の名漸く高く、禹穴市を成し、道を問ふ者千餘人、而して法師志傳燈に存し、法輪相繼ぐ、蓋し法師が「三論」一宗判教義學の大成、此頃より始るもの乎、開皇の末歳、煬帝晋蕃に在て、四道場を置き、國司をして供給せしめ、釋李兩部、各搜索を盡さしむるや、法師の名著れ徳高きを以て、特に召引して慧日道場に入らしめ、禮事すること豊華、優賞甚だ倫に異なる、王又た京師に於て日嚴寺を置き、別に法師を延き、彼ここに往て之に居らしむ、蓋し道、中原に振ひ、行、帝壤に高からしめんと欲するに在り、法師既に

して初て京輦に登れば、道俗喁々、雲の如く奔趨す、其状を見れば、則ち傲岸群を出で、其言を聽けば、則ち鐘鼓雷動す、法師乃ち諸名肆に遊び、薄しほば言縦を示すに、皆口を掩ひ、辭を杜ぢ、能く其に對ふる者尠し、想ふに獅子一吼、百獸腸を斷つが如きものありし乎、此時、京師欣賞して妙に「法華」を重んず、法師乃ち其利に因て、即て開剖す、時に曇猷禪師なる者あり、禪門の鉦鼓なり、業を光明寺に樹て、道俗迹を陳ぬ、創めて首として法師を屈請し、「會宗」を敷演す、七宗風を望んで造る者、萬を以て計るべし、乃ち堂宇に隘れ、外四面に流る、依りて縵を露はにし、苑を廣うするに、猶ほ自ら繁く擁す、豪族貴遊、皆其金買を傾け、清信道呂、俱に其芳風を慕ふ、法師法化窮らず、財施填積すれば、隨て散じて諸福田を建つ、用れども既に餘り有り、乃ち十無盡に充つ、法師之を曇猷に委付して、悲敬を資けしむ、其慈悲喜捨の功德、清淡素樸の風、以て見るべき也、仁壽年中に逮び、曲池の大像、高さ百尺許り、繕修乃久うして、身猶未だ成らず、仍て法師をして、就て而して之に居らしむ、法師

其當に構立すべきを誓ひ、自ら抽で、六物を捨て、并びに四縁に詫し、即ち莊嚴に用ひ、修繕完く成り、峙然として高く映す、斯の如く法師の福力、能く物の心を動し、凡そ營む所あれば成就せざることなし、蓋し至誠人を感動し、德化物に薰するの致す所なり、隋の齊王暕、夙に音猷を奉じ、一見欣び至り、大に恭敬を竭す、而して未だ其神府を知らざる也、乃ち屈して第に臨み、并に論士を延く、京輦の英彥、相從ふ者前後六十餘人、並に已に前鋒を陷折して、令名自ら著る者、皆總て來り集り、法師を以て論主となす、法師將に會を開くに及で、「命章」に陳べて曰く、「有怯の心を以て、無畏の座に登り、木訥の口を以て、解頤の談を釋す」と此の如きもの數百句、王、學士、傳德、充を顧て曰く、「藏法師今未だ鋒を近づけ、寇を禦がず、止だだ向まきに述ぶるが如き、恐くは斯蹤を追ふもの罕ならん」充曰く、「言を動せば論を成す、之を今日に驗す」と、王及び僚友、同く歎じて美を稱す、時に沙門僧粲と云ふ者あり、自ら「三國論師」と號す、雄辯河の如く傾け、吐言角を折る、是時に當り、最も先

づ徴問す、往還四十餘番、法師對引して、飛激注膽、滔然として之を兼ね、間體貌詞采に施して鋪發す、乃ち舉席情を變じ、赧然として退く、是に於て法師の芳譽更に舉り、頓爽由て來る、王謂らく、未だ言を盡すを得ずと、更に兩日を延て、義科を採取し、重て堅對せしむ、皆法師に抗する者なし、王稽首禮謝、永く歸して師傅とす、并に吉祥塵尾、及び諸の衣物を親す、此時法師齡既に五十に及び、法化の隆盛、德澤の洪大、夫既に此の如く、宗門を宣揚し、義學を顯揚するに於て、最も全盛の時となす、以上之を法師の行化宣教の時代となす。

ハ 退隱時代と入滅

法師の晩年の歴史に於ては、特に其德風芳聞の傳へらるゝもの多し、彼の當代の學僧百餘人を率ひて、天台智者に上請して「法華」の講を請ひたるが如き、又天台に投足して、七年の長月日、老軀を以て天台に侍奉せしが如き、皆此時代に存するの事蹟となす、而して此事は「智者」及び「章安」の

傳に據りて後に章を改めて研究すべきと、其正傳中に略せられたることを以て、此に舉げず、今は「續高僧傳」に出たる、法師の正傳に據りて、其概略を叙する也。

法師齡五十餘、大業の初歳を以て、二千部の「法華經」を寫し、十餘年を歴て、隋曆に終りを告ぐ、又二十五尊像を造り、房を捨て、之を安置し、自ら卑室に處り、昏曉に誠を竭して禮懺す、又別に普賢菩薩の像を置き、帳設莊嚴恭敬を致す前の如し、而して躬ら之に對し、坐禪實相の理を觀ず、鎮に年紀を累ね、長へに行を廢せず、想ふに此間前後殆ど十年、山寺に隱退して、修禪禮懺の外亦他事なし、蓋し著作に従事して、徐に寂黙に住せし乎、或は天台に歸敬せしもの、此當時にありし乎、今は暫く傳文に據りて他を叙せず、法師齡六十有餘、大唐義舉、天下を統一するに及び、初て京師に届る、武皇親く召して宗を釋せしむ、度化門下に謁見す、衆、法師の機悟の聞あるを以て、乃ち推して叙せしむ、對て曰く、「惟四民塗炭、時に乘じて溺を拯ひ、道俗の慶

頼、澤を穹晏に仰ぐ」と、武皇欣然、勞問慰勲、晷影の移るを覺せず、語ること久うして別る、勅して優矜し、更に恒禮に殊なり、唐四海を奄有し、元を建て、武徳と稱す、年の始、僧過繁結、頻りに紛争をなす、乃ち十大徳を置き、法務を網維せしむ、法師亦此事に參し、初議より之に與る、當時法師の重んぜらるる以て見るべし、此時實際、定水の二寺、道風を欽仰し、兩寺連請、延て住せせん事を以てす、法師遂に雙願を通受し、兩寺を兼統して、交々之に住す、徳化日に滋く、利生月に盛隆を極む、齊王元吉（唐太祖弟）夙に法師の風猷を欽み、請じて師範となし、又屈して延興に住せしめ、異供交々献じ、奉養備に至る、而して法師諸寺に住すと雖も、物に任せて而して赴き、動止拘らず、行藏に滯らず、時に法輪を轉じ、時に三昧に住し、權化應迹、無謀の用、不動の動、出沒の蹤、化導壅ることなし、武徳の中年に至りて、齡漸く傾き、氣漸く衰へ、屢ば疾苦を増す、乃ち勅して良藥を賜ひ、中使尋問、恭敬甚だ懇なり、法師自ら瘳へ難きを揣り、懸露久きに非るを測り、乃ち遺表を作りて帝に上る、曰く、「藏

年高く病積り、徳薄うして人微なり、曲げて神散を蒙り、尋で除愈するを得たり、但だ風氣暴かに増し、命旦夕に在り、悲戀の至り、遺表して辭し奉る、伏して願くは、久しく世間に住して、家國を緝寧し、四生を慈濟して、三寶を興隆せん」と、儲后諸王以下、並に遺啓を具し、囑するに大法を以てす、入滅の日、清旦、沐浴して新淨衣を着け、侍者をして香を焼き、佛號を稱へしむ、法師伽坐儼然、容喜色あるが如し、將に齋時に及ばんとして、奄然として化す、春秋七十有五、即ち武徳六年五月也、實に天台智者に後るゝこと二十有七年、章安に先つもの十年にあり、遺命して骸を露さしむ、色逾よ鮮白にして光明あるが如し、勅して慰賻し、南山に於て石龕を覓て安置せしむ、東宮以下諸王公等並に書を致して慰問し、并に錢帛を贈る、太宗始め秦王たりし時、偏に崇禮せらる、乃ち慰を通じて曰く、「諸行は常無し、藏法師道三乘を濟ひ、名十地より高し、惟般若を懷弘し、辯解脱を囿包す、方に當に徳を淨土に樹て教を禪牀に闡くべし、豈に意はん、湛露晨に晞き、業風世に飄らんとは、

長へに奈苑を辭して、遽かに松門を掩ふ、兼るに情緒の切を以てす、言存して遺旨に見ゆ、迹留まり人往ひて、彌よ悽傷を用ふ」と、乃ち南山の至相寺に送葬す、時炎熱に屬す、棺を以て繩牀に安するに、屍臭を催さず、跣趺散せず、弟子慧朗風聲を樹續し、其餘骨を收め、石を鑿りて北巖に瘞め、碑を建て、德を彰はす、是に於て法師の宏化、長へに息み、碑石僅に彭し、史蹟空く耀き、人天悲泣し、四衆仰慕す、是を法師の晩年時代、及び入滅の史となす。

二 概括

始め法師、年息慈に位し、英名譽を馳せ、冠成の後に至りて、榮逾遠に扇ぎ、四海仰望、居然として英豪たり、容貌西梵に像り、言語は寔に中華、含嚼珠玉、變態天挺、剖斷飛流の如く、殆ど積學に非ず、帝王に對晤して、神理其恒衆を増し、疑議を決滯して、聽衆其久きを忘る、然り而して風流を愛狎して、檢約に拘らず、貞素質直の性、或は他の譏を受く、加ふるに又縦まゝに論宗の才に達し、頗る簡略を懐く、御衆の德の如き、蓋し其長する所に非る也、初め陳

隋の廢興、戰亂相繼ぐや、道俗波迭、寺舍資具を顧るに違なく、遠く相違れて走る、法師乃ち其徒衆を率ひて、諸寺の中に往き、苟も是れ文疏なれば、並に皆之を收聚して、三間堂の中に置き之を保存す、後年平定の時に至り、方に之を洮簡し、部類帙次、始て其序を調ぶ、是を以て自學の長、當時法師に過るものなく、其注引宏廣、周到精密、考證該博なる、蓋し法師の如き者なし、始め法師の父道諒、謹篤の行を以て、心を微細に行ひ、涕唾便利、皆手を以て承け、利世施物、毎に其業をなしたるが如き、其薰陶能く法師をして、心を用ふる精密、物に接する慈忍、一代の德行美蹟、斯の如く偉ならしむ、法師を權者とすれば、道諒亦應迹の人なるか、典籍收聚の事の如き、豈に著大なる芳蹤に非る乎、法師一代の講帷、前後殆ど數十年、「三論」を講ずる、一百餘遍、「法華」三十餘遍、「大品」「智論」「華嚴」「維摩」等、各數十遍、並に「玄疏」を著はし、盛に世に傳流せらる、特に「三論」一宗の教判、義釋に至りては、法師が一代の心血を傾瀉したるものにして、宗風法師に至りて始て顯彰し、大に其光輝を

發す、乃ち法師を以て「三論宗」の大祖となす、「緒論」に於て之を辨ずるが如し。

二〇

法師入滅の日、將に命終の時に及で、徐に筆硯を命じ、「死不怖論」を製し書き畢て筆を落して化す、「論」の詞に云く「略して十門を擧て、以て自ら慰むることを爲す、夫れ含齒戴髮「生」を愛し「死」を畏れざる者なし、之を體せざるが故也、夫れ「死」は「生」に由て來る、宜く「生」を畏るべし、吾れ若し「生」せずんば、何に由りてか「死」あらん、其初に「生」するを見れば、即ち終に「死」するを知る、宜く「生」に泣くべくして「死」に怖るべからず」と、文多ければ載せず、以て法師の臨終に於ける、正念の安心を見るべく、其死の他師に比して、異彩あるを知るべし。

徒衆濟々、門下俊秀多し、其尤を慧遠となす、遠依承して法燈を傳へ、當時の英俊として、法化を敷傳し、光おほいに餘景を嗣ぎ、末年迹を藍田の悟眞寺に投じ、時に京邑に講じ、亟ば衆心を動す、具に其傳に出づ。

以上因みに法師の德行、美質を補ひ、其人品天稟の發して、事蹟となれるものを叙す、想ふに是れ僅に其の一二のみ。

余初め以謂らく、傳は宜く「編年列次體」ならざる可らずと、然れども今専門の史的考究にあらず、別に期する所ありて、専ら意を「模範的求道者としての法師」を叙するに注ぐものなるを以て、略して此傳をなすのみ、而して其據る所、諸書を涉獵し、廣く参照する所ありと雖も、重に「續高僧傳」終南山道宣律師著「佛祖統紀」天台僧志盤撰の本文に據りて之を譯出し、多く原文を追ひ、勉めて眞を失はざらんことを期す、時に私言を交へ、評説を挾む事あるも、皆一々典據ありて臆斷に非ず、故に文字平易を缺き、拮据贅牙を免れず、是れ原文の妙味を存せんと欲して、茲に至りたるものなり、而して法師が天台に歸伏するの一條は、本篇の主眼なるを以て、後章別に詳叙す、要するに本章は後章の爲め順序的階梯のみ、序論に過ぎざる也。

第三章 法師の體解心酔

三十一

靈 ← 泉 集 →

法師は三論一宗の大祖にして、學識深遠、德望超絶、陳隋時代に於ける第一流の耆宿たり、著述萬卷、門下數千、其判教義學能く一宗を光顯し、當代の燈明として、幾多龍象義虎の中に、嶄然頭角を現はし、後代の師表として、天下蒼生の均しく歸依渴仰せる所なり、而も吾人は祖書中驟ば法師の名に接し、其天台に歸伏せしを知るに及んで、一宗の大祖此吉藏法師の如き巨德にして果して能く其説を改め、其謬を悔ひ、潔く天台に歸伏したるべき乎とは、尠からず吾人を疑はしめたりき、嘗に吾人の疑を存するのみならずして、治ねく學者教家の確知せんと欲する所ならずんばあらず、乃ち吾人は今茲に此方面に向つて其研究の筆を進めんとす。

法師の學識、德望、位置等は既に上に説くが如し、而して法師の歸伏せられたる天台は其當時に在りて果して如何の人なりし乎、吾人は先づ其天

嘉 祥 大 師 →

台よりして研究し來らざるべからず。

祖書天台の當時を説いて曰はく、

南三北七ノ十師、漢土無量ノ學者、天台ヲ怨敵トス、得一云、咄哉智公、汝是誰弟子、以不足三寸舌根、而謗覆面舌所説等云云 開目鈔

蓋し天台の時、讀誦多聞堅固の末造に丁り、翻經譯論已に業に備り、宗見學解已に業に整ひ、南北の十師を始め、雲の如く集れる一時傑出の龍象は、盛に法幢を樹て、論陣を張り、判經義釋互に蘭菊の美を競ひ、其壯觀前古未だ嘗て有らざる所なりき、而して天台一たび法華を宗として如來一代の教判を定め、一心三觀一念三千の觀門を開くに至つてや、獅子一吼、百獸腸を斷つが如く、天下風を望で靡服すと雖、諸宗の人師甚だ意に快らず、表に論駁の勇なくして、而も怨嫉四方より騒然として起り、罵詈し嘲弄す、祖書これを宣へる也。

而してその天台智者は當時奈何の位地の人なりし乎。

三三

漢ヨリ四百餘年ノ末五百年ニ入テ、陳隋二代ニ智顛ト申ス小僧一人アリ。 獨時鈔

二四

又

梁ノ末陳ノ始ニ智顛法師ト申ス小僧出來セリ。 報恩鈔

然り當時に於ける天台智者大師は殆ど一小僧なりき、光宅、嘉祥、慧觀等の大徳に比するに、是は疑もなく無位無名のうら若き青年僧なりき、之に對して吉藏法師は老僧高僧の位地名望ある榮譽を極めたる大徳たりしなり、而も一朝天台の義判に開悟する所あるや、翻然として其自説を改め執情を去り、決然講を廢し衆を散じて、徳望ある位地を棄て、顧りみざること猶弊履を棄つるが如く然りといふに至つては、如何に其態度の眞摯にして其情思の光明なりしよ、著念固執し易く、派想離れ難し、道を求め師を尋ねて長少老若の序を顧みず、猛然として皓首を屈して黒髪の人に請益す、何等の清懐、何等の勇斷、豈に美はしき至徳にあらずとせんや、豈に慕

集 泉 靈

師 大 祥 嘉

はしき豪傑の士にあらずとせんや、昔者東福寺の圓爾宋より歸りて寺を創するや、聖祖贈るに木材を以てせらる、やがては天魔と嚴呵せらるべきものたりと雖、當時開宗已前にあると、また一は社交情誼は法門論議堂々陣頭に見ゆる場合と自から異なるものあるに由らずんばあらず、聖者の胸襟清洒洗ふが如きもの以て諒する所あるべし、況んや求道擇師の大事に於ては古來至誠の人驟ばわが嘉祥大師の如き壯舉に出たりき、近く我宗の大成辨阿闍梨昭尊者の、聖祖の室に投ずる時、已に而立を越ね齡相若く、而も天台の自宗を捨て、弟子の禮を執り、又彼の岩本日源僧都が、當時の碩學一山の學頭として巨多の門下を従へたる高位を去り、快く全山を舉げて、年若き、聖祖に歸伏し、自ら、聖祖の履を執るを憚らざりしが如き、吾人は古人が道に對して熱誠に眞摯に、而して謙讓なるに於て多大の敬意を拂ふと共に、必ずや斯の如き光風霽月の感懐を養はざるべからざる也、而してわが吉藏法師は實に這般求道者の最も偉大にして壯快なる第一

二五

人たらずんばあらず、祖書中、驟ばわが法師を稱許し給ひしもの、此美德を傳へて以て當時及後世の、頑迷固執の諸宗人師をして、反省する所あらしめんとしたまひし密意にあらざるなきを知らんや、予は已下史傳、祖書等に依據して、わが法師の天台歸伏が如何の狀態なりしかを觀んと欲す、始めに僧傳によりて法師が天台歸伏の勇徳を掲げんか。

灌頂晩ニ稱心精舍ヲ出デ、法華ヲ開講スルコト朗龍ニ跨エ、雲印ニ超エタリ、方集奔隨、篋ヲ負フテ書誦ス、吉藏法師アリ、興皇ニシテ室ニ入り嘉祥ニシテ肆ヲ結ビ、獨リ檀マ、ニ義記ヲ求借シ、尋デ淺深ヲ閱シテ、乃チ體解心醉、所從アルヲ知ル矣、因テ講ヲ廢シ衆ヲ散ジ、天台ニ投足シ、法華ニ餐廩シ、發誓弘演セリ。續高僧傳卷十九灌頂傳

祖書これを解して宣はく、
例セバ三論ノ嘉祥ハ法華玄十卷ニ、法華經ヲ第四時會ニ破ニト定レドモ、天台ニ歸伏シテ七年ツカヘ、廢講散衆身爲肉橋ト云云 開目鈔下

佛祖統記又記していふ。

郡中ニ嘉祥ノ吉藏アリ、先ニ曾テ法華經ヲ疏解ス、道ヲ章安ニ聞キ、講ヲ廢シ衆ヲ散ジ、投足請業、深ク前作ノ妄ヲ悔ユ。統紀卷七章安大師傳
後會稽ニ遊ビ、嘉祥寺ニ止マリ、法華ヲ講演シテ、自カラ章疏ヲ著ハス、智者再ビ天台ニ歸ルヤ、師禪衆百餘人ト、疏ヲ奉リテ法華ヲ講ゼンコトヲ請フ、赴カズ、章安法ヲ稱心ニ弘ルニ暨ビ、因テ法華玄義ヲ求ム、卷ヲ發テ一覽スルヤ、即便チ感悟シ、乃チ舊疏ヲ焚棄シ、深ク前作ヲ悔ヒ、來テ章安ニ投ジ、觀法ヲ咨受ス。統紀卷十大師本傳

是に由て之を視れば、法師夙に法華に精通し、一代の間、法華の講筵三百遍に逮び、著書「法華玄論」「法華義疏」「法華遊意」等あり、法華に於て已に巍然たる一家なり、而もその智者大師の説に渴仰するや、當時の英俊一、百餘人を率ゐ、恭しく疏表を天台に奉りて、更に其の法華の講を聞かんと請へることあり、祖書之を擧げて曰はく、

三論宗ノ吉藏大師南北一百餘人ノ先達ト長者ヲス、メテ天台大師ノ講經ヲキケトス、ムル狀ニ云、千年之興、五百之實、復在於今日、乃至南岳叡聖、天台明哲、昔三業住持、今二尊紹係、豈只灑甘露於震旦、亦當振法鼓於天竺、生知妙悟、魏晉以來典藉風謠、實無連類、乃至與禪衆一百餘僧、併奉請智者大師等云云 撰時鈔上

而して法師が事此に至りし第一の動機ともいふべきは、天台の「梵網經疏」を一讀したるにあるがごとし、祖書いふ、

嘉祥寺ノ吉藏大師ハ三論宗ノ元祖、或時ハ一代聖教ヲ五時ニ分テ、或時ハ二藏ト判ゼリ、雖然龍樹菩薩造、百論中論十二門論、大論ヲ尊デ般若經ヲ依憑ト定メ給ヒ、天台大師ヲ邊執ノ過ギ給フ程ニ、智者大師ノ梵網ノ疏ヲ見テ、少シ心トケ、ヤウヤウ近キテ、法門ヲ聽聞セシ程ニ、結句ハ一百餘人ノ弟子ヲ捨テ、般若經並ニ法華經ヲモ不講、七年ニ至テ天台大師ニ仕ヘサセ給ヒキ、高僧傳ニハ衆ヲ散ジ身ヲ肉橋トナスト書シタリ、天台

大師高座ニ登リ給ヘバ、寄テ肩ヲ足ニ備エ、路ヲ行キ給ハバ、負奉リ給テ掘ヲ越エ給キ、吉藏大師程ノ人ダニモ、謗法ヲ恐レテカクコソ仕エ給シカ、善無畏鈔

と擧げ給へるを以ても證すべし、而して法師が一百の僧衆と共に、辭を厚うし禮を卑うして天台に奉請せしに、智者大師は何故にや、傳には「不赴」の二字を以て其の請に應せざりしを示すのみ、絶て其間の消息を知ること能はず、智者抑も奈何して其請に應せられざりし乎、吉藏法師が一時の重望を負へる自己の地位を忘れ虚譽を忘れ、天下篤學の僧衆を率ゐて、年齒己れより遙かに下れる智者に教を稟けんぞ、事の特異と壯烈、殆んど前代未聞に屬し、一世の視線は怪しみの光を放ちて之に集中したり、智者にして尋常一般の學僧碩徳たるに止まらしめば必らずまさに得意満面、悠然として講に赴かんのみ、而もこの大徳の懇請を得て優揚として動かす「不赴」の二字を以て此際に處したまへる大沈黙！大自重！に至

ては、當時已に群を抜くのみならず、洵に萬世の耳目を聳動せしむるに足る。蓋し智者の明眼、法師の心中いまだ謗根の融せざるもの存するを知りて、此の聖默然の大痛棒を與へしに非ざる耶。否耶、嗚呼、天台の智者、嘉祥の吉藏、相對峙して睥睨す、已に當代絶異の偉觀なり。而も一矢は法師より放たれたり、然るに智者應せず、法師の失望狼狽果して如何ぞや、されど精悍道を求むるに倦まざる勇將の法師、容易に手を束ねて退くべきにあらず、乃ち再び章安に戦を挑みぬ、熱誠眞摯なる碩學の老徳、來りて道を吾門に聽かんとす、章安たるもの、曷ぞ智者の嘖に倣つて、此の可憐の老僧を退くるに忍びんや、仍て「法華玄義」を以て法師に貸與す、智者の嚴と、章安の慈とは、遂によくこの質實の法師をして喜懼交も至り、渴仰の念益す厚からしめき、而も法師をして是の如く屈身入室せしめし直接の動機、即ち第二動機ともいふべき好話柄は、道暹の「補正記」によつて傳へられ、祖書また數々これを引證したまへり。

吉藏ハ胡郷ノ所生、世ニ學海ト稱ス、心ニ難伏ノ志ヲ包ミ、口ニ如流ノ辯ヲ瀉グ、章疏ヲ著述シ徒ヲ領シ化ヲ盛ニス、大師天台智者ナリ、初テ陳ノ都ニ至ル、沙彌法盛天台ノ門下ト云フ者アリ、席吉藏ノ法席ニ造リテ數問フ、法師吉藏ナ云フ對フルコトナシ、法盛時ニ年十七、身小ニシテ聲大ナリ、法師嘲リテ曰ク、爾チ那ゾ聲ヲ摧イテ體ヲ補ハザル、法盛聲ニ應ジテ對ヘテ曰ク、法師何ゾ鼻ヲ削テ眸ヲ填メザル、吉藏良ヤ久ク咽ンデ調ヲ更テ曰ク、汝好々闇梨ニ問ヘ、好々汝ガ爲メニ答ヘン、法盛曰ク、野干和尚著レテ經文ニ在リ、胡作闇梨何レノ典據ニ出タル、吉藏泣テ謂テ曰ク、尺水計ルニ丈波ナシ、法盛曰ク、余ガ水ハ鯨鶴ヲ泛ブルコト能ハズト雖、亦蟻蜂ヲ淹スニ足レリ、吉藏又問フ、誰カ汝ガ師タル、汝ハ誰ガ弟子ゾ法盛曰ク、宿王種覺、天人衆中、廣ク法華ヲ説ク、是レ我等ガ師、我ハ是レ弟子ナリト、講散ジテ乃チ山水納一領ヲ捨テ、用テ大師ニ奉ル、遂ニ即チ伏膺シ、請ジテ法華ヲ講ゼシメ、身ヲ肉磔ト爲シテ、用テ高座ニ登セ、後章安

ノ義記ヲ借ルニ因テ、乃彌ヨ淺深ニ達シ、體解ケ口錯ミ、身踊リ心醉ヒ、講ヲ廢シ衆ヲ散ジ、天台ニ投足シ法華ヲ餐廩シ、弘願彌ヨ演ベ、頂戴永々ニス、豈異轍ヲ生ゼンヤ。秀句十勝鈔

靈

おもふに法盛沙彌は如何なる人なりしか、僧傳及び大師別傳等にも載せざれば、之を知るに由なしと雖も、法師の轉心に於ける。直接の一大動機を作りたるは、確に此沙彌なりし事は疑ふ可らざるが如し、即ち身小聲大の一沙彌、才鋒銳峻長老の嘉祥法師をして、狼狽殆ど應對に違あらざらしめし電光石火の論難は、端なくも法師をして其師の非凡なるを考へしめたり、乃ち智者に奉請して聽かれず、章安に到りて漸く「法華玄義」を借求せり、此時法師の喜悅果して如何なりしぞ、傳に、

義記ヲ借シ尋テ淺深ヲ閱シテ乃チ體解ケ心醉ヒ從フ所アルヲ知ル、
又 章安法ヲ稱心ニ弘ルニ暨ビ、因テ法華玄義ヲ求ム、卷ヲ發テ一覽便チ感

集

悟シ乃チ舊疏ヲ焚棄シ深ク前作ヲ悔ヒ、來テ章安ニ投ジ觀法ヲ咨受ス

統記本傳

又

後章安ノ義記ヲ借ルニ因テ乃彌ヨ淺深ニ達シ、體解ケ口錯ミ身踊リ心醉ヒ、云々。輔正記

此の「體解口錯身踊心醉」の文字善く法師の意中を盡し、「尋閱淺深」又「乃彌達淺深」を以て法師の開悟を知り、「一覽即便感悟乃焚棄舊疏深悔前作」の語、明かに法師歸服の實を詳に寫し得たるものにあらずや。

君子其過を知りて、改るに憚ることなし、遂に講を廢し衆を散じ、足を天台に投じ、大師に侍奉して、身を肉橋となすに至りぬ、勢位功名求る所に非ず、高踏白雲、俗榮を避く、我慢偏執を離れて、潔く去就を決し、法華經の「乃至以身而作牀座」を色讀せらるゝに至れる法師の芳躅は、想ふに佛教史上を通じて、否和漢古今を貫きて絶わて無くして、稀に見るの一大美談な

るべきか、祖書に、

三四

嘉祥大師ハ天台大師ヲ請シ奉テ、百餘人ノ智者ノ前ニシテ、五體ヲ地ニ
ナゲ御身ニアセヲナガシ、紅ノナンダヲナガシテ今ヨリハ弟子ヲ見ジ
法華經ヲ講ゼジ、弟子ノ面ヲマホリ法華經ヲヨミタテ、マツレバ、我力ノ
此經ヲ知ニ似タリトテ、天台ヨリモ高僧老僧ニテオワセシガ、ワザト人
ノミル時オヒマイラセテ河ヲコエ、高座ニチカヅキテ背ニノセマイラ
セテ高座ニノボセタテマツリ、結句御臨終ノ後ニハ隋ノ皇帝ニマイリ
給テ、小兒ガ母ニオクレタルガゴトクニ足ヲスリテナキ給シナリ。

報恩鈔

悔悟の熱血沸て涙となり、懺悔の至情溢れて汗となり、至情を捧げ、恭敬を
致し、身口意の三を以て天台に給侍したりし法師の面目、躍如として見る
べきなり、特に「廢講散衆身爲肉橋」の一事、所謂「今ヨリハ弟子ヲ見ジ、法華
經ヲ講ゼジ、弟子ノ面ヲマホリ、法華經ヲヨミタテマツレバ我力ノ此經ヲ

知ニニタリトテ、天台ヨリモ高僧老僧ニテオハセシガ、ワザト人ノミル時
オヒマイラセテ」嗚呼如何に率直敦樸の心事なりしよ、法師が當年に於
ける焦身苦慮の跡は聖祖の麗しく平易なる御筆に依りて、遺憾なく紹介
され、其風姿面目恍として當時を見るが如く、惚として法師の風骨を想見
せしむ。

想ふに入門投足、常隨給侍七星霜、體疲れ身重かるべき白雪の禿顛、九山
八海を堪へたらん額の皴繁き老法師の朝な夕なの御給侍、他より之を拜
し奉る其優しさ氣高さ、情弱怠慢の凡僧輩をして、慚死せしむるに足るも
のありしならん、而も尙「情存妙法故身心無懈倦」を口の中に誦し、「當起遠
迎當如敬佛」を意中に念じ、「世尊大恩以希有事憐愍教化利益我等無量億
劫誰能報者手足供給頭頂禮敬一切供養皆不能報若以頂戴兩肩荷負於恒
沙劫盡心恭敬」を色讀せられたる貴とさ勿體なさ、彼の久本坊日元上人
の聖祖に身延に仕へ奉りて、峰に登りて薪を採り、溪川に水を汲み、炊をい

三五

となみ、浴をすゝめ、朝に花を摘み、夕に佛燈を點じ、席を清め、庭を拂ひ、佛門の八役を勤め、懇に仕へ、嚴かに侍し奉りしにも、髣髴たり、偶ま開皇十七年十一月廿四日、智者大師滅を示し給ふや、法師の悲傷如何なりしを。

十七年ニ至テ智者疾ヲ現ズ、曉夕ニ瞻奉シ、艱劬心ヲ盡ス、爰ニ滅度ニ及デ、親シク遺旨ヲ承ハル、乃チ留書、竝ニ諸ノ信物ヲ奉ジテ、哀泣跪授ス、晋王乃五體ヲ地ニ投ジ、悲涙頂受シテ、事賓禮ニ遵ヒ、情法親ニ敦シ、尋デ揚州ノ總管府司馬王弘ヲシテ、頂ヲ送テ山ニ還ヘス、智者ノ爲ニ千僧齋ヲ設ケ、國清寺ニ置ク、續高僧傳卷十九

是れ祖書に「結句御臨終ノ後ニハ、隋ノ皇帝ニマイリ給テ、小兒ガ母ニオクレタルガゴトクニ、足ヲスリテナキ給シナリ」とある事實なり、宗見學見に固執し、名聞利養に着想し、情謂に封せられ、迷執に繋がれつゝある者の決して學ぶ所にあらず、法師にして始めて稀に之を見る、嗚呼純潔清雋の性、玲瓏澄清の志、眞率敦樸の情、法師に於て之を見る、氣品の超絶崇高

山の如く水の如し、謹嚴なる其歸仰の念、親厚なる其師資の情、洵に芳ばしく美しき哉、法師は山の如く水の如き淡泊瀟洒の人なりしと同時に、花の如く春の如き敦厚忠實の人なりし也、活火燃へ、熱血迸り、紅涙溢る、法師の史傳に徴して知るべきなり、知的方面に成功して當代の耆宿たりし法師は、情的方面に於ても、良に能く百代の師表たるべき、偉大なる性格を存して、芳ばしき此好模範を後世に残されたるにありき、翻て之を法師以外、當世の學者として、天台を怨嫉せる各宗の人師、聖祖の爲に法師と比例して破斥せられたる、諸宗の高祖人師は如何なりしかに見よ、更に之を現代の宗教家、殊に佛教諸宗の學者に比するに如何ぞや、是れ大に法師に鑑みて警省を用ふべき所に非ずや、上來叙し來りたる事實に依りて、法師が天台投門を表示せんすとす。

一 僧衆百餘人と共に天台の講を奉請せり

- 二 章安に請て法華玄義を借讀せり
- 三 義記一讀感悟開解す
- 四 著述舊疏を焚棄し前作を改悔す
- 五 廢講散衆天台に投門す
- 六 隨侍七年天台の爲に身を肉橋となす
- 七 天台の臨終法師悲傷す

第四章 祖書の上に於ける吉藏法師 上

吾人は更に研究の筆を進て、祖書の上に於ける吉藏法師、即ち聖祖が法師に對して破斥せられ、若くは許容せられ給ひしその評價如何を窺知せんと欲す、蓋し祖書中法師の名を擧げたまふもの前後管に幾十遍のみならず、録の内外に散在せるを以て、今一々之を引證するは煩雜の憂あれば、其要點のみを擧げて他は之に收攝せしめんとす。

抑も法師は「法華經」に於ける天台以前の大家にして、光宅の法雲と共に頗る名聲を耀かしたるものなり、其著作「法華玄」「義疏」「游意」等は、巧に法華を會釋して、判釋殆ど入神の妙を窮め、其講帷は幾十百遍に及び、所謂天地を感じ、鬼神を動すに至らしめたり、されど未だ之を以て眞に法華を知りたる者となすべからず

異朝ノ法雲法師ハ講經勤修ノ砌ニ須臾ニ天華ヲフラセシカドモ、妙樂大師ハ感應若斯猶不稱理トテイマダ佛法ヲバシラズト破シ給フ。

聖愚問答鈔

乃ち知る法師の釋未だ法華の意を盡さず、然りと雖も法師は其講帷に於て、其著書に於て、敢て法華を誹謗せしにあらず、寧ろ幽微を發し、玄理を耀さんと期したる人なり、然らば何が爲に悔過懺悔して天台に歸伏したるか、天台聖祖亦之を破斥し給ひしか、是れ實に佛教研究に於ける一大疑問にして、大義名分論の一日も忽にすべからざる所以なり、黑白と玉石と

黄金との異は常人之を知るべきも、黄石との異は容易く知り難きが如く、此間の判別は聖賢の域に達して、始て識了すべきものなり。

黄石ト黄金ト白雲ト白山ト白氷ト銀鏡ト、黒色ト青色トヲバ、翳眼ノ者眇目ノ者一眼ノ者邪眼ノ者ハ見タガヘツベシ。開目鈔

然らば法師の謗法は何に因るか、其根本は如何、請ふ之を祖判に證せん。

三論宗、申宗、吉藏法師、依般若經、百論、中論、十二門論、大論等、經論立、乃至三論宗、般若經、華嚴法華涅槃同程、經云也、但法相、依經、諸小乘經、劣也、立此等皆依法華已前、諸經立宗共也、爾前圓爲極立宗共也、宗々人々、有證、依經勝劣、判時、何法華經、可勝也、以人師釋、勿論勝劣。守護國宗論

是れ法師立宗の教判にして、聖祖の破斥を受くる基礎なるべし、又た

嘉祥大師ノ法華立ヲ見ルニ、イタフ法華經ヲ謗タル疏ニハアラズ、但法華經ト諸大乘經トハ門ハ淺深アレドモ、意ハ一トカキテコソ候へ、此ガ謗法ノ根本ニ候。

又た

是故法華經、宗、諸宗、中最勝、法相之贊 慈恩大師法華玄讚十卷 三論之疏 吉藏大師法華玄十卷嘉祥寺 不順法華具如別說。

又

有人問曰、法相宗、造法華、贊盛弘法華、其疏記等數百卷、又三論宗、人造法華、疏、盛講法華、今天台法華宗有何異釋、勝於二宗、邪答、若論異釋者、玄疏籤記四十卷、今指一隅、令知三方、法相宗、人以成唯識爲尊主、屈法華、義、令歸唯識、雖讚法華經、還死法華心、湛然記云、唯識滅種死、其心乃至、當知其義懸別、又三論宗、人雖造法華疏、其義未究竟、是故嘉祥大德、歸伏稱心中略、當知雖有法華疏、不如天台釋、中略、日蓮以此龜境案云、謗法謗人、不向其法人、罪不滅歟、云々、秀句十勝

祖判明確その謗法の義了すべきなり、又

日蓮ハ諸經ノ勝劣ヲシルコト華嚴ノ澄觀、三論ノ嘉祥、法相ノ慈恩、眞言

ノ弘法ニスグレタリ、天台傳教ノ迹ヲ忍ブユエナリ、彼人々ハ天台傳教ニ歸セサセ給ハズバ、謗法ノ失脱サセ給ベシヤ。開目鈔下

乃ち知る、法師の謗法決定せり、其嘗て法華を稱揚し、弘宣せしもの、一も法華の意を得たるものに非ずして、却て其眞精神を滅却したるものなり、「還死法華心」是なり、之に於てか自ら其罪を知り、快く天台に歸伏して、其疏を焚棄し、徒衆を散じ、講帷を閉ぢ、智者に侍奉して身を肉橋となすに至る、即ち心を天台に傾くるのみならず、身をも天台に移して、投足入門せり、祖判「移不移」の四句あり、法師其他を批判せられて、一見瞭然たるものあり。

嘉祥大師、捨三論宗、爲天台弟子、今、末學等不知之、法藏澄觀置華嚴宗、歸於智者、彼宗學者不存之、立非三藏慈恩大師、廢五性邪義、移於一乘法、法相學者堅諍之、問曰其證如何、答曰、或移身、或移心、或移身不移心、或身心共移、或身心共不移、其證文別紙可出之、云々。曾谷太田御書

又別に四句を列て人師の名を配し給へるあり、即ち、

天台宗歸伏人々有四句

- 一 身心俱移 三論嘉祥大師
華嚴澄觀法師
- 二 心移身不移 眞言善無畏、不空
華嚴法藏、法相慈恩
- 三 身移心不移 慈覺大師
智證大師
- 四 身心俱不移 弘法大師

眞言七重勝劣

此明判に依れば、法師は「身心俱移」の人なり、されど前の「曾谷太田御書」等には、明かに配當されたるに非れども、文意は「心移身不移」の句にあるが如し、こは與奪の二邊に約して義を異にするが故なり、例せば同書の後文に、

此外、漢土、三論宗之吉藏大師、一百餘人、法相宗之慈恩大師、華嚴宗、法藏澄觀、眞言宗、善無畏、金剛智不空、慧果、日本弘法慈覺等、三藏諸師、非四依、大士、暗師也、愚人也、於經者不辨大小權實之旨、不知顯密兩道之趣、於論者不

糾通申別申、不曉申不申、雖然、彼宗々、末學等崇敬、此諸師、號之、聖人、尊之、國師、今先舉一察萬、曾谷太田鈔

四四

此御文に法師を他の諸師と合して、暗師愚人に屬し給ふものは、奪の義なるべし、則ち心に移す方にては、與へて歸伏の義を論じ、又歸伏の後、其身尙三論の祖師として、著述の章疏既に流行し、後代の迷謬を生ずる方に約しては、奪破し給へるなるべし、「啓蒙」^{三十}「妙樂」^一の文を引て之を證せり、義勢多、是嘉祥舊立故今上下三兩處破之、令知得失、如其無失、何以歸心、其失、乃是歸心之前、破之、乃是先、其後也、^{記三下}又云、故知嘉祥身沾妙化、義已灌神舊章、先行、理須委破、識此大旨、師資可成、准此一途、餘亦可了、^{同二十}此等に依て與奪の義明なり、更に「七重勝劣抄」に、法師を以て「身心俱移」の句に屬し給へるは、彼の僧傳の「廢講散衆投足天台、凜凜法華發誓弘演」の事實を憑據とし給ふものなるべし、更に、
例セバ三論ノ嘉祥ハ法華立十卷ニ法華經ヲ第四時會ニ破ニト定レド

モ天台ニ歸伏シテ七年ツカヘ、廢講散衆身爲肉橋ト云々、法相ノ慈恩ハ法苑林七卷十二卷ニ一乘方便三乘真實等ノ妄言多シ、而ドモ玄贊ノ第四ニハ故亦兩存等云テ我宗ヲ不定ニナセリ、言ハ兩方ナレドモ心ハ天台ニ歸伏セリ、華嚴ノ澄觀ハ華嚴ノ疏ヲ造テ華嚴法華相對シテ法華方便トカケルニ似レドモ、彼宗以之爲實、此宗立義理無不通等トカケルハ悔還ニアラズヤ、善無畏弘法又カクノゴトシ云々、開目鈔下
の御判の如き「七重勝劣抄」と多少の異同あるも、與奪の二判を了せば疑を挾むの餘地なかるべし、之を要するに法師は身心俱に移りたるの人なり、仰がれて一宗の祖師となり、其章疏後代に傳はるが如きは、蓋し末學の所爲にして法師の眞意にあらず、其地位名望の爲に誤られて、無實の名を傳ふるもの、豈獨り法師のみならんや、古今實に其例に乏しからざるなり、例せば聖祖の御師なる清澄の道善房の如き、數々本化の慈訓に接して、漸く舊宗の過を知り、別頭の妙道に浴し、深く意中に悔悟する所ありしも、

四五

巨山の學匠として、一宗の長者として多くの門侶に擁侍せらるゝ權勢の身の本意なさ、心既に移りて、身は遂に動かす能はず、「報恩抄啓蒙」諸御書を引て、之を證するが如し、法師亦之に例すべきか、されども中心既に傾き、至誠正師に歸す、法師は謗法の罪を免れ、墮獄の業を遁れ給へるなり。

嘉祥大師ハ法華立十卷ヲ造テ既ニ無間地獄ニ墮ベカリシガ、法華經讀

ム事ヲ打捨テ、天台大師ニ仕シカバ地獄ノ苦ヲ脱レ給キ。 秋元鈔

聖祖明かに法師が地獄の苦を免れたるを認め給ひぬ、即ち祖判中在々所々に、許容し稱讚し他宗の祖師に對して常に模範として例證し給ふは此意なり、嗚呼法師生ては天台智者に遭遇して法華を心解し、死後千載の下、吾聖祖の稱美を受く、生前師を求て謬らす、身後幸榮の知己あり、死も亦以て瞑すべし矣、想ふに各宗の祖師徳を河海に比し、智は星辰に類す、或は應化の菩薩なる乎、而して時機到らず、附屬分あり、本迹化を異にす、天台尙未だ内鑑を發せず、發せずと雖も本地冷然たり、法師亦曷ぞ權化應迹の大

菩薩に非るなきを知らんや、内鑑冷然、本地照明、故に暫く其分齊を守りて本地の幽微を嚙み、明確に其意を露はさすと雖も、翻て其一代の行動、及び其著書に徴するに、往々にして首肯する所あるが如し、然れども權實の大別、本迹の明判は佛教に於ける嚴格なる大義名分論にして、本化大士の權能を以て其一代を批判し、權實の差配を決擇するに寸毫許さず、一分借すべきに非るなり、法師の著書亦用ゆべきものなきに非ず、祖師「開目抄」に欲聞具足道を説示せらるゝに及びて、妙の義を釋し給ふに破天荒の活釋を爲し給ひて、法師の疏を引證し給へり。

此文ニ欲聞具足道ト申ハ大經云、薩者名具足義等云々、無依無得大乘四論立義記ニ云、沙者譯云六、胡法以六爲具足義也等云々、吉藏疏ニ云、薩者翻爲具足等云々、天台立義八云、薩者梵語此翻妙也等云々、開目鈔上

祖師常に慈恩の疏と並べ破し給ふに拘らず、此に法師の疏を用ゐ給へるものは、法師は固と胡國の人なるを以て、其疏の語を引て「胡法以六爲

具足」の義を確證し給へるものにして、法師の幸に此事ありて、以て一分本化の化導を輔翼するを得し者、蓋し偶然の小縁にあらず、法師亦其内鑑に約すれば、像法の時代に生れて、本化の爲に其楷梯を造るべき善權の菩薩なるべきか、吾人は深く法師の内鑑に對して、敬虔を拂ふと同時に、亦其權迹の境遇に對して、多大の同情を以て、其不幸を弔せずんばあらざるなり矣。

第五章 祖書の上に於ける吉藏法師 下

法師が天台に歸伏したるは、法師の求道心の熱誠と、懺悔改過の至誠との極めて眞摯にして、崇高なる體度より出でしものなる事は、前來既に論證する所にして、亦疑ふ可らざる事實なりと雖も、尙更に一の大理由の存するあり、即ち三論一宗の法義相承なるものが、先天的に法華的主義なる事と、其傳承の祖師龍樹及び羅什が、確かに法華經の大宣傳者なりし事是なり、之を以て、法師の判釋は光宅、道場等の判に同じからずして、大に法華

經に接近せしなり、言換れば極めて天台の判釋に接近したる者なりしなり、若し當時の南北十師の中に於て、天台と光宅との二大派系を作らば、法師は勿論天台系に屬せるものなり、其所立判釋等は、前來祖書を引て之を擧げたるを以て之を略し、今は龍樹及び羅什の事を擧ぐべし。

大論一百十七丁 曰、問曰、更有何等法甚深勝般若者、而以般若屬累阿難、餘經屬累菩薩、答云、般若波羅蜜非秘密法、而法華等諸經說阿羅漢受決作佛、所以大菩薩能受持用、譬如大藥師能以毒爲藥。 國家論

大論は十住毘婆沙論と同く、龍樹の造にして羅什の譯なり、此二論共に法華を誇稱して、爾前の得道を許さず、剩へ三論の依經たる般若經を法華に對して「非秘密法」となす、造譯二祖共に法華を宗とするの意瞭々たり、聖祖「守護國家論」に於て、詳に引證し給へるが如し、更に羅什を證せば、

法華翻經後記著 肇公云、什對姚興曰、予昔在天竺國時、偏遊五竺、尋討大乘、從大師須梨耶蘇摩、餐受理味、摩頂屬累、此經言佛日西、隱遺耀照、東北茲典有

縁東北諸國汝慎傳弘矣セト 一代大意也
即ち羅什譯經傳弘の意、亦法華を宗とするにあり、什公の孫曇濟三論宗を相承す、乃ち知る羅什法華を宗重して、而して三論の高祖たり、法師遠く此意を傳ふ、其系統の法華的主義なる事知るべし、故に天台歸伏以前既に法華の疏あり、盛に法華を講じたるを以て證すべし、斯の如き先天的の約束は、一朝激烈なる動機に依りて、端なくも遂に投門歸伏の人となりぬ、即ち三論宗祖としての法師は法華に歸依し、天台に投足すと雖も、是れ既に始祖龍樹の意なり、高祖羅什の志なり、三論相承の祖として、躬親から疚しからざるのみならず、却て龍樹、羅什の爲に孝子たり順孫たるものなり、是法師の斷然として、潔く歸伏を執行したる所以にして、之を以て一宗の耻辱となし、法師の汚點となすが如きは、抑も宗義法統の如何を知らざる碌々斗筭の人のみ、眼光豆の如き輩のみ、法師の如き絶代の教傑として、卓絶の見識を以てして、斯ばかりの判斷に迷ふの癡態を爲さんや。

眞言宗、善無畏等、華嚴宗、澄觀等、三論宗、嘉祥等、法相宗、慈恩等、名依ハ自宗ニ其心落ハ天台宗、其門弟等不知此事、如何免ハ謗法、失ハ乎、寺泊御書
試に彼の世親、馬鳴の二大論師に見よ、千部の大論師として、西天第一流の巨人として、其始め小乗を弘めて盛に著書を作られたるも、後其非義を知るや、翻然其説を改め、大乘を光顯するに勉む、是れ二論師の徳に於て一毫も毀くる所に非ずして、却て大に其高見卓識を認むべき者なり。
世親菩薩馬鳴菩薩ハ、小ヲモテ大ヲ破セル罪ヲバ、舌ヲ切ントコソセシカ、世親菩薩ハ佛説ナレドモ、阿含經ヲバタハムレニモ、舌ノ上ニオカジトチカヒ、馬鳴菩薩ハ懺悔ノタメニ起信論ヲツクリテ、小乗ヲヤブリ給キ。報恩鈔下
地位に縛せられ、名望に封ぢられ、鬱々不快の裡に舊宗を墨守するが如きは、抑も活識明達の巨人の執る所にあらざるなり、法師の此を棄て、彼を取りたるもの、以て法師たるの眞價の存する所となす。

天台の判釋は上下幾千年、印度、支那、日本を通じて其完美比類なき者なり、古今獨歩、空前絶後と稱するも決して誇稱に非ず……一たび陳隋の間に卓出して、支那幾多の判釋家をして顔色なからしめたるもの、固より偶然に非ず、歸伏を天台に致したるもの、嘗に法師一人のみに非ずして、他宗の祖宗人師にして、或は歸伏し、或は傾心せるもの亦少からず。

三論宗ノ吉藏大師南北一百餘人ノ先達ト長者ヲス、メテ天台大師ノ講經ヲキケト勸ムル狀ニ云、千年之興五百之實、復在於今日、乃至南岳叡聖、天台、明哲、昔、三業住持、今、二尊紹係、豈只灑甘露於震旦、亦當振法鼓於天竺、生知妙悟、魏晉以來典藉風謠、實無連類、乃至共禪衆一百餘僧、奉講智者大師、等云云、終南山、道宣律師、天台大師ヲ讚歎シテ云、照了法華、若、光輝之臨、幽谷、說、麻、訶、衍、似、長、風、之、遊、大、虛、假、令、文、字、之、師、千、群、萬、衆、數、尋、彼、妙、辨、無能、窮、者、也、乃、至、義、同、指、日、乃、至、宗、歸、一、極、云、華嚴宗ノ法藏、天台ヲ讚云、如、思、禪、師、智、者、禪、師、神、異、感、通、迹、參、登、位、靈、山、聽、法、憶、在、於、今、等、云、云、真言宗ノ

不空三藏、含光法師等、師弟共ニ真言宗ヲステ、天台大師ニ歸伏スル物語云、高僧傳云、與不空三藏親遊、天竺、彼有僧問曰、大唐有天台迹教、最堪簡邪、正曉、偏圓、可能譯之、將至此土、耶、等云云、撰時鈔上

則ち知る、獨り法師のみに非ずして、律宗の道宣、華嚴宗の法藏、真言宗の不空等皆天台に歸伏せしなり。

依憑集守護章秀句ナンド申書ノ中ニ、善無畏、金剛智、不空等ハ天台宗ニ歸入シテ智者大師ヲ本師ト仰グ由ノセラレタリ、善無畏鈔

真言宗の祖師善無畏、金剛智、不空の三々藏、共に天台歸入の人なりと云ふべし。

所詮善無畏三藏蒙閻魔王之責、悔此過罪、不空三藏、還渡於天竺、捨真言、來臨於漢土、建立於天台、戒壇兩界、中央本尊、置法華經是也、問曰、今時真言宗學者等何、不存此義、答曰、眉近不見自禍、不知是謂歟、嘉祥大師、捨三論宗、爲天台弟子、今、末學等不知之、法藏澄觀置華嚴宗歸於智者、彼宗學者不存之、

玄奘三藏慈恩大師、廢五性、邪義、移於一乘法、法相、學者堅、諍之、問曰其證如何、答曰或移心不移身、其證文、別紙可出之、曾谷太田御書

此等の祖判に依るに、一々證を擧て彼諸宗祖師高德の天台に歸伏の事を示され給へり、即ち華嚴宗の法藏、澄觀、真言宗の善無畏、金剛智、不空、法相宗の玄奘、慈恩、律宗の道宣、三論宗の法師等其人なり、此等の祖師皆聰明高德、智を四海に比し、徳を日月に類す、蓋し内鑑に於ては夙に佛意の在る所を認め給ふべし、而して佛教の流布時代あり、機類あり、國土あり、教法の淺深高下あり、流布の前後次第あり、乃ちその内鑑を覆ふて逗縁の權化を授けらる、末學徒衆、因習固着遂に移らず、長へに爾が祖師の罪人となる、亦憐れむべからずや、祖判に於ける破折の強義は、即ち彼化導の跡に就て論じ、以て彼宗々の末學を砭す、是れ實に大義名分上の一大教判にして、本化特權の大明鏡を以て、諸の權宗人師を照破し、一點許さず、寸毫假さず、嚴明正確、如來の使として如來の事を行ずる大判決なるものなり、此意味に於て、

四句を以て分別し給ふに「身心俱移」を以て法師を判じ給ふ、諸宗の祖師多く天台に歸伏すと雖も、特に祖書上に於ける法師の最も名譽光榮とする所にして、決然たる其行動、雷霆疾風の如く、其去就進退、淡然として光風霽月の如く、遂に各宗の祖師に卓越して、千載の下、人をして渴仰敬崇の念に耐へざらしむる所以なり。

吉藏法師程ノ人ダニモ謗法ヲ恐テカクコソ仕エ給シカ、然ヲ真言三論法相等ノ宗々ノ人々今末法ニ成テ偏執セサセ給ハ自業自得ナルベシ

善無畏鈔

嗚呼謗法の罪、佛法に於ける罪惡中、此謗法より重く甚きものなきは、法華涅槃等諸大乘經の明文にして、學佛者の最も恐れ、最も感銘すべきものなり、然り而して法師は此明文に照して真摯にして熱誠なる舉作に出でたりしなり、嗚呼懺悔の徳、佛法に於ける善根中、此懺悔より清くして高潔なるはあらず、是れ大小乘經の通軌にして、修道者の特に意を用ふべき事

となす、法師は善く懺悔を實踐したる人なり、懺悔の人は蘇生の人なり、其言は至誠の極なり、其人の言は直ちに佛説を聞くが如くなるべきなり、衆罪如霜露慧日能消除、あゝ如何に頼もしき佛語なるよ。

嘉祥大師ハ天台大師ヲ請シ奉テ百餘人ノ智者ノ前ニシテ五體ヲ地ニナゲ、徧身ニアセヲナガシ、紅ノナンダヲナガシテ今日ヨリハ弟子ヲ見シ法華經ヲ講ゼシ云云。 報恩鈔

嗚呼法師の懺悔、斯ばかりに貴き懺悔はあらず、斯ばかりに優しき懺悔はあらず、斯てこそ謗罪は消ゆるなれ、他宗の祖師は如何、此謗法の重罪を知り、至誠の懺悔を捧げしものありしか。

祖書明に指南し給へり。

例セバ嘉祥大師ハ法華立ト申文十卷造テ法華經ヲホメシカトモ、妙樂彼ヲセメテ云、毀在其中何成弘讚等云云、法華經ヲヤブル人ナリ、サレバ嘉祥ハ落テ天台ニツカヘテ法華經ヲヨマズ、我經ヲヨムナラバ惡道ヲ

マヌカレジトテ七年マデ身ヲ橋トシ給キ、慈恩大師ハ立贊ト申テ法華經ヲホムル文十卷アリ、傳教大師セメテ云ク、雖贊法華經還死法華心等云々、此等ヲモツテオモフニ、法華經ヲヨミ讚歎スル人々ノ中ニ無間地獄ハ多、有ナリ、嘉祥慈恩スデニ一乘誹謗ノ人ゾカシ、弘法慈覺智證豈ニ法華經蔑如ノ人ニアラズヤ、嘉祥大師ノゴトク廢講散衆シテ身ヲ橋トナセシモ、猶已前ノ法華經誹謗ノ罪ヤキエザラン、不輕輕毀ノ者ハ不輕菩薩ニ信伏隨從セシカドモ、重罪イマダノコリテ千劫阿鼻ニ墮ヌ、サレバ弘法慈覺智證等ハ設たひヒルカヘス心アリトモ、尙法華經ヲヨムナラバ重罪キエガタシ、況ヤヒルカヘル心ナシ、又法華經ヲ失、眞言經ヲ晝夜ニ行、朝暮ニ傳法セシヲヤ、世親菩薩馬鳴菩薩ハ小ヲモテ大ヲ破セル罪ヲバ舌ヲ切ントコソセシカ、世親菩薩ハ佛説ナレドモ阿含經ヲバタハムレニモ舌ノ上ニヲカジトチカヒ、馬鳴菩薩ハ懺悔ノタメニ起信論ヲツクリテ小乗ヲヤブリ給キ等云云。 報恩鈔下

謗法の罪過と懺悔の事例とを舉給ひ、世親、馬鳴、不輕、輕毀の衆、及び法師を模範として、慈恩、弘法、慈覺、智證等を例證し給ふに、無間地獄を治定せらる、更に他宗祖師を倒破し給へるものあり。

日蓮以此龜鏡案云、謗法、謗人、不向其法人、罪不滅歟、弘法慈覺智證如何、法藏澄觀慈恩善導善無畏金剛智不空如何等文、秀句十勝

集 泉 靈

「如何」の二字、簡にして勁、鋒說莫耶の如く、直ちに諸宗人師の心腑を刺し、其腸を抉り、其臟を貫き、鮮血淋漓として迸り、血痕斑々として腥く、悽愴森嚴、慄然として懼れ、瞿然として驚かしむ、四句「移不移」の判は與奪の二邊あり、尙寛容なりと言ふべし、此「如何」の大折破は、縦には正像の諸大論師、各宗の祖師を震慄せしめ、横には三國に涉りて、其迷義謬說を叱咤し給へる、大獅子吼の激烈なる一大宣言なり、然り而して法師は光榮ある能例の模範者たる事を許されたり、法師退ては天台に歸して、無上醍醐の法味を嘗め、進では本化の稱讚を辱ふして、事觀即成の甘露を掬す、抑も天台は

藥王菩薩の應化にして、親く靈山に迹門法華經の付囑を受け、像法の時代に興出して、大に本化の化導を啓發し給ふ、五時八教の判釋、十乘觀法の規矩、良に一切經藏の關鑰たり、八宗齊く仰崇し、古今悉く歸敬する亦偶然にあらず。

依憑天台集序前入唐受法沙門傳燈大律師位最澄撰

天台傳法者諸家、明鏡也、陳隋以降、興唐已前、人則歷代稱爲大師、法則諸宗之證據矣、故梁書云、夫治世之經、非孔明、則三王四代之訓、覆而不彰、出世之道、非大師、則三乘同教之旨、晦而不明者也等文

「秀句十勝」詳に天台の教判を以て、卓絶比倫なきことを指導し給へるが如し、其他諸宗の名匠の盛に天台を頌揚せし事前に引證せり、亦煩しく證せず、法師の歸仰固に其當を得たり矣、以上之を要するに、祖書に於ける吉藏法師の一斑を叙するもの大凡斯の如し、本化の大活眼を以て法師の一代を見るに、躍如たる面目宛として眼前に現れ、其心腑を通して恍乎と

師 大 群 嘉

して肺肝を照すが如し、風丰面目新に此に活動し、枯骨再び肉を生じ、朽枝再び花を開く、優しく清かりしは法師の行動なるかな、六尺の短軀、七十年の短生涯、限りなき光榮と、測られざる高德を藏し給ひしは法師の生涯なり、羨むべきは法師、崇むべきは法師なる哉、温容穆々乎、長へに微笑を含みて、慈眼潤へる玉の如く、仁愛の眸眉宇の間に現れたる一老僧、七年の長き日月、智者の講壇の邊り、絶へて倦怠の念なく、履を取り杖を捧げ、身重き老體に智者を擁して、徐ろに合掌敬禮の謹嚴なる姿、其當年の温容の惚ばれて、吾人は今更の如く、至誠の敬虔を捧げざらんと欲するも得可らざるなり、三論宗の祖師としての宗派的感情は洗ひ去られ、支那古代に於ける一法師としての歴史的隔意は打消され、唯だ天台の老門弟として、忠實敦樸なる求道者として、特に本化の恩光に浴したる、稀有難得の大光榮者としての意味に於て、吾人は江湖に法師を紹介するの喜を擔へるものなり、憾くは從來文を草し、筆を執るの技を學ばず、況や淺學寡聞、才短に識疎

なるを以て、斯の大人物を書き、大教傑を寫すに堪へず、幾回筆を抛ちて而して咨嗟し、強て僅に稿を續き、焚かんと欲して而して漸く存する者、是を以て光輝ある法師の歴史をして徒らに乾燥に、趣味多かるべき法師の一代をして、空く無味磽确の段を招くに至らしむ、是れ深く罪を法師に謝し、過を大方に告ぐる所なり。

我が父

春も是から彌生と云ふ二月の空、人の心も浮々とする好い時節である、「願くは花の下にて吾れ死なん」と古人も詠んだが、彼の桃や櫻が一時に咲き揃ひ、鳥迄も「ハウ法華經」を囀る今、古今の詩人歌人が満身の腦漿を絞つて、讀め稱へた此陽氣の月に、如何んな深い意味と教訓とが含まれてあるだらうか、多くの人は唯だ何の考もなくうか／＼花に酔ひ、春に憧憬れて過ごして仕舞ふ、想へば馬鹿々々しい事だ、記憶すべき此十五日、十六

日は吾等が父の御佛と本化とが、御入滅と御誕生との聖日であるではないか。

先づ人間第一の先決問題は何だらう、恐らく『吾身の本』を知るのであらう、之を知るに科學や哲學で解決しやうとする者が、彼の華嚴の瀧に投つた藤村操の仲間だ、それでは宗教で解決が出来るかと言ふに、耶蘇教は神を説き、佛教は佛を説て何れも之を説明して居るが、要するに有始有終の神や佛であるから、兼好法師の徒然草にある「天よりや降りけん、地よりや涌きけん」という様な曖昧糺稜に歸して、吾々の根本問題は千古の疑團の儘、何時迄も消滅されないのだ、そこで日蓮聖人は佛様の本懐たる法華經によつて、委細に此間の消息を明かにし、我が身の根本を解決されたのだ、『自我得佛來の自とは始め也、速成就佛身の身とは終り也、始終自身也』と斯う仰せられてある、釋尊の我が身、日蓮聖人の我が身、吾人の我が身、一の法華經に裏まれて、これが父子天性、本末相同きものであると教へられ

たのだ、即ち父子、師弟、主従の關係である、そこで「報本反始」と言つて恩に報ゆるといふ事が必要だ。

それでは恩とは何々かと言ふに、先づ四恩と言ふものがある、國王の恩、父母の恩、三寶の恩、一切衆生の恩である、さて此中で三寶の恩が根本で其他は枝葉である、何故かと言ふに、國王、父母、一切衆生の恩は、相對的、部分的であつて、廣い深い三寶の中に皆な含まれて居るからだ、その三寶の中でも佛恩を擧ぐれば、法、僧は既に籠まれてある、そこで經に「世尊は大恩まします、稀有の事を以て吾等を憐愍し給ふ、無量億劫に手足を以て供給し、頭頂を以て禮敬し、一切を以て供養すとも、皆報ゆること能はず」等とある、斯様の意味があつて、佛を「三界の教主」とも、「天人師佛世尊」とも、又「主師親の三德」とも申し上げるのである、三德具足であるから、勿論、國王の恩も、父母の恩も兼て居るのだ、併し佛と言ても、彌陀もある、藥師もある、大日もある、其他多くの佛があるが、此等の佛が皆吾等の爲に、三德有縁の大恩教主だ

と思ふと、其は飛でもない大變な間違ひだ、だから同じく佛でも有縁であるか、無縁であるかを論じなくてはならない、吾々は縁も由緒もない、詰らぬ佛を崇めて、最も因縁の深い慈悲高大の難有い父の在るを忘れてはならない、此佛こそ吾々の父の佛であつて、本尊とすべきである、處が今諸宗の本尊を見るに、佛教の中で小乗の俱舍、成實、律の三宗、大乘の法相、三論等は今は日本に無いから暫く置き、先づ古い華嚴宗、真言宗などは如何だ、共に教主の釋尊を下し卑んで、華嚴宗は盧舍那佛を崇め、真言宗は大日如来を本尊として居る、恰ど貴とい吾父を下して種姓のない者を父とする様な愚なものである、淨土宗、真宗等の念佛宗は、釋尊の分身たる無縁の阿彌陀佛を本尊として、教主の釋尊を捨て、居る、自分の親を忘れて、赤の他人を父とするのである、禪一派の曹洞、臨濟、黃檗の諸宗はどうかと言へば、矢鱈に「直指人心見性成佛」を振り回して、未得已得、未證已證の我慢を逞ふする、宛かも下賤の者が自分に僅かの技量があるのを誇つて、父母を忌

靈 ←

泉

集 →

我 ←

が

父 →

み嫌ふ様なものだ、斯様に父の佛を下げ、母たる經を卑しむ所の、現今の佛教諸宗派は、皆此の大切なる本尊を誤り迷つて居る、即ち根本問題の吾が父を忘却して居るのだ、恰ど支那の野蠻時代の三皇以前は、人が自分の父母を知らないで、殆んど禽獸と擇ぶ所がなかつたそうだが、今吾國の諸宗の人々が、法華經壽量品の吾が父の本地を知らずに濟し込で居るのは、彼の野蠻人の禽獸的なのと同じ事だ、それを吾國の佛教は大乘佛教だなどと、威張つて居るのが可笑しい、支那の妙樂大師が「一代教の中に未だ曾て遠きを顯はさず、父母の壽は知らざるべからず、中畧 若し父母の壽の遠きを知らざれば復た父統の邦に迷ふ、徒らに才能なりと謂へるも、全く人の子にあらず云云」と喝破されたのは確かに千古の明斷である、即ち壽量品の佛を知らない者は父の本國を知らぬ才能ある畜生である、華嚴、真言、禪淨土等の祖師は、才能の人ではあるが、子として親を知らない「徒謂才能」の畜組であるのだ、傳教大師は「他宗所依の經は、一分佛母の義ありと雖も

然も但だ愛のみあつて嚴の義を闕く、天台法華宗は嚴愛の義を具す、一切の賢聖、學無學、及び菩提心を發せる者の父なり云云」と言はれた、意は諸宗の經々にも佛母の實相を明すから、母たる愛の義が一分はある、けれども三千塵點、五百塵點といふ佛の過去の種子を明かさぬので、父の嚴の義が缺けて無い、華嚴經や大日經に佛種不斷の文はあるが、法華經の様に化導の始めから終りまでを究むる下種、熟益、脱益の三益といふものが跡形もない、だから此等すべての日本佛教の諸宗諸派は皆な權教權宗である、方便虛妄である、過去を隠して教へてないのだ、種の缺けて居る脱であるから、恰ど趙高が謀叛して漢王の位に登つたのや、弓削の道鏡が神器を覬覦し奉つたのや、平將門が僭して帝と稱したのと同じである、種がなく本がないから駄目なのだ、こう言ふ事は日蓮上人が『開目抄』其他の御書に仰せられたので、これは決して一家の獨斷私言ではないと言ふ證據は、上人親から「宗々互に種を諍ふ、予れ此をあらそはず、但だ經文に任すべし」と

靈 ←

泉

集 →

我 ←

が

父 →

仰せられてある、之に對して日本佛教の八宗十宗、乃至十三宗三十幾派は皆顔色がないではないか、六百年來日蓮上人の此一大宣言に對つて、答解を試みたものは一人もない、沈黙閉口の儘である、なんと意氣地のない、益に立たない廢物的佛教諸宗ではないか、
そこで釋尊が三德有縁の教主であつて、此娑婆世界の吾々と切つても切れない、深重の縁故がある報恩の根本々尊たる吾が父であるといふ事は、彌陀、大日、藥師等の他方無縁の佛と對格して、どうしても論じなくてはならない、即ち此土娑婆、他土西方極樂世界等の有縁無縁問題で、これは天台、妙樂、傳教、日蓮の各聖が最も得意として論斷された吾家の特色法門、先祖傳來御家貴重の名劍正宗であるのだ、切味を疑ふものがあれば少し試みさして貰ひたい、吾々は始終腕が鳴つて居るのである、是が吾々の安心立命、成佛不成佛の一大關門たる大問題なのだ、亦根本問題であるのだ、一歩進では本佛の價值、本化の大權能を定め、教、機、時、國、教法流布の前後を確

判して、末法の今の時吾大日本帝國に建設されたる、本化の大教を知り分ける順序であるのだ、そこで釋尊が三界の教主であつて、有縁深厚本有無作の先天的の大慈父、大君主、大導師である事は、法華經に於て明かに拜し奉る事が出来る、即ち「今此の三界は皆是れ我が有なり主人の徳、其中の衆生は悉く是れ我が子なり親の徳、而も今此處は諸の患難多し、唯我れ一人のみあつて、能く救ひ護ることをなす」導師の徳、これである、又「我が此土は安穩なり」とは主の徳、「常に法を説て教化す」は師の徳、「我も亦これ世の父なり」は父の徳である、これに依つて吾々の大恩教主として、歸敬すべき父は釋迦如來であるといふことが判る、「唯だ我れ一人」とあるではないか、彌陀や藥師や大日や觀音や地藏や、氣の毒ながら殆ど顔色なしだ、此の懐かしき吾等の父は二月の十五日に入滅されて、其翌日十六日に生ねられたのが本化上行の日蓮上人である、そこで釋尊と本化とどういう關係があつて、吾等には何の爲に出現されたのだらう、言ふ迄もなく釋尊

衆

泉

集

我

が

父

の御名代である、本化の大菩薩であつて、末法の吾々の爲には二つなき大慈大悲の父であるのだ、「父に於て三これあり、法華經、釋尊、日蓮是なり、法華經は一切衆生の父也、此父に背く故に流轉して凡夫となる、釋尊は一切衆生の父也、此佛に背くが故に備さに諸道に輪轉する也、今日蓮は日本國の一切衆生の父也、章安大師云く、彼の爲に惡を除くは、即ち是れ彼の親なり」と仰せられてある、法華經と釋尊と日蓮聖祖と、此の三は正しく一切衆生の父である、其中總じては法華經も釋尊も父で、別しては吾々末法の衆生の父は日蓮聖祖である、そこで特に「日本國の一切衆生の父也」と言て日本國の三字がある、又「一切衆生異の苦を受くるは、悉く是れ釋尊一人の苦なり」との『涅槃經』の文を承けて、「日蓮曰く、日本國の一切衆生異の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦なり」ともある、即ち久遠劫來三徳有縁の釋尊が吾々に御授けになつた、系圖の上ばかりでなく、血族の上に縁故ある、末法當今日本國の吾等の爲めに三徳有縁の父といへば、日蓮聖祖の

御身であるのだ、「吾日本の柱とならん、主の徳 吾れ日本の眼目とならん
師の徳 吾れ日本の大船とならん」主の徳との御文は吾々日本國民が滿
腔の感謝を捧げて、片時も忘るべからざる大慈大悲の廣大なる御同情で
ある、今の日本國民は汝が歴史中に於て、斯の如く偉大の慈愛を以て、國家
の安危を一身に擔はれたる、恩惠限りなき父を忘れて、他にこんな父をま
たと求め得るであらう乎、恐らく一人も無いのは勿論である、而して其父
を忘れて知らないのである、前の妙樂大師の筆法で言へば、殆んど畜生と
も名けらるゝであらう、實に可憐千萬ではないか、そこで釋尊と日蓮聖祖
と其間の約束關係はどうであるかと言ふに、聖祖自から「子とは地涌の菩
薩也、父とは釋尊也、世界とは日本國也、益とは成佛也、法とは南無妙法蓮華
經也、今又以て此の如し、父とは日蓮也、子とは日蓮が弟子檀那也、世界とは
日本國也、益とは受持成佛也、法とは上行所傳の題目也」と仰せられて、始は
總にして在世の上にて釋尊を父とせしに對し、「今又以て此の如し」より

靈 ←

泉

集 →

父 →

か

我 ←

下、別しては末法日本國の父は聖祖御自身なることを、文上一轉して釋せ
られた「今の遣使還告とは地涌なり」と申して釋尊の代理である、「如世尊
勅當具奉行」の代官である、釋尊一たび非滅現滅の方便現涅槃を示して、
鶴林の化を現せらるゝに當り、末法廣布の大法を本化に附屬して、長夜の
闇を破らしめるのである、即ち本化の徳を讃めて、「日月の光明の能く諸
の幽冥を除くが如し」と言はれ、又「蓮華の水に在るが如し」と稱せられ
てある、本化聖祖自ら日蓮と稱せられたのは偶然でない、東方の大日本帝
國、高潔純淨なること蓮華の如き君子國、日蓮といふ吾等の父大救世主を
得たのは、何となく神秘的の意義が了解されるのである、
支那三國の時に、蜀の國の天子に玄徳と言ふ英主があつた、死に臨んで大
臣諸葛亮孔明に死後の事を托して言ふには「嗣子劉禪、若し助くべくん
ば、助けて之を立てよ、若し立つ事能はずんば、公自ら代て立つべし」と、而
して太子劉禪に向ては「亮を見ること父の如くせよ、朕が死後は亮即ち

卿が父なり」と遺言して、總ての大權能を大忠臣の孔明に囑托した、今の末法日本國の人々は、愚蒙なること後主劉禪の様なものである、本化聖祖は恐れながら英明なる大忠臣の孔明に比し奉るのである、そこで白帝城ならぬ神力會上に於て、本佛と本化との深重の御約束と、懇歎の御附屬があつた「日蓮が魂を墨にすり流して、書き顯したるなり、信しさせ給へ」とある、法華經の肝心、釋尊の本懷、皆な日蓮聖祖に代表されて現はれて居る、即ち聖祖は法華經の生きて働く活動體であるのだ。

吾々には遠い遠い印度の釋尊、幾千年と隔たつた昔の佛、歴史も地理も縁の疎遠な佛を、何によつて信仰し得るのであるか、即ち吾々の國に吾々と歴史を同じくして誕生されたる、日本國の先民、絶世の大偉人たる日蓮聖人に依つて、其御言葉を證據として釋尊を信するのである、釋尊と法華經との内容は眞實であるか、偽物であるか、そんな事は凡夫の吾々に到底詮索の出来る事でない、日蓮聖祖を透して始て信じ得るのだ、即ち釋尊、法華

經は聖祖體内の物だ、同體不二の物でしかも吾々に深重の恩恵があるといふ事は、聖祖に依つて知り得たのだ、又釋尊は師匠で本化は弟子であるとか、釋尊が主人で本化は名代であるとか言ふことは、それは佛と本化との間の約束であつて、吾々は之を詮議する必要はない、吾々は本化に依つて釋尊を知り奉るのでなければ、丸で黑暗でわからない、たゞ佛の遺はされた本化を仰で父とするのである、特に佛は末法に於ける大權能を本化聖祖に付屬されてある、それを間違つて見へない父を探り、遠くて判らない父を尋ねて居るのは、佛の遺誡に背く大不孝者だ、「遣使還告」を何と思ふのだ、「如世尊勅」を如何するか、劉禪が孔明の命を用いなかつたなら如何だ、孔明は玄德の滅後に於ける父であるではないか。

もう一つ例を引て話せば、恐れ多い事ではあるが、先づ吾々日本國民の祖先は申す迄もない、天照皇太神、神武天皇の皇祖皇宗である、而して共に悠久の古昔に神隠れ給ひて、今は見奉り仕へ奉る事は出来ない、故に吾々

は、皇祖皇宗の御血統を引かせられて、御相續として天の下治しめす、今上陛下を祖先とし父として崇め奉り、忠誠を盡し、義勇公に奉るのである。これが即ち、皇祖皇宗の御思召でもあり、今上陛下に對し奉つる國民たる至當の態度であるのだ。日蓮聖祖を父とし、親とし仰き奉りて、法華經、釋尊の御本意に契ふ事が出来るのは此道理である。

日蓮聖祖即ち「我が父」である、これが法華經壽量品の父を知る最も正確な信仰である、これが判つてから吾々の根本問題が解決される、それは吾々は本佛、本化と父子一體の身である、先天的の靈の約束、血の系統が聯絡されて居つて、永遠無窮に此身の生を保つのである、世界の爲に、人類の爲に、國家の爲に………此身は「我が父」のその如く働かなくてはならない、それが「報本反始」である、「知恩報恩」である。

そこで佛法の孝子となる事が出来ると同時に、國家の良民となるのだ。「我が父」の理想は「どうだ」「吾れ日本の柱とならん」等とあるではないか、

彼念佛の人々が此國は穢土で汚れて居るから、早く彌陀の西方淨土へ行きたい行きたいと、死を急ぐ様な根性の國民では、今に露西亞と戦争したつて、何で勝つ事が出来やう、假令一時勝つたとしても、長く國家を維持する事は出来ない、「我が父」の理想は且らく因縁によせて「日本」と仰せられたが、小さい今の「日本」を意味するのではない、實は「日本」を以て世界の代名詞とするのだ、即ち世界の中の「日本」でなくて、「日本國」の中の世界と言ふのだ、吾々は父の理想の如く、規模堂々「一天四海皆歸妙法」の宣言の如く、正義を以て世界を統一するの覺悟がなくては、法華經の行者の本分、又國民の本分が盡されたとは言へない。

『高祖年譜』に曰く、「聖教の東漸するは猶ほ暮月の西よりするが如く、本化の此に興るは朝日の東に昇るに譬ふ、房州は扶桑の東僻にあり、則ち大士の此に應誕し給ふ良に以へあるなり、且つ厥の誕辰親り本佛の涅槃に接げり、生滅の序、果因の次、豈に由然なからんや云々」不思議にも十五日と

十六日、御涅槃と御降誕とが接して居る。入滅の佛は慕つても及ばない、幸に佛の遣はされた大慈父は佛に代りて、吾々の爲に此日本國に生れ給ふたのである。

鳴呼、此二月の中旬、一日を隔て、悲喜兩つながらの涙を絞るのである。煩惱ある吾等、罪惡の深い吾々、父の眼よりは善兒も狂兒も一視同慈である、中にも取り別け罪業の重きものを憐れみ給ふのである、そこで吾々は父の教誨に違はぬやう、立派な國民、健全な佛子とならなければならぬ。此の二月の氣節、鳥歌ひ花笑ふ天地の景物は、『我が父』の徳を感謝して居るではないか、此時吾々も心から報恩の涙を捧げなくてはならない、幸福なる吾等、斯くして年々の春を迎へ、國家と共に吾身の成佛が出来るのである、如何に嬉しい事ではないか。

立題旗を捧持するに就ての感想

私は捧持し奉りました立題旗に就て少しく御話いたします、研究大會の結縁運動に警世旗てう御旗を捧げ奉るに就き、人毎に御旗、旗毎に經文祖訓の一兩句を認めてあります、無心に見る人、惡ざまに眺むる人、難有く拜する人、いさましく嬉し人、悉く御佛の御種を得るので、御覽になりまする如く、總陣を四つに分け、これを第一、二、三、四陣と稱し、陣毎に其長は、朝日影に照り耀きて、太陽の光と首題の光明點と映り合ひまする立題旗を捧げて居ります、都て四人抑も如何なる譯でありますか、法華經の神力品に結要付囑と申し奉る四句のかなめがあります、二十八品の功德もつづむれば此四句におさまります、それは如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切秘要之藏、如來一切甚深之事と申しまして、法とは十界の有情、非情すべてのもの、妙法の法であります、自在神力は御佛の不思議のお

ちから、妙であります、祕要之藏の藏は萬寶をおさむ、佛の御果報即ち蓮にあたります、事とは御佛の因行萬徳即ち華であります、個様に四句は妙法蓮華の四字、全陣の要を結んで居ります、略すれば此四本の旗即ち妙法蓮華經、廣むれば幾十百の聖文聖訓、すなはち二十八品、六萬九千三百八十餘文字になります、これが玄義の名體、宗用でもあり、又妙宗式目の五大門にもあたるかとおもひます、妙法蓮華經の五字略して四句となり、廣ふして六萬九千、合して本化妙宗研究大會の大旗の妙に歸し了ります、さればあなた方は運動の學生を見て、凡夫とか僧とか俗とか思はれましては違ひます、一人一人が法華經、一々文々の眞の御佛體、法華經の眞理の活きて働く姿であります、一本の大旗を拜みて佛種を得るもあり、四句の玄題旗にうれしく佛因を感ずるもあり、數多き御旗によりて信念成佛の人もあり、ましやう、まづ御覽あれ、大旗最先に進みて、四流の陣旗號令を傳へ、多くの御旗歩武整々、數より見れば多き様に、齊しく整へるは一であります。

靈

泉

集

← 玄題旗を捧持する感想 →

さて法華經の活きて働きまする功德は如何なるものかと申しまするに、いとも貴き御法、和光同塵と申して、汚れたる市街に福音を傳へ、信ずる者誘ふもの、すべてに成佛の縁を結ばしむる様、彼の一々文々なる佛様の化現にておはせる人々は、慈悲の御眼にわれら衆生を視をなはして、みな様達の目に視、耳に聽くの裡に難有き功德を傳へ給へるのであります、調節正しく麗はしき御唇に「能爲救護」の御文を微音に唱へつゝ、慈悲のこもれる御眸り、學徳の備はり給へる御面貌、衣帽きりつとしたる中には、また言ふべからざる威風を保たれ、惡鬼邪法の輩を折破せらるべくも拜せられ、如何に頼もしく、懐かしく思召さずやは、

われは、自ら不相應も陣長の重き任務をうけたまわり、旭日にまばゆき赤き玄題旗を日毎捧げまする、より多き注意をうくる御旗の影を、一人も多く結縁しまする様にと、可成高く捧げて行きまする。

警世旗感想

八〇

私の捧げました御旗は、「此經は内典の孝經なり」と申す「開目抄」聖訓の一節であります、凡そ有ゆる教への中に佛經ほど孝を委しく説たのはなく、その佛説の中に法華經ほど眞實の孝經はなく、その法華經を御弘めになりました人師達、かの天台傳教大師等の中に、一番適切に孝の義をお示し遊ばされ、御佛の眞理を世の人に教へんため直接に御身の上に踐み行はせられての御教訓は、吾が聖祖大士の外はありません、それ故に御妙判の中には數知れず孝行の御言葉があります、此御文はその中でも最も名高く難有く拜まるゝ御文であります、今皆様に御解りになるやう此御文の前段を拜みますと、能く詳かに御示しになつて有ります、儒宗と申して孔夫子の教への孝養は實に丁寧懇切ではあります、惜きは此現世の短き間ばかりにて、未來永劫の父母孝養を知りませぬゆゑ、眞實で

警世旗感想

はない、外道には過去未來を一分知らぬではありませぬが、これには父母へ孝養の教がない、さらば佛道こそは後世迄も父母を扶けまゐらするならんかと申すに、これも法華經以前の經々にては、自分の得道さへ定らぬほどにて、假へ經文には成佛往生と見なしても、無實なる名字ばかりであります、たゞ法華經は女人成佛、惡人成佛、共に提婆品に顯はれて居ますればこそ『此經は内典の孝經なり』と、仰せ定められました、尙此「開目抄」に下の如く示されてありますから、謹んでこゝに抄録いたします。

外典三千餘卷ノ所詮ニニツアリ、所謂孝ト忠トナリ、忠モ亦孝ノ家ヨリ出タリ、孝ト申スハ高也、天タカケレドモ孝ヨリハタカカラズ、又孝者厚也、地アツケレドモ孝ヨリハアツカラズ、聖賢ノ二道ハ孝ノ家ヨリ出タリ、何況ヤ佛法ヲ學セン人知恩報恩ナカルベシヤ、佛弟子ハ必四恩ヲシツテ知恩報恩ヲイタスベシ、

此御文の「高也」「厚也」の御釋は内外典に通じて、未だ見聞かざる空前

絶後の活釋とも申し上ぐ可きかと存じます、此御文によりまして、内外學問の所詮も知られ、又孝は天地と其徳を同ふして、聖人賢人の經傳煎じ詰むればつまりは孝の一なること、又佛法修行の要は恩を知り恩を報ひて四恩を全ふするにあることを示されてあります、更に「報恩抄」には特に全篇を通じて此御教訓を示されてあります、此御教訓によりまして、はじめて眞實の孝養が出来、なみくの人となり、佛ともなられます、又「新池尼御書」に、法華經を信じ參らする大善根は、吾一人佛になるのみならず、父母妻子眷屬及び上七代下七代の父母等、成佛するぞと示されて御坐ります、私共は毎々佛様や御祖師様の御行爲を拜しまして、眞の孝行眞の報恩を心懸けねばなりません、父母孝道の出来る人は、佛様の「能爲救護」の御恩聖祖の「母ガ赤子ニ乳ヲフクマセントハゲム慈悲ナリ」の主師親三徳の佛祖への御報恩も出来ます、佛様が「棄恩入無爲眞實報恩者」と説かれ、成道の後父王に教へ、更に切利天に母上の爲に摩耶經を説かれたる、又は

← 靈 泉 集 →

← 警 世 族 感 想 →

聖祖の身延の深山に在して、日々五十町餘の荆棘を分けつゝ、遠く故郷の方を拜させ給ひ「思親閣」の芳跡を留めさせ給へる事など、いづれも思ひ出れば貴とさ難有さに涙を催はす程であります、懺悔の爲に私の上を聊か話しますれば、私は故郷の寺に六十一歳の母を留て研究大會に参りまするに就き、老病の身の一日片時も私の不在を氣遣へる母に、一年の在學を告ぐる苦しさを忍びて、涙を呑みて出立の一兩日前ばかりに、決心の度胸定めて暇乞へば、耐能はぬ程の血の涙、母の雙眼より迸ばしりて、わが雙袖を濕ほさしめ、情けの綱、愛の紐、最初より決心して斯くあらんと期したる吾も、母には替へ難し、入學は思ひ留らんと迄未練起りたる惡魔を制して、四月二日出立の夜、母の最後の言葉に「あはれ一年の修學人天の大導師とも仰がれん様、御身に徳積みて給へかし、母は駿河迄出迎ふべければ歸途は共々に身延山へ伴ひ参詣いたさせ呉れよ」と、涙かくして健げに仰する訣別の一語、吾は前日の惡鬼の妨げ受けし母の此嬉き言葉に思はず

伏拜みぬ、「亡き父」の雄々しき御心母に托して、吾を勵ます言葉か、唯今に至りまして海山百五十里、朝夕此時を想出ぬはなき私、ゆくりなくも此「此經は内典の孝經なり」の御旗を得たることのうれしき「祖師の慈悲吾母を守らせ給へ」と私は御旗を捧げます手の打振へるを覺へます程、暗涙を噛みしめて、湧き返へる胸の情火を静かに耐へて、口の中に祈願を籠めました、聖祖は六十歳にして御親を慕はせられました、私は聖祖の御法の爲に六十一歳の母を打捨まして、老年の病の身なれば一ケ年の短かゝらぬ月日、不時に病の重らせ給ふ事なきかと、朝々夢覺めます浮世の曉にも、夜々草枕にも似たる學びの窓にも老母いかに寂しく在さんかとばかり、思出でまして、思は母と共に撮影しました「寫眞」取出しては、あるまじき不覺の涙に呉れます、師親の側に奉へませず、御心にも背く不孝に償ふには、唯々日課の勉強、信念の涵養、母の言葉の徳積みて人を化する事實を行ふことを、忘るゝ暇なく、偶然にも毎日「自修式」の机の隣りの友なる、

年は師父とも仰がるゝ某師の温厚なる此師は故郷に七十歳の老母を殘されしとの事にて、時々女文字の長々しき慰めの書參らせられます至孝、其徳其學は及びませねど、境遇の似たるのみかは、私の母より十歳ほど老給へるに同情せられ、先日も師と共に講主の「今日は母の命日なれば報恩の爲病を侵して講義をいたします」との御言葉に泣きました、御旗の難有き御文より、嬉しさに聖祖の御上より、果は自己の身の上に及びまして、つまりぬ線言をいたしました、内典の孝經を信奉する私共は、此心懸が第一かと思ひまして、遂々長々しく御話を致しました、南無妙法蓮華經。

最 蓮 房

上人の生國は「洛陽」と「駿河」との二説があるが、余は斷じて後者を信ずるのである、先其理由は、本門の大教は始め東國に發興するので、聖祖は極東の安房に、其他六老僧を始め多くは關東の御出生で、俗門の弟子、富木、

曾谷、太田、四條、上野、松野、江川等皆東國の人である、從て御教化の跡は相摸を中心として、伊豆、武藏、下總、甲斐、駿河等が根據地となつて居る、聖祖滅後、像師、大覺師等に依りて始て關西に弘教されたので、之が偶然でなく、必然に定まつて居る約束なのである、故に余は斷じて、宗門教學上聖祖の有力なる對告衆としての上人は、聖祖及び諸弟子檀那と同じく、六萬恒沙の上空として、東國の中央なる「駿河國」の御出生と信するのである。

又御名の「日淨」「日榮」の兩說の中では、余は「淨」の說を取る、其は何故かと言ふに、その確たる立證は兎に角、信念の領解上、どうしても「淨」の文字に深い深い意味、難有い難有い、意味が認められるのだ、言替れば余は「榮」字よりは「淨」字に就ての方が大に敬意を催されるのである、況して「最蓮」の御字にも對して居り、上人一代の性行に於て「淨」字が最も適切に思はれる、殊に「御書」に明かに「日淨」と示されてある。

宿縁深厚にして、絶海の孤嶋に 聖祖に遇ひ奉り、本門大戒受職灌頂の

正式を以て、師弟の大禮を行へる上人は、當初早く既に現生妙覺の域に透徹して、一見舊の如く、師弟相顧みて「在々諸佛土、常與師俱生」を誓はれたのである。

爾來、生死一大事血脈、草木成佛口決、得受職人功德法門、祈禱法門、諸法實相鈔、當體義抄、立正觀抄、十八圓滿書等、合計十一通の御書に於て、如何に當家肝要の法門が、上人を對告として發顯せられたるかを想像され、又上人の學解が如何に深淵なりしかを窺ひ得るではないか。

過去ノ宿縁追來テ今度日蓮ガ弟子ト成リ給歟 生死一大事血脈抄

自過去無量劫已來有師弟契約歟 最蓮房御返事

北海の絶域大法の爲め罪なくして配處の御住居、一見舊知の友を得たる師弟の情、此間の情誼、假令何時迄歷るもいかで忘られやう、骨肉舊友の情とはこれである、更に次の御文を見よ、

餘リニウレシク候へバ契約可申候ハン、貴邊ノ御勘氣疾疾許サセ給テ

都へ上リ候ハ、日蓮モ鎌倉殿ハユルサジトノ給ヒ候トモ、諸天等ニ申テ鎌倉ニ歸リ、京都へ音信可申候、又日蓮先立テユリ候テ鎌倉へ歸候ラハ、貴邊ヲモ天ニ申シテ古京へ可奉歸 最蓮房御返事

文永十一年三月、聖祖御歸鎌の時上人の御哀惜の情は如何であらう、吾人は實に推察するに餘りあるのである、乃ち翌文永十二年、上人赦に遇て歸るや、舊棲の京には往かず、父母の國の駿河にも留らず、直ちに 聖祖の跡を追て身延に詣でたのである、常隨給侍の長年月、絶海三年の懷舊談身延の澤の秋深き夕、幾回か侍坐の諸老をして泣かしめたであらう、上人が佐渡流罪の原因は言はずもがな。

而ルニ貴邊日蓮ニ隨順シ又難ニ値ヒ給事、心中思ヒ遣ラレテ痛シク候これ固より後より前を總べたる御文であらう、併し 聖祖の宏化を輔翼し奉りたる上人である、一は東より一は西より、前後殆ど時を同ふして、共に罪なくして譖の爲に、同處に配流されたのは不思議ではないか、流罪

の原因は知れぬのが正當である、假令知れたとしても、それは第二義第三義である、偶然でなく先天的に聖祖の本地の御弟子として「常與師俱生」の色讀の約束を實現せられたのである、宿縁深厚とか、骨肉舊友の情と言ふは、まだ手ぬるき言だ、六萬恒沙師弟同體の人が、暫く師となり弟子となりての、善巧方便の御化導である、聖祖の御流罪、上人の御流罪、しかも同年同處、同じく東國に生れ給ひて、其御名も「蓮」の一字が契合して居る、聖祖示滅後、上人は長へに其齡を保たれ、弘安五年に後る、事二十六年、延慶元年四月、甲州下山の草庵に入滅された其以前、余は想ふ、常に下山より身延へ一里の阪路を老杖にすがりて、聖祖廟前の水を清めたであらう、聖祖を失へる上人の二十六年の如何に長かりし事よ、墓木薄暗き身延の山の夕暮、聖廟の香烟霧を縫ふ下、幾回か上人の口には「常與師俱生」を唱へられたであらう、それが永遠に、不滅に今も尙ほ聞かる、やうな心地がする。

詣暹公廟

魏峨暹公廟	碧松聳半空	復嶺翠萬重	前溪一水通	石槽數十級
登攀欽高風	清風自脫俗	青苔封古宮	想昔慶長歲	宗論亂濛々
唯師廣長舌	立言百難融	雖由祖靈威	豈可沒大功	法燈傳益耀
宗風揚愈雄	况復身後德	除疫極人窮	巧說樓那辨	妙筆乾遠同
創寺數十基	設化誘群蒙	延山挑法燈	德望一世宗	生前輝光榮
死後德業鴻	二百五十年	于今想師容	噫余汲遺流	欣仰慕暹公
悠悠千載後	英縱史傳中	今日拜靈廟	徘徊落日紅	師去師猶在
遺韻托松風				

宗家一塊肉 今置軍籍中 國家勢正急
 形體豈惜勞 身心托法皇 安神立命在

次夢醒集龜上人韻送野口泰晴東行

陽春方駘蕩	季節屬殘梅	新雨春漸熟	四山碧雲堆	黃鳥辭幽谷
百花爛熳開	閑人烟霞癖	風光為良媒	朝發貞松巖	鐵車馳崔嵬
駿南眺望好	水山堪伴杯	三保桃源鄉	青松白砂隈	豈讓蓬萊仙
地接薩埵臺	君曾住巖嶺	慷慨固秀材	回想蓮祖跡	遲遲應徘徊
富嶽天下冠	富水亦雄魁	一歷此勝景	心胸自奇瑰	函嶺真奇絕
溪流青於苔	行程車上客	閑雅詩應裁	一百餘里路	駸時應往來
况亦君此行	揚揚錦衣回	君與余同學	愧吾獨不才	碌碌在林中
志操不雄恢	遙憶君此行	遊杖樂深哉	不幸難同伴	殘留學童孩
固是法城士	偏歎宗家災	協力期護法	冀君志勿摧	春風艷和節
離別情緒催	山河氣節異	平安希早徠		

再次往日贈呈詩韻紀于野口君金蘭薄

松竹繞四境	林園植老梅	古刹蓮永寺	堂閣巍焉堆	此裡旂檀林
丙申十月開	宗制一煥發	輿論爲此媒	與君四閱年	學路涉崔嵬
艱難濺淚血	快興伴酒杯	春遊賞櫻桃	曳筇淺間隈	秋郊吟月色
風流倚樓臺	慷慨或振腕	宗家乏良材	白山暮日邊	感傷幾徘徊
富嶽聳窓外	嶄然規模魁	龍爪手可弄	蜿蜒真奇瑰	持公廟空存
偉業委青苔	與君一拜詣	瞻仰嘗詩裁	此交固鶴鶴	心情相往來
與君相提携	不啻幾十回	宗國艱難際	頻想棟梁才	英雄弄風雲
豈不期雄恢				

駘蕩春色花嬋娟 滿城批紙祝凱旋
方是正氣發揚際 旭旗高聳兵陽天

題同影寫真後

攝竹內、田中、三氏同攝影

日曜放課日	時屬綠樹天	四友携手遊	清流晁水邊	途上偶提議
一堂茲攝影	回顧昔年交	厚誼不短少	同窓三春秋	深情似兄弟
兄弟天真親	何時相背畔	山河或隔絕	心情常來往	一對此寫影
恍有當時想	花月易虧落	少年豈優遊	相約成業後	他時英名輝

戊戌七月某日與衆朋會於福住樓

席上似諸氏

擬東湖正氣歌無韻

宗教革命運	倏忽迫眼前	或爲雜居論	內外論議喧	或爲圓粹議
上下鬪筆舌	曾有惟一教	玉石東同架	今有救世軍	巧言表博愛
形勢如斯急	敎家皆昏眠	英傑何處存	蒼生望革命	
日宗氣慨在	古來歷諸宗	雖時有隆替	宗粹驟發光	乃爲革命運

丙申開大會	乃助管長斷	興學開端緒	三箇旂檀林	鼎立創基礎
卜千代田地	第貳教校在	開林既三歲	群英卷羽翼	鳳雛羽翼成
費運極隆盛	或為宿舍營	為教場新設	公然運動會	又設體操械
戊戌春三月	新生四方來	附屬小檀林	又出卒業人	正義固堂堂
議論向無敵	氣運頻有利	校議漸旺盛	一為藤枝遊	再為此日會
吾聞祖誠切	水魚可同心	侮辱存他方	兄弟豈閱牆	東亞旭日國
日宗光輝徧	吾有首題旗	欲樹喜馬嶺	一揮真理劍	慶殺妖魔群
國教始建立	天邊旭日燦			

歸省偶感

歸省何所見	依然風色靜	堂上雙親在	皎皎雪戴髮	老衰而老軀
迎兒顏色喜	不言家門貧	唯祝余健來	二友相携到	同行俱快愁

想 ←

老親均兒視	慰撫又愛憐	新衣不忍着	父母纏弊衣	安逸不忍貪
父母平常勞	鄉居三十日	不似客窓天	怡怡事閑遊	机上不對書
吾有愛愛姊	家居未嫁他	近里學操絲	時時省老親	愛吾唯有姊
愛重及二友	厨事自不倦	村語話吾儕	有期不可留	十日歸操絲
家庭吾姊去	寂寥耐嘆惜	花開無報人	有肴無調者	同朋皆慕惜
空望操絲村	近隣有稚兒	言笑可愛玩	三日認吾顏	追隨不離影
吾愛無他意	背負又手抱	晨夕投兒好	撫育如弟妹	一端隣邑去
五日不見蹤	哀惜不耐情	忙如喪掌珠	鄉居得新愁	失姊又失兒
空眺他邑天	頻想姊兒還			

→ 華

花月嘆

無韻

有朋從遠方 快談及月花 花月約易違 風雲明闇多 一夜月清明

輕裝輕吟步 得意任竹鞋 佳景江南邊 尋友不相遇 訪花遊春園
 春園終宵歡 杯裡生煩悶 可憐風流客 此時零花情 落花紅紛紛
 黑雲影悽愴 黎明步曉月 有約入花郊 郊裡一小櫻 花雲靄滿山
 花月自多情 有時惱殺人 認得紅一點 嬋娟萬綠中 和風吹早雷
 芳香襲衣袖 清雅景可娛 濃色兼淡泊 黃鶯囀南枝 啾啾吟調佳
 江涯一樹梅 春淺尙有興 經寒發清香 雨過四山碧 此間不假筆
 天然真妙畫 黑雲始散開 天日再玲瓏 百物自和暢 悠悠娛吾意
 歸來學窓裡 知友皆歡迎 俱語花月事 感慨淚淋浪 吾聞花月界
 輕薄多詐謀 誰知天下理 禍福不他來

贈某生獲病歸鄉

抱病辭學窓 快快向桑梓 嗚呼子可憐 交情余亦悲 朔風拂枯林

想 ←

霜雪景蕭條 天涯對破檠 低徊空斷腸 君固有厚誼 同窓相與親
 春花與秋月 居常約知己 淺間山色美 安倍水光勝 連袂幾携手
 鶴然弟兄情 書窓諮疑義 短灯挑法論 交誼不短少 一閱有餘年
 一朝遇悲運 山河負相別 如喪掌中珠 如失插瓶花 師親在堂上
 日夕看護厚 快復可非遠 屈指待君還 夢中常來往 寤寐與君接
 况復雁信媒 日日交情思

錄岡本圓達君之金蘭薄

知己不易求 千載一相遇 交誼爲難結 朋黨多睥睨 與君會東海
 明治戊戌夏 同窓第四房 閱年交親情 山生及岡子 與余併三人
 意氣相投合 窃擬三傑士 君固金城士 吾是豆州產 山生實九州
 盟約真偶然 才學與文章 人推學林中 氣概與操節 余服同窓間

山生亦俊才 宗界一快兒 慚吾凡庸士 將來恐難伍 况君與山生
清節璧玲瓏 不似余狂癡 自任英雄量 己亥春三月 余爲軍營身
辭出第四房 四房缺一人 偶有轉房事 君亦別山生 歸來學舍裡
三十鼎足分 四海是吾家 嗷嗷不須嗟 何日奏業後 勝地語古今

九八

錄于重盛快進金蘭薄

生吾者父母 教吾者師保 助吾娛吾者 惟爲快進子 曾遊延嶺日
知顏結交誼 爾後數閱年 復會貞松林 慰諭加吾厚 障壁撥吾軀
不啻溫厚情 再會情益親 同窓幾閱歲 苦學與君勉 朋衆兮又寡
知己獨推君 戊戌春三月 吾疾在病屨 看護扶吾母 晝夜不飲省
己亥三月天 吾一入軍營 來訪與慰藉 供給依君安 維二銘吾神
生涯非可忘 悲哉吾未酬 徒受君厚情 君爲沈重質 吾固磊落性

規諫幾勞君 吾爲馬耳風 悔悟遂不及 依賴空屬望 噫吾有多過
懶惰無所改 唯因君忠言 時々得顧省 相携誘吾鄉 吾鄉富景勝
交誼既如斯 師親又認知 己亥夏七月 相携誘吾鄉 吾鄉富景勝
亦有溫泉勝 屬君長優遊 清氣養吟腸 膠漆非虛事 如今與君約
五十生涯間 終始提携去 同得無上道 多生救世界 此時尙同蓮
一葉同敷坐 何況五十年 豈敢有離畔 形軀或隔絕 心情常往來
紙筆固有限 豈盡無限意 天上一輪月 萬古照吾心

題于學室

富嶽之陽 峻海之濱 貞松鬱鬱 白蓮馥郁 維持公趾 殿堂高聳
晨觀芙蓉之雪 夕臨三保之松 松風晝吟法華聲 溪流夜浮鷺峰月
萬卷典籍 堆積環坐 是則道人安居之地矣

九九

休課歸省前一日張別宴
於福住樓席上似諸友

明治卅年維丁酉 祝融逞威七月天 不期相會張盛宴 和氣氤氳長留春
 學園創開丙申歲 豫期養材出鳳麟 桃李不言蹊自就 群英相追德有隣
 誰論先進與後進 折衝禦侮弟兄人 弟兄五人而交友 不知他鄉有苦辛
 晨汲清泉供佛祖 夕挑紅燭相與親 挑燭汲水慕聖蹟 况復講堂論玄頻
 春花秋月俱提携 夏螢冬雪同精神 歲月再再一寒暑 苦樂窮通任天真
 君不見吾道如今亂紛紛 奈其塔中別命論 又不見邪說浸潤浸教田 誰
 教蒼生知要津
 死身弘法聖所誨 立正安國祖所宣 機不可失今正是 區區何取墮後塵
 異體同心祖誠切 唯合為輛又為驢 亂臣十人奏承平 有為不成同盟人
 今日相會三十人 他日英名千載傳 痛飲不妨今夜會 宜須風流酌芳醇

富嶽巍巍聳天際 吾曹功業亦可倫 富水蕩々朝東海 吾曹意氣可期均
 今日咫尺靜岡夕 明日千里故山晨 天涯離散雖相隔 勿忘言笑情交新
 暫別亦猶非無淚 離別筵上語見真 往矣宗海益多事 歸來研鑽與勉旃

送丹澤教師辭任之東國

國家正是多難日 宗家正是多難時 滿空妖氛紛如塵 赫々真理鑄不披
 立正安國議堂堂 此是吾家固所期 經榮俊傑幾人在 慷慨卓絕獨推師
 丙申開林四閱歲 豫設學園育鳳兒 師徒提携當此事 恩情鶴鶴交誼滋
 一朝高師辭講筵 將向東方試驅馳 東國從古多英傑 可書宗家百年基
 此行固屬大快事 離堂豈題別離悲 中原不日見廓清 得意握權非師誰
 學園今日開別宴 貞松山裡講堂湄 此間不須酌芳醇 一片真情寄想思
 季節入秋清如水 輕裝軍鞋有道姿 行矣鐵路百里程 金風玉漏風色奇

送清水歸一君歸鄉

學道不易處貧難 道苦多途貧辛酸 未如生別五為難 苦在心兮酸在肝
 大道陵夷規網沒 異端四起弊習出 丈夫豈辭當鼎鑊 千艱萬難甘如蜜
 別恨蕭條景如秋 陰雪不開天亦愁 君去天涯何處到 送君樓外風颼颼
 螢雪多年與君學 豈憶今日生別憂 行矣他年若相遇 錦衣榮名語此別

其二

去年與君遇 客鄉喜親知 淹留殆一歲 忽見別離悲
 同窓呼兄亦稱弟 終始不愉骨肉情 小弟既逝意益酸 哀情因君慰平生
 會憶往年在都日 三人相携同撮眞 小弟曩亡今別君 空對寫影催哀頻
 生別死別兩相會 如今豈耐送君悲 天涯離散斷腸恨 况復柳絮翻風時

想

淺間之花晁水月 爾來誰與曳吟筇 男兒不做婦女態 僅將啼淚付酒觴
 與君同是法城士 苦學未酬吾宗家 夏木春過將結實 暴風淫雨相撲斜
 君在朗峰余雙椽 頻遇變遷幾漂流 岳陽一歲不得志 憐君千里事遠遊
 方今邪敷蔓蕪際 期君銳意可精研 古人螢雪伴書紫 安以歲月使均烟
 送君分水橋畔晚 柳影帶愁水空轟 橋畔與君無別語 唯言他年舉英名

華

送深見靈照師榮轉之行

無韻狂體

宗海到處有名花 何必遠尋異山花 雙椽之花延嶺花 花不負人人似花
 况君久培學園花 春蘭秋菊鬪芳花 殿山山下老櫻花 一朝耐祝拔群花
 如今風光似落花 教海到處不見花 此時有君爛熳花 道風德香馥似花
 送君惜君且比花 自愛宗海靈瑞花

題大慶寺靈松 無韻

維昔祖所栽 年歷六百載 龍幹聳半空 虎蟠滿四涯 日光雲霧遮
 月星雷電耀 翠滴法性水 風拂煩惱炎 想昔遊化日 龍鬼奉祖命
 天上一株松 人間萬年榮 似卜宗運暢 枝葉與年殖 寺呼大慶名
 山號圓妙稱 吾來讀靈松 正是四海春

花月歌

東台墨陀有名花 墨陀之河水映花 東台之山雪昭花 皎皎之雪朦朧花
 一夜月下訪櫻花 此花神州第一花 花下女有容如花 嬋娟娥眉美欺花
 少年固是人生花 勿耽少女又與花 秋風颯颯散此花 人生得失有此花
 勿觀東台墨陀花 勿觀娥眉嬌態花 男兒須期榮譽花 青史千載鮮於花

玉爭歌

一夜樓上酌金卮 醉興陶然惹情思 忽見天色暴暗憺 黑雲一抹烈風吹
 二龍出沒見雲間 起雲捲風眼光閃 猛然爭玉決雌雄 玉遂壞兮爭方休
 抱玉片兮昇九天 九天渺々南方涯 詣天宮兮誇威勳 天帝封龍紫雲榮
 天色始霽碧日鮮 春風三月花影開 玉兮裹錦納金匱 和氣變黶滿天宮
 君不見二龍爭玉玉片璨 玉兮壞兮不改色 二龍有榮賜天駒 琴瑟相和
 明樓裡 嗚呼二龍意氣壓乾坤

紀事

開花之風却散花 養實之雨還墮果 歡樂忽見伴憂鬱 浮世畢竟正欺邪
 春樓快夢猶未覺 耳邊忽聞百雷轟 前憂後艱相踵至 使吾幾回斷心腸
 想昨携朋遊夏郊 綠樹蒼蒼水之濱 吐月峰下晁水上 山紫水明娛吟神

青雲不關白雲身 秋心不須盛夏時 去辭清境遊雅界 蓬萊之閣壯且美
 蓬萊閣上春風裡 風流弄花伴酒觴 芳醇佳肴又絃歌 金罍玉筍添來盛
 美人巧調新樣曲 蝶舞鶯歌錦障中 翠鬢細腰幾嬌態 輕霧淡雲情不窮
 抱玉錦屏紅帳間 戲花翠帷重幄裏 徃昔嘗聞比翼鳥 今日始見連理枝
 比翼連理合歡夢 雲霧此時環坐生 脈々樓外春水流 鴛鴦雙浮歡意長
 無賴駒隙馳不還 美人寒簾傷日晚 暮雲依依到於遠 情緒遲遲欲別難
 出樓斜陽細雨急 回視看樓樓不見 大隄楊花向風翻 千條翠摧撲吾面
 有朋慰余蕭條間 共語前遊歎易移 遊子僅欲招微輿 分水橋畔呼酒卮
 歡娛一去憂愁催 陰雨暴風凝不開 費有醜事關炊糧 不祥從來偶然來
 不須牛刀裁小鷄 今昔同視何迂濶 况復內憂外艱際 何事區區逞抑壓
 嗚呼余學佛家道 彼何爲者事紛爭 其蹤渾似刀筆吏 煮豆以豈情可恰
 老僧空畫古昔夢 耐笑暗鈍不知時 若使佛祖今日在 亦見臨機改革趾
 君不見佛陀昔日修行日 喫美味供發真智 至今緇流可書紳 苦行畢竟

想

非所期 吾嘗以身委佛祖 夙懷慷慨未得果 苦學幾年空落魄 如今回
 想幾慨嗟 歸來百憂蒐胸襟 不似高閣浮雲身 終日無限歡娛興 忽爲
 無限終夜噴 冤愁可憐及同儕 誠神豈莫徹天地 朝來陰雲合不散 愁
 雨濛濛乾坤寂

次韻酬田中耀運氏

駘蕩之春蕭颯秋 不妨把酒遊高樓 綽綽自有閑日月 區區榮譽何所求
 吾抱一片慨世魄 江湖漂零貧窶客 二十年來經營業 悲憤血淚向誰盡
 風流嘗一伴雅鄉 樓頭花月任閑適 維家維宗遂忘却 獨有杜康遊意長
 錦屏夢濃雙鴛鴦 紅帳恨深比翼情 比翼連理娛何極 春風夜夜紅桃香
 相遇頻喜雲霧綠 風雲有妨覆月鮮 黑雲暗愴月濛濛 夜色慘愴天地振
 落花風裡紅紛紛 孤月流水影沈沈 可憐花月空蕭條 不耐樓頭黑雲翻
 殿山櫻花品海月 江南第一賞風光 沿岸楊柳起畫樓 紅紛紛娟競蘭芳

回顧往事如流泉 逝者如斯遂不返 風月從一才郎去 江南寂寞稀芳蕓

贈山本潤兮代簡 無韻狂體

花光鳥影春風季	最是花月得意天	霜雪委水菖未萌	沈思吾類哀悲運
容鳥子兮容鳥子	羨君春時受好調	菖蒲娘兮菖蒲娘	憐汝泥裡獨沈淪
君與花鳥均好運	吾伍風霜泣苦寒	君歸故鄉侍老親	移身故山棲良剎
錦衣輝輝光榮耀	錦腸燦爛名聲揚	孝養扶宗兩相全	况復山水秀麗地
吾遊天涯隔家鄉	客窓碌々伴書卷	落魄軀空憂宗家	冲冲情獨學吾道
南船北馬貧窶身	內憂外艱頻相逼	浮世無常轉耐傷	天降殃禍奪君師
壽師短命不應名	不幸豈管君與師	宗家正是式微時	頻喪導師嗟可悲
吾亦受殃於上帝	三春佳期伴病蓐	藥石有驗保微軀	老親憂愁僅可償
考試十日苦精神	漸得僥倖昇級榮	嗚呼憂愁不可語	須伴花月吟春風
不須風霜淚漣漣	五月池塘菖可開	與君同學雙椽樓	同窓幾歲誓交情

春花秋月與君賞	夏螢冬雪與君學	容鳥子兮菖蒲娘	當時同住明月樓
樓臨滄海美景色	明月清風與君遊	容鳥與菖同交膝	滿坐杯盤添歌舞
佳人調琴新樣曲	鶯囀花枝春脈脈	如今天涯雪漠漠	春風吹兮花鳥笑
唯應對花又眠月	山河雖異花月同	吾將訪君語昔事	七月考試修了後
饜吾不要須別物	富嶽之雪富水勝	吾亦贈君無別物	意中流水意中山
共語舊遊笑且泣	喜憂唯有知己意	容鳥子兮菖蒲娘	春風秋雨兩樣情
潤兮子兮磊珂生	落花流水情緒多		

次韻新佛教健兒詩

駘蕩之春荒涼秋	不妨把酒遊高樓	金卮玉盤天上樂	歡娛如涌忘客愁
今時不吟又不搨	千萬後恨亦何及	同遊渾是風流人	不須慷慨且悲泣
呂望諸葛固遊民	有時偉業千古振	吾儕何讓古人量	放伴花月醉吟頻
行藏隨時渾如此	人生五十生又死	醉生夢死非吾志	蛟龍得雲豈不起

優柔之議釀內奸 急激之策惹外難 敵界大勢今如斯 獨步不關祿與官
 英雄從來氣豪烈 多情亦時存淚血 日夜流連醉高臺 紅顏之花細腰雪
 功名英譽何所尊 風月吟詠爽神魂 昨夜樓上美人淚 青衫今日留其痕
 淚痕一點見肝膽 多情豈亦示勇敢 駿府城外春園花 景狀風姿耐惹感
 吾嘗往時拋此軀 幾遊江南訪花雄 如今天涯雁路隔 恩情轉變頃刻中
 回頭玉樓指顧間 一里郊程傳雁語 喜峰蓬萊共仙境 並存花笑鳥吟處
 昇登三層高樓上 對花月明酌香醪 落魄憂苦耐忘了 大杯壯語氣何豪

擬留別花月歌

吾去西南君留東 維時落葉飄秋風 滿月光景惹別恨 荒涼林色眺望空
 回顧昔遊神仙宮 今日何耐冷房櫳 歡樂一朝春宵夢 萬憂惹來長如虹
 慨來時時仰蒼穹 胸愁不似日瞳隴 俗界毀譽一何煩 徐欲遁世伴樵童
 可喜造化手段工 俗塵裡外逸英雄 金殿玉樓豪遊快 歡娛盛宴學王公

不須勞役擬村翁 况復生涯蠶書蟲 菖蒲花開端午天 悠悠弄花池畔鴻
 霜色皚皚山間路 金鞍揚揚驅玉聰 想昔本成田樓裡 耽酒流連寄此躬
 春吟殿山萬朵櫻 秋賞海晏霜後楓 不啻愛賞無情紅 幾遊解語花玲瓏
 花笑鳥歌仙鄉會 金盤玉卮興不窮 以下四句欠

代簡酬潤兮雅友

霖雨如絲繞草廬 凄然此時繙蟹書 可喜天外信忽落 親友筆墨情不疎
 君言金卮為良媒 同行相携遊樓臺 情境宛然如華胥 卷舒吾閱幾數回
 玉篇琅琅絕塵埃 筆華爛熳真秀才 魔緣妨道昔日事 今日驅魔笑眉開
 豪遊可酌花下盃 嬋娟可愛水邊梅 聖兮賢兮吾不關 自任風流氣雄魁
 休日豈壓俗客頻 君固舊盟愛花人 秋宵寂寞雲隱月 球燈為月花生春
 言外之妙見天真 天真爛熳不染塵 耐想樓上春雨夜 多少落花報清晨

君不見花容玉肌天上娘 獨有秀才共相親 又不見紫冠碧裳水涯蒲 樓
上有時對佳賓 得失吾儕常所馴 豈對風流為私曠 知過遠報却多謝
更期舊約氣愈振 與君同窓同學身 不啻歡樂還苦辛 况是前遊第壹周
好期佳辰坐錦茵

紀于池田博耀兄金蘭簿 無韻狂體

名維良平姓石原 固是東海豆州人 童幼雍髮號真解 爾來佛門寄軀身
螢雪幾年停他鄉 風月多歲背師親 學海渺渺路百端 真理淵淵奈難探
圓頂方袍雖形美 心猿意馬神易動 妙法蓮華口空唱 關關唯鳩意頻期
嘗從都朋迷紅衢 金心鐵腸化如飴 宗家隆替付等閑 一身重任屬徒事
雖然吾是法城衛 一臂豈莫盡宗國 縱橫計策雖難做 唯有慷慨一片腸
樓神閣上討宗義 雙椽樓頭研真秘 千里負笈事漂流 幾多山河寄窮軀
與君相會貞松巖 丙申晚秋落葉時 落葉辭枝悲別離 與君相遇喜知己

想 ←

爾來秋去冬又來 春逝夏過再遇秋 耐想昨歲今時事 流陰如馳感何堪
春花伴遊淺間嶺 秋月同賞安倍水 不啻山水愛景勝 樓上同戲解語花
此間佳交唯有君 晨夕追隨弟兄情 况復明窓鬪論茂 講堂亦驟相辯難
同窓一閱年間事 喜憂得喪與君親 假遇天涯離隔際 為君豈絕晨夕情
我唯有一節義心 擊之鏘鏘石聲鳴 石魂雖頑豈忍棄 昔人磨得連城壁
我誓期探大道真 真乎非偽真維真 解真誰乎即真解 磊砢巨璞放真光

江南花月歌 無韻狂體

山乎吾愛花時山 花乎吾愛花中櫻 春風有媒節四月 山水秀處得此勝
花月從來娛人心 山水畢意雅人知 不見山吾心不平 不見花吾心不樂
吾愛山水又花月 頻馳吟杖試風流 殿山之櫻江南月 此地此興不偶然
與君再會江南邊 花月有約任君選 池塘菖枯景蕭條 又遇爛熳櫻花天
君不見神州到處山水佳 如今占得花月勝 又不見花中有王其名櫻 花

→ 華

時春山紅霞連 此快此興亦難得 樓上可醉又可吟 君且鄭重愛花山
吾應春時伴櫻花

一一四

殿山花月歌 無韻

尋常一樣殿山花 麗容不異天下春 尋常一樣江南月 清輝豈異天下月
濤囓阜頭雪飛沫 金龍閃閃昇東瀛 七砲臺邊舟可棹 八山樓臺好酌杯
樹滿山頭雲爲帷 出谷黃鸝弄好調 故蹟人去春草繁 殿山之花幽而悽
不是尋常一樣花 自異尋常一樣月

狂兮歌 疑狂兮歌

狂兮狂兮吾愛汝 汝嘗一慕石氏賢 高樓日夕不改節 何約關雎不契緣
學舍有制未卒業 碌碌在樓待後年 狂兮狂兮吾愛汝 汝又嘗受艷郎憐
錦繡爛熳招客夜 一笑傾國才萬千 千萬妙策誑艷郎 倏忽直握全盛權

狂兮狂兮吾愛汝 石腸不堅心漸遷 吟步幾不向汝來 昔日芳情何忽焉
不用孤閨濺紅淚 只合感悟任自然 狂兮狂兮吾愛汝 汝能愛賢不顧錢
恒慕石郎時發狂 郎至自若不來顛 汝自若時吾未感 汝欲狂時吾欲醉
落花流水多少意 春風秋雨在誰邊

三俊歌

宗界俊傑三男兒 學林同會第四房 可擬前漢三傑士 又類蜀漢三俊雄
厭脫野史脫俗人 脫俗豈自不傷神 世人不識楚山悲 數見慷慨淚濕襟
柳川學士有篤行 品操清朗火中蓮 才藻兼涉內外典 多情亦有憂宗淚
巨璞先生濶達士 恒披胸襟接衆賢 多不好書唯優遊 吟花賞月養浩然
三士各皆賦特質 月花雪景與可悞 庶幾他日宗海多難日 協力誓死殉
宗家

一一五

日曜紀行漫筆

午前七時發貞松 輕裝單靴不須筇 考試逼來在眼前 休暇今日開胸
 此行有侶名狂龍 君於巨璞同鄉里 况亦林中秀逸士 豆州名譽屬此裡
 途傍軍營故迂迴 軍籍吾儕催追懷 草深最適夏月景 綠樹傍水白顏多
 人生桑滄感何耐 途索佳人家既空 索人餘事弄風光 淺間園裡鬱樹梢
 英雄從來稀知遇 偶遇名士遂不見 美普教會試參詣 矚目新態感慨頗
 內外邦人老與少 啣唔喃喃媚天神 食小亭餅飽口腹 弄書店頭利眼識
 本街訪親慰久澗 親情自是似疎遠 家人屬余有規諫 階上美人送目言
 櫻湯一浴濯塵垢 綠亭一喫拒飢渴 身軀加勢勇益振 更向寶臺院裡行
 寶臺院近回衰頹 境內殷賑類淺草 况亦堂內勇士像 身浚光輝耐渴仰
 劍舞之技馴象術 或有泥像寫嬌態 宛然此裡雜還界 使人耳目驚且悅
 余與龍生縱觀覽 朝來半日至此了 餘勇鼓來企新興 更向晁川試吟步

靈 ←

泉

集 →

想 ←

華 →

喜見蓬萊仙寰鄉 松風月影自清爽 江河水韻初音鶯 吾無妻孥有此情
 飛鳥既盡弄弓矢 雉兔去後學狗行 玉容花樓應接間 吟身一在畫圖中
 君子不近危害地 倉皇廻步向東方 東方有嶽倒白扇 東方有松綠千重
 七軒街上見軍士 邂逅短時傾心情 公論傳托致將軍 寫影一枚贈舊盟
 夕陽映流一水紅 餘輝如虹閃西嶺 酷暑漸銷歸學堂 晚風清冷吹吾袖
 終日養得浩然襟 堪洗學窓憂與愁 吾曹綽綽存餘勇 笑他俗士心膽小
 奔流焰炎看不驚 自是英雄落磊量 身在考試百忙間 閑中日月弄風光
 取之不窮造化功 風清水爽無盡藏 吾且味得此裡妙 羽化登仙脫塵寰
 貞松夜色幽靜足 綠苔嵐光絕俗緣 讀書課了遊華胥 魂飛淺間晁水邊

國のためみのりのためと思ふとき

いのちも身をも惜まざりけり

横川御庵跡

像法過ぎて末法の
 はじめの名残今こゝに
 柚立山の延歴寺
 西都の北に聳へたり
 六百七十有餘年
 榮華の夢に覺めざりし
 化城の跡は埋れて
 三千の寺塔草繁げみ
 傳教大師開教の

宏化の跡は絶果て
 法流濁りて數百年
 源遠くして末益長し
 手に迷雲を拂ひて
 天日を長空に輝かし
 折伏の劍を揮ふて
 生茂る荆棘を刈りしは誰ぞ
 大願を立てん、日本國の
 柱、眼目、大船たらん
 傳教の御山に學びて
 大師の法を傳ふ

あはれ吾が日蓮聖祖
此山の横川に庵居し給ひき

三千尺の山の上に
十圍の老樹之を護りつ
雲、谿間より起るは白龍
銀箭、嶺より落つるは雷電

巖石豪岩として虎嘯き
老幹天に冲して獅子吼ゆ
嗚呼尊き高き昔の蹤
吾聖祖こゝに住給ひき

集 泉 靈

琵琶の湖水白く
青葉の山をひたしつゝ
春は雪消の色清く
秋は紅葉の錦かな

曉、講堂の鐘の響
山路を攀ちて急がせつ
夕、看經の床の前に
香を焼て定に入り給ひき

定光院の名は残り
横川の谷は今昔の如し
水の混々として滴るは

想 華

上人の炊ぎ給ひし跡とや
落葉累々として積るは
上人の焼き給ひしそれか

法、末法に輝きて
長夜の闇を破し給ふ
聖人の偉業今こゝに
見る影もなき片見かな

風雨六百餘星霜
僅に存す七字經王の碑
御堂は荒れて雑草生ひ
門倒れんとして蜘蛛之を繋ぐ

嗚呼貴き高き昔の跡
聖祖の蹤は今荒果てぬ

龍華寺に眠れる高山氏を追懷する詩

山崎紫紅氏の「宮嶽に對して高祖を懷へる詩」に擬す

龍華寺の墳墓おつきに眠りて
駿河の海を前にして
富士に對ひて居在せり

あゝ其情の清らかなるかな
追懷胸にせまりきて
君の昔の偲ばれつ

八重の潮路の東ひんがしや

伊東の配所は雲封ぢて

石廊のあたり眼盡きぬ

函根の山、天城が嶽

三保の松原、清見寺

海の彼方に薩埵さつた聳ゆ

山遠く環り、海廣く湛へて

東海の風光一處に集り

皆富士の偉なるに裏まれぬ

嗟この景を繪に描うつさは

造化の怒を受くるを恐る

← 靈

泉

→ 集

← 想

況や一枝の筆、一枚の書

しかも美を長へに保たじ

吾れこの景に神祕なくして

徒らに山の美を説かんや

あだかも君此地に眠りて

ひとり「大なる靈」を留む

東海の名山に對して

清高なる君あり

風景の美麗なるの地

偉大の君が魂を埋む

→ 華

人天の眼なりし佛陀の
高き雪山を得たる如く
日本の燈明たりし君は
此名勝を得たりしか

君此地に骨を瘞めんと
かつて過ぎし日心ありて
手を寶山に空からじと
妙經の御寺の岡に
金剛杖を便りし時よ
無象の寶土を悟りしか

東海の名勝をゑらみ

集 泉 靈

吾骨を藏せし君はそも
此地「戒壇」の淨域と化して
閻浮に榮ゆる大法の
不盡の嶺に輝くを期せしよ

大洋の水の湛へて
源混々として盡きざる
君が遺稿、玉を鏤ばむ

思ふに學界人多けれど
誰か君のごと大なるものを
惜む、君逝きて一年寂れぬ

想

華

龍華寺畔靜かに眠りて
清き水面みなもに影をうつす
有象に不二が根
無象に君あり

あ、あ、其情の清らかなるかな

冬の夜

峰の松風音絶わて
小河の流れ響きなし
げに草木まで眠りけむ
小夜更け渡る丑の刻

思ひに沈む旅の空
ひとり机に向ひつゝ
燈暗き窓の裡
夜風身に沁む冬の夜
幾度指折りかこちけむ
故郷遠くいくとせか
月日はあだに打過ぎつ
ほたるや雪と辿り行く
學の道はなほ遠し

送臺灣布教師渡邊佐野二氏赴任地序

夫國家依宗教而榮，宗教依其人而盛矣。蓋不可一日不相待焉也。是以苟有國則宗教在焉，宗教家在焉，使斯國富強，宗教之効亦偉哉。今茲六月，吾宗設臺灣布教之制，布令於宗內，召布教師，應者數十人，特舉英明渡邊氏，是秀佐野氏二師屬其任。往年當有清國從軍師之命，又有臺灣從軍師之命，其人皆出於吾大檀林之中。今二師亦共出於大檀林，是實本林之榮譽，吾儕所以誇天下也。二師嘗爲教授三區大檀支林，夙有令名，而抱千里之才，空埋叢中，豈不惜哉。而今有此命，蓋二師始得展其驥足乎。況內地教育，其事比之新領地傳道，固輕易，至臺灣布教，則至重至難，其理諄諄而可見，二師去其輕易，就其重難，寧可想其抱負也。夫臺灣我新疆土，而其地僻遠，島民未霑皇澤，是以動漫弄兵器，擾亂疆域，反抗王政，蓋由頑迷不靈，不解事理也。若誘導之法，而得宜，漸化其蠻風，使達開明之域，爲陛下之良民也，可知也。今也二師孤鞋決然而行，想赴其任

靈

泉

集

又

苑

地之日，臨機應變，如來所謂柔和忍辱爲衣，大慈悲爲室，諸法空爲座，以爲軌，則宗祖所謂身輕法重，死身弘法，以爲所期，攝折稱宜，四悉應時，進不失輕躁，退不陷卑屈，開拓教田，下佛種子，構立正安國之城壁，揮破邪顯正之劍，掃攘偏權之教，奏皆歸妙法之偉功矣。可謂紹佛祖之遺旨，體陛下之聖意，建東洋鞏固之策圖，國家富強之計者也。今也時方末法，屬本化弘通之氣運，諸宗亦雖有布偏權之教者，安能敵我正宗，二師夫行矣。行而弘此大法，開導彼疆域，余在林中，嘗久辱二師厚顧，今臨別不能無哀惜之情。然此行宗家公事，區區私情，非可留矣。想往昔我宗祖掛錫于駿州岩本山也，有一小僧日興者，夙慕宗祖德風，及其去，跣步數里，追隨請伴，不止云。今不肖親見二師榮任，勇奮之氣勃勃不止，亦竊有與尊之感，欲學其蹤，而宗有制規，不許其伴，鄉有老師親，奈何。雖一身固不願，而纏累既如斯，遂不能爲也。夫臺灣之地，氣候不穩，風土險惡，况其民暴戾，皇澤未潤，文物未開，言語不通，瘴烟毒霧，甚爲難處身。然佛祖加護，必可達其所期也。往古高岳親王，求法入印度，途爲猛虎所嚙死，又日持尊者，棹一孤舟，波濤千里，遠到

朝鮮，遂不知所終，而其芳聲赫赫至今不朽，二師今蹈其芳躅，孤鞋飄然，傳法於未開地，其名亦可傳千載也。嗚呼！臺灣距帝都數百里，海路遼遠，二師一去天涯，長隔似甚可悲，然功業所屬，丈夫豈爲婦女子態，況今屬我版圖，一葦帶水可蹶波而濟耳。隆江之風頭山之月，獨二師所縱，孤鞋短筴，跋涉全嶋，其地悉我教田，其民悉我教徒，二師則全嶋大導師，其抱負豈不偉哉！噫！其任重矣，其勞大矣，爲法冀自重，臨別情義切實，不知所欲言，乃聊綴蕪辭，以壯其行，辱交某再拜。

靈

泉

蜂窠說

群芳都發，陽氣和暢，當鶯歌蝶舞之時，獨役役劬勞，能構其窠者，即蜂也。夫窠也，外其醜陋，而內則巧緻，其族殖則增構其居，故族多者，則大窠，族少者，則小窠，一見可判也。蓋蜂也以謂窠也，以足容身，防雨露，則可，豈可故大其窠乎？乃撰屋角檐下，樹葉繁密之間，專以避免危害爲意耳，而計其冬日之備蓄，蜜於長日，以其餘

集

利于世，蜂亦有靈哉！今夫世人不顧其分，猥壯大于其居室，金玉于其衣食，而不利于天下，不計其身空過一生，碌碌無爲者，豈無愧蜂兒乎哉！作蜂窠說。

讀莊子

余讀莊子之書，始知其理甚似佛教焉。其畏犧牛、蹈晦者，豈異於釋迦厭世哉！其托夢與覺，比一世者，豈亦異於釋氏說虛幻無常，以悟解人世者乎？其書至微爲大，至大爲小，混融天地虛濶萬象者，亦異釋氏如意珠出於萬寶，萬象攝于一心之說乎？其排仁義，誹聖賢者，與釋氏不說一字不立一法，殺佛誅祖者，何夫異乎？或其言藐姑邪之山，無我有之鄉者，與釋氏所謂涅槃之頂，平等之海者，不異也。其齊物篇以喪已爲主者，又逍遙遊以忘已爲先者，亦與釋氏斥固執排已見者不異也。由是觀之，莊與佛，符契合會如一無異也。然詳察之，莊子三十餘篇，唯不過僅祖述老子，其文雖妙，不足稱也。釋氏八萬之教，洞觀宇內之真理，立前人未

文

痛

發之法，其教傳播於東亞半球，被崇重於三千載之下，其功德安比區區莊周之徒哉！然莊周祖述老子垂教於百世，書以名經，以南華真人之尊號，廟食於歷世，受帝王崇敬，亦偉哉！今茲吾大學文科考試課，以佛教與老莊比較一文，余碌碌未登大學，乃聊爲此文竊擬應課耳。

送栗原師赴任于教授池上序

吾宗明治中興之業，次薩鑑修三師者，有楮庵日昇上人焉，而上人特以卓識博通爲世所推也。蓋上人學兼內外，識達古今，餘暇弄風月山水賦詩屬文，綽綽而有餘裕矣。又有著述大禪補後學，明治壬申歲當官教部省之時，上人與薩鑑諸師扶身延日健尊者，代理日治和上提携樽俎，大有所盡，上人扶宗之功，可謂與而有力矣。余嘗在於豆州讀法鼓雜誌，誌上驟接上人遺稿，每遺編必有弟子秦洲之名，蓋師輯錄之也。余嘗欣慕上人德風，憾一不得接其溫容，於是又頻慕秦

洲師，欲期他日必接見焉。昨歲負笈入大檀林，偶遇在學辱教授，又受愛誼，蓋奇遇也。師夙進上級任房長兼教授，而慷慨熱誠，以扶宗護法自任，又博達才辨，爲林中所推。蓋上人之薰陶，以至於此乎！其紹繼遺風，顯揚德香者，師所期而亦固所堪也。余乃視師猶視上人，況於蒙教授乎！余之志願於是乎酬矣。師頃爲池上檀林所招聘，將赴任焉。夫池上檀林，吾宗育英之樞區，其任雖甚重，亦師榮譽大也。冀自重焉。往昔上人亦繼職爲主於池上，今也師將行，山靈水伯必有喜色矣。將來之事，余可刮目而待，乃聊屬文贈之，勿率之際，文不爲體，冀恕焉。會下某再拜。

春園招客記

桃花潦亂，紅霞淡淡，庭前芳色脈脈動吟意，乃招親友某某二人，敷氈於綠草上，呼酒酌觴，吟詠融然，庭不雜他木，植以桃樹，潦亂之美，繽紛之奇，添以黃鳥雅音，紅障錦壁，身如在畫中矣。余性慷慨，悲淚潛潛以爲常，此日酒酣歡極，不覺醉臥。

盃盤之間，春眠融融然，恍惚無極，忽悲憤之氣，兆於胸，不能禁，與二士論議，二士之論，悉與余合，而氣度熱誠，胸量斗大，議論卓絕，使余大裨補，更酌與愈深，論愈壯，光焰萬丈，慷慨情極也，至握手相抱持而泣，桃園之中，偶然得此好侶，不能無感，余乃正襟曰：昔蜀漢劉備與羽飛會于桃園，相盟曰：雖殊生同死，剿滅漢賊，遂雖不達其志，而尚以蜀漢繼于漢統者數世，豈為不偉哉！今也教法衰頹，數千載之宏礎，漸將絕跡，而異端邪教，瀰漫猖獗，其危殆不讓東漢之末路，余儕三士，駑鈍，雖不堪其人，冀欲以身當之，不亦可乎？二士大悅，盟為兄弟，一生死以擬彼三傑，乃製旗買劍，將剿滅異端邪教，敵達檄於東西，忽聚者數千人，皆慷慨熱誠之士也，乃整軍期日，將發，縱操吹喇叭，意氣勇壯，音吐啾啾，余上丘遙望濟濟多士，簇簇如雲霞，拍手三呼，絕快，乃歌曰：中原爭鹿，此是時，佛儒基督互須師，如今慷慨三盟士，誓欲揮身殉教旗，意氣峭軒昂，冲天，謂東西二洋一葦帶水耳，吾勇壯之士，一進可投鞭而濟矣，忽愕然而覺夢也，庭前既帶暮色，天曇風死，暗愴將雨，二士皆醉臥，乃急覺，修葺而歸家，夢中之事，恍惚接于眼前，快不可言。

即夜為此記。

吟社會友記

吾校友數十人，創雙榎吟社，琢磨斯道也，有年于茲，每歲四季大會，以為例，今茲四月開春季會於雙榎樓上，會主提題抽籤分韻，各闢金玉，競蘭菊，或有賞者，或有無賞者，後酌酒環觴，獻酬數行，怡然而悞，酒酣會主忽起謂衆曰：吾社固微，微一吟社耳，然會團結如斯者，聊在欲挽回斯道衰運也，然頃聞某一詩人，剽竊古人全句，自署名而投某誌，有某先生評語喃喃，批圈班班，殆不遑稱揚，而不知者以為玉制傑作，嗚呼！詩道之衰，夫如斯乎？又早稻田文學誌，嘗以從來漢詩編入雜欄，詞欄，以近體詩充之，世間往往以有為卓見者，此固雖一小事，而斯道之衰頹，以可徵也，夫詩也，感物而發動，情而起，乃寄情於言而發，故心竅勃興，豈撰彼言語之和，漢與泰西哉，而東西各有特色，豈以漢詩悉為不可觀哉，唐虞三代之

詩、夏周盛代之詠，豈謂無補益道德哉，以是比彼近體詩輕噪浮薄者，殆不知其差，而潮流如斯，挽回之任，豈非吾社所期乎，諸士勉旃，言辭悲悽，慷慨淋漓，一座聳動無發言者，此日天晴氣暖，櫻花爛熳，黃鳥啁噉，野外之景甚有添吟趣者，乃爲是記。

題春山讀書圖

讀書須閑靜，而山者人間最靜之地也，讀書須發明，而春者萬象發生之時也，時與處得焉，其所造詣可以知也，有山在於溪流上，樹木點綴，彩霞淡淡，紅雲靄靄，風徐徐，香脈脈，鳥吟花笑，而一櫻樹之下，有小草庵，明窓唐机，一人靜繙青軸，而座風采溫雅，實天外仙境也，嗚呼，座此清境，而叩幽理，臨此春景，而發義理，其快適亦可知也，余在都下紅塵之地，如此清境不能夢想，唯對此圖，彷彿而如在畫圖中矣，某題。

題高祖宴于沛圖

業成而不還鄉，猶着錦夜行也，而人至於此者甚稀矣，蓋有其始，而無其終者，甚可慨哉，漢高祖起於微賤，揮三尺之劍，制諸侯，七十餘戰，而始一統天下，乃創帝王洪緒，定四百餘年之基，於是幸沛郡鄉門之地，置酒大會，族戚故老，怡然詠大風之歌，身極帝王尊榮，袞衣玉冠，臨鄉閭，其快可想也，項王暴戾，而制天下，斬秦王，坑降將，焚燼阿房宮，而自以爲得帝王之業，則宜錦衣，歸彭城故地矣，何料他日垓下一敗，四面楚歌耳，而帳中之宴，虞兮之歌，與漢高大風之詠，何其異哉，噫，有其始者多，而無其終者，豈管項王而已哉，有其始，有其終，如漢高，抑亦難哉，有感題圖後。

題鴻門會圖

智可以爭，德不可以爭，况兵力乎，况黠詐乎，夫沛公溫厚仁德之主也，項羽不測

而將計之，抑亦昧哉！始二人奉義帝之命討秦也，約以先入者為王，而沛公先羽數月入關，而設法三章，悉除秦苛法，百姓悅服，天下莫均不仰慕焉。項羽忌其威名，背約逆義，招會於鴻門，將殺之，噫！何夫不仁哉！當此時，沛公之兵僅百餘騎，項羽之兵號百萬，殺氣紛紛，劍戟起于內，禁衛制於外，其危猶累卵矣，而遂不能加之者，抑亦沛公有帝王不可侵之德也。此時有樊噲張良護之，然若雖無此等扶翼之士，亦不必憂也。項羽不察之，范增之輩，亦夙察氣推數，而猶不諫，却嗾之，苦計百般，他日垓下一敗，四面悉楚歌者，是固定數也。語曰：順於天者勝，逆於天者敗，宜哉！某題。

朝鮮今後策如何

國家盛衰，一在于元氣消長，元氣消亡乎，國家哀滅可知也，而救之術，唯有宗教耳。法律也，教育也，嚴肅精密，固似能整秩序存禮節，然是僅足制皮相外面者，而

不能感化其精神也，乃救之以宗教，則民心茲定，元氣茲興，國家基礎，於是乎立矣。夫朝鮮東洋一小國也，其版圖狹小，而介立於大國之間，政綱解頹，元氣沮喪，吾國嘗以隣邦之誼，扶掖誘導，大有所盡焉，其與兵而懲清也，出師十萬，攻戰一閱年，而後絕其干涉，使彼舉獨立之實，其派公使遣顧問，改耗政，矯弊習，興教育，啓產業，可謂勉矣，其誘導彼也，或嚇或賺，猶育幼兒，懇懇切至也，然而彼猶不肯改舊習，因循姑息，唯欲求一時苟安，其至甚則敵視吾國，結托露清，不自測投虎穴龍潭，其愚豈不憫哉！其不可喻如斯矣，蓋元氣之沮喪，浸染於國人腦裡，為其不振之根本，欲斷根本，在據于宗教，而宗教其類多矣，有佛教，有基督教，有回教，而基督教也以博愛為名，其弊也，使民消國家觀想，而尊崇一神，其徒皆為神之奴隸，若施之於朝鮮乎，愛國念愈薄，而獨立之志亦銷矣，然則是教不可用也，又如回教也，始起希臘之僻地，生於攻戰鬪殺之間，其弊也，使人長暴強之性，若施之朝鮮乎，廢滅沮喪之國，又起攻戰殺伐之風，侵略攻鬪，遂至自滅也，必矣，則回教亦不可用也，獨如佛教者，不失博愛，不陷自濟，有差別門焉，有平等門焉。

又有小乘焉，有大乘焉，應機臨時，可以救時弊也。其說曰：釋迦非聖，唯是先覺者耳。故學之者，皆可至釋迦之位，自主獨立之教，豈有加之者哉？而經說多端，諸宗分派，概枝葉而不探釋迦真理，吾國紀元九百年而有日蓮者，英邁卓絕，看破八宗，悉為朽廢，不可用，親閱藏經數回，遂溯釋迦本意，崇法華經，創一宗，曰法華宗。其著有守護國家論，有立正安國論，大鼓舞愛國元氣。其說曰：國依法而榮，法依人而弘，則諫幕府，陳其說，又豫言蒙古襲來，大警省天下，其法也幽玄，其說也適切，可謂國家的獨立一大宗教也。若施之朝鮮乎，喚起愛國自主之念，挽回既喪之元氣也必矣。是豈非救彼之一大藥石乎？而彼國非無宗教，自古有佛教在焉。然衰餘之教，空留戒律禪定虛儀，至彼活殺自在教法，則殆衰滅無餘也。然傳法彼國者，於今日最為要矣。嘗有日蓮之徒，日持上人，夙至彼國，大傳是教。至今遺跡歷歷可觀云。則日宗之徒，宜奮進而續遺蹟也。蓋平等一乘之法，立正安國之善，豈一時之方便哉？又一人之空言哉？以施之世界萬邦，宜使宇內民人，由以安心立命也。而朝鮮在隣邦，疆土相接，一葦帶水，可蹶波而濟矣。豈為對岸火災視

靈 ←

泉

集 →

文 ←

况吾先以政治，或以教育，百般盡力，宗教獨空秘藏美玉於篋中，不愍彼國人哉。扶掖誘導之策，獨在布純良宗教耳。則以此純良宗教救之，雖蕞爾小邦，亦能得獨立也。東洋之平和，於是乎全。吾國之藩屏，於是乎亦寧矣。是實彼國百年之大計也。嗚呼！今日之急務，豈更有甚於此者哉？為宗教家者，宜奮起也。吾校題課，以朝鮮今後策，余固宗教家，眼中更無宗教以外物，乃述自所信，茲應課題。

跋梅花譜後

遠自月瀨，近至杉田梅，不煩行李不勞吟鞋，悉集諸一幅之中，使人知其妙者，夫唯此梅花譜乎。墨色淡淡，筆力雄勁，千態萬狀，能寫其真，或有如矗立突天者，或有偃蹇伏地者，或高標似君子者，或娟妍如美人者，素影橫斜，玉骨槎枒，使披之者神飛魂馳，宛有逍遙香世界之中之想矣。夫轟然雄勁者，高標清癯者，以可比君子逸然卓爾者也。嗚呼！可喜哉！然而其花開散僅旬餘耳，乃托畫以摸寫，可存

苑 →

不朽矣，嗚呼花譜之妙，豈啻使人心胸清開爽然，發浩然之氣而已耶，備之機邊以自願，雖儒者亦可以毅然憤起也，花譜真活畫圖也哉。

一四四

題桃源圖

桃源者一仙境也，其記出代醉篇，晉陶潛所記，幽絕麗妙，從此世或賦於詩畫於圖，大傳於天下，然是蓋架空之說，出於陶公一時之弄筆，華嚴經曰：心如工畫師，隨筆能作種種五彩，蓋卓爾秀逸之人，而始有之記，超然洒落之人，而始有之畫，塵俗之人雖對此圖，不得其趣也，廉靖之人胸中自有仙境，筆力從而發之，亦要論其事乎。

插花說

遊技之類多矣，而有可玩賞焉，有不可玩賞焉，宜不可不擇矣，如彼圍棋始於支

那，傳於吾國，其法象天地陰陽，擬日月山川天地間之事，網羅悉不遺也，而吾國古來有插花之技，其法或擬天地人三才，又象木火土金水五行，則亦有天地之大法備矣，然則彼之與此，兩俱如可玩賞，然如圍棋法，則嚴密，輒不得解，而其事攻戰輸贏，勝敗得失，其弊也，使人奔俗陷利，殺伐之風，甚爲可厭，插花則不然，平易輒可解，而其法也，集數枝爲一樹，曲者矯之，邪者截之，故使弄之者，自覺道義之本，而清淡雅致，可甚玩賞也，然則插花優圍棋亦遠矣，可謂有益之技，而吾國之一美術也，而邦人動則取異方圍棋，不顧自國插花，亦可勝慨哉，作插花說。

送友人錦衣歸故鄉序

甲陽之爲地，高峻雄拔，爲吾國之冠，連峰環繞如蟠龍，群流奔瀉如長霓，其巉然者爲城壁，其汪洋者爲池溇，中央有沃野千里，豐饒之地，其地勢自如別乾坤，呼爲峽中，固有所以也，語曰山河英靈之氣，出傑士矣，古有武田氏起於此地而霸

一四五

一時諸侯震怖，論史者至今尚稱焉。又吾宗祖三諫勇退隱遁，身延創久遠寺，遺言留骸於千載，即一宗之總鎮美觀，與山河之勝煥焉輪焉，而中古以來不見英傑，而英氣所勃發，近年教家多輩出，布教之蹟，甲陽蓋為吾宗之冠，於是乎知英靈之氣，與英傑之士相待非偶然也。余昨歲遊大檀林，得一畏友名某姓某氏，甲陽人也，夙成穎敏，好讀書，為文章，性謙讓溫雅，而有氣節，尤有聲于畿中。余始接遇，意氣投合，一見如故。爾來情義之深，蓋可擬管鮑陳雷矣。余嘗病，君看護不解帶，自供藥餌，又嘗貧，座無褥，君割其一與余，讀書也，互論其義，作文也，互示其疵。君行余亦同行，君寢余亦同寢，君食余亦同食，互開胸臆，喜憂相謀者，殆一閱年于茲。此間余之有得於君，決非鮮少也。君以今月卒業於大檀林，將張鵬翼翔鄉天。古人曰：業成不還鄉，猶衣錦夜行也。則此行，君之光榮甚大。君到鄉之日，師親倚門，弟妹出途而迎，君亦有指其樹曰：某樹吾先人之所種也。某水某丘，吾童子時所釣遊也。之感，況時方長夏，綠翠滿眸，四色明澄，行程數十里，歷函嶺臨相海，仰富嶽瞰富水，山河之勝，殆將不遑應接。君當此時，經此清境，矚目山河，其快亦

靈

泉

集

文

亮

有不可言矣。而余也忽臨別離之憂，既往之厚情，忙然如夢，書窓凄然，如雛之離母者。然此行區區私情，固非可留，余豈為婦女子之態，唯以一辭告君曰：君甲陽之人，其氣概凜凜者非偶然，其歸鄉之日，冀努力以期不背地勢，出傑士之語焉。想君抱卓絕之才，存慷慨之志，當莫以今日之榮自甘，更猛進可努力也。其如前途，或當於教學之任，或再遊於本校，共皆盡宗家之事。君任所撰焉。余送君之辭，唯是而已。古人既有學若成，千里亦咫尺之語，余亦何悲。君夫行矣。君一去天涯，雖相隔，君之名聲猶盛于校中，聽其名而想其人，余亦可自慰矣。嗚呼富嶽之高，可以比其盛業，富水之長，可以較其盛德。於是乎將不愧山河英靈之氣，出傑士之語，始可以謂甲陽之士也。君幸自重焉，聊叙衷情，壯君行，再拜。

送深見教師序

尾濃為地也，吾國之胸腹而山河秀靈，自古多出英傑之士，而金城之名聞天下，

又城蹟殘壘，及今尚存者多矣。吾教授深見靈照師，尾州之人，夙成英邁，嘗遊大檀林，鑽仰數年于茲，任房長，又兼教授，其學深遠，其風溫恭，其行清明，久為衆所仰，而尚未自為足，慨然察時勢，客年已來，與某等數人，竊螢雪之暇，通學清韓語，學校修二國之語，嚴寒酷暑，未嘗一日怠，及期年，其勤勉實可欣慕也，師亦長辯舌，一登壇也，縱橫奔蕩，寄想盆湧，使人感賞不措，且剛毅大量，意氣慷慨，以扶宗護法而自任矣，蓋亦俊傑之人也，嗚呼尾濃之地，而始有此人乎，可謂尾濃之士矣，頃日將歸國，其行也，即錦繡，其職也，則重大，可謂榮譽之極矣，余久蒙帷下之薰陶，情誼至切，臨別亦非無淚，而學窓之間，送之以酒，乎不可，以帛乎不可，聊以菲辭餞其行焉，冀師一出本林之日，以其慷慨熱誠之資，縱橫奔逸之辯，與所修二國之語，臨機應變，可發憤努力盡力于宗國也，余所囑師只此而已，師夫行矣，其將來之事，余當刮目而觀焉。

靈 ←

泉

集 →

題呂望圖

有一老翁，童顏仙骨，端座垂釣於溪流者，是為召望垂釣圖，夫天下一魚之大也，政綱猶釣絲，宰相猶釣人，而其釣鈎甚曲，則魚苦焉，其政綱甚嚴，則民不寧焉，大公其垂釣也，鈎不曲，餌不用，宜矣，渭水雖不得魚，遂為文王所招，規畫大成，能奏百世之宏基，其初釣也，非魚而天下也，當其定天下，政綱簡易，嗚呼朝野謳歌者，亦非偶然也，是為圖題。

文 ←

苑 →

讀始皇本紀

余讀遷史，至始皇本紀，未嘗不掩卷浩嘆也，夫始皇承六世餘烈，奸雄猾智，則滅六國，一統天下，於是自稱皇帝，改謚法，銷兵器，廢諸侯，定法令，巡遊天下，建石頌功業，以顯尊號之榮，親處政務，法令嚴密，起阿房之觀，築長城之固，蒙恬率三十

萬之兵、備邊境、內足以拒危害、外足以服夷狄、自以為社稷之寧、延及於千萬世之後矣、而何料滅秦者、非胡而胡亥、身死杯土未乾、忽為楚人所滅也、蓋始皇之治、其待已甚厚、而不施仁政於民、縱廢先王之法、而招怨於天下、以至自滅、夫天之立君、在於寧民、以萬人奉一人、豈為其道哉、然始皇自謂、宜悉耳目之所好、窮心志之所樂、以究身世之榮也、是以嚴法、刻刑、猜忠良、疑骨肉、只恐有天下議已、則焚書坑儒、以欲杜絕衆口、蓋古之化民成俗者、必以教化為急、以寬仁為先、而始皇棄仁義、毀禮樂、刑罰為先、宜哉、朝野恟恟、民人不寧、道路側目、舉朝佞臣、亦不弔其民、竊以用權誑惑天下、而始皇遂不悛、自奉日益厚、遂至使徐福採藥於東海、其愚亦甚、噫、如斯天下、豈能久乎、宜哉、澤不及數世、六尺之孤、死於人手、宗廟墜壞、徒貽笑於後世、所謂其仁義不施、攻守勢異者、偶以所以至滅其天下也、噫、其本既喪、城兵之固、法令之精、寧為恃乎哉、孔子曰、知及之、仁不能守之、雖得之、必失之、蓋始皇之謂也、為後之人君者、宜不可不鑑也。

靈 ←

泉

集 →

蟻說

人之所以萬物之靈者、豈在於其體軀長大哉、是以牛羊長大於人、而非靈也、若苟有人性之美、雖微細小蟲、豈亦為以不靈哉、蟻、螻、生物之至微者、而人稱之者、以其人性之美也、余庭園有一蟻穴、余常見之、當春夏之候、蝶舞蟬吟之時、役役勞苦、運糧其穴、以為冬日之計、當天氣清澄、氤氳可樂之日、蚍蜉蟻蚌相輔、塞於牖戶、以備風雨之害、是以白霜數降、菊花既枯、蝶蟬之屬、食盡餓死之時、悠悠而逸居、暴風劇雨、倒樹折枝、蝶蟬殘死於泥濘之日、自若休於穴中、可謂智哉、群蟻相輔、築穴運糧、郡聚穴居、常善相親、可謂仁也、其性勇敢、有妨己者、則列陣作行、血戰不厭、而其軀小、而能運重大物、可謂勇也、當天未淫雨、綢繆牖戶如鷓鴣、即謂智也、吞舟之魚、渴而失水、則蟻能苦之、即謂勇也、而其字虫、從義、義之所行、豈非仁哉、嗚呼、至微此小蟲、能有人生之美、豈可不謂哉、萬物之靈、無愧此小靈蟲、則可也、余性愛之、乃作此說。

文 ←

苑 →

竹雨亭記

竹待雨而奇，雨待竹而佳，故有竹無雨，未足以為美，有雨無竹，亦未以可賞，而竹實而主也，雨虛而賓也，何乎？竹性勁直，有君子之節，雨過之添瀟灑之色，而雨固無意于竹也。古人曰：有其實者，必有其名矣。吾友潤兮，生好學，篤行而頗謙讓，常為同學所推，頃日命余題其亭，亭有竹兩三竿，此日偶雨，鏘然而鳴，鏗爾而響，余乃以竹雨而名之，以名與實辨之也。

鼠說

鼠者獸之最小者，而為人所養，以人家為己居，是以雖新室，家人未棲，則鼠亦不居焉。既棲，鼠亦居焉。余性甚愛鼠，每備食與之，彼慣而不懼，比比來食焉。故余居鼠兒最多矣。余因得詳於其性也。頃日余移笈於學舍，從其日不見鼠之蹤云。嗚呼！

文 ←

呼鼠亦有靈哉！蓋鼠之性小心翼翼，能守其分，體小舉敏，其容頗可愛，而友于其侶，仁于其兒，得一物則聚而食之，未嘗相殘害也。而其食唯仰人殘餘，以為足，麴麩之屬，一片半碎，尚能崇重焉。而黽勉善勞，是以本邦古俗，畫福神圖，必添鼠兒，蓋以其為靈獸矣。余嘗聞製筆者，曰：製筆之法，必用鼠鬚，若不雜之，則毫鋒軟弱，不堪用。嗚呼！鼠能以一身殉同侶之難，使貓兒飽其口腹，死後遺其鬚，以為文房之用，可謂鼠亦知義者矣。世之惡鼠者，數區區小罪，以為有害，天下之廣，不容瑣瑣鼠兒人，而何其小量！對鼠兒亦無愧哉！余獨愛之者，豈為好奇，乃作是說，以雪鼠之冤爾。

題青砥藤網滑川撈錢圖

有一川，數奴執炬索物于水中，傍有衣冠之士，指便之，是藤網滑川撈錢圖也。藤網以廉直見擢於北條時賴，常自儉而喜施，嘗夜行遺十錢於水中，乃買炬照水。

撈之，鉅直五十錢，或曰得不償失，曰五十錢吾失，人得十錢誰得之者，我取六十錢，以益於世，不亦大得乎？嗚呼！如藤網可謂能通經濟者矣。夫財者天下至寶，而非一人可私之者，而勞而得，節而出者，財之法也。彼藤網躬儉而能施于人，又以六十錢益於世者，是也。而經濟之道，整天下則治平，反之則紊宜哉！北條氏以陪臣而執天下權，所以延及於九世之久者，是由得其財政之整致爾。其御天下如手指者，亦非偶然也。而其所本者，安知無非夫滑川之炬光灼灼及九世之後者乎？藤網之力亦偉哉！嗚呼！經濟國家之大本，此圖不可輕視也。某題。

靈

泉

移竹記

竹如清潔之士也，余性喜之，窓外多植焉。今茲五月亦使僕配植于庭，乃望之森森而茂，猗猗而美，於是霞晨月夕，常對賞焉。夫竹性也，中心空虛，直立數仞，節不達度，根固如巖，葉姿菁菁，其當霜雪沍寒之時，毅然未嘗凋落也。蓋夫竿之空幹

集

文

之直，節之整，根之固，葉之不凋者，豈與夫君子志操是確，進退有節，寡欲而不爭，獨立而濶步，貞節而不讓者，何其有異哉！古人以竹比聖賢，所以其稱節操亦以是也。艸山有詩云：自有世界來，即已有此竹，自有此竹來，此葉終不禿。又云：汎彼大虛裡，隨風自在浮。嗚呼！艸山而始能為此語，則君子者竹也，常受君子常贊，是所以君子之為友也。余今雖非其人，頗慕其性，晨夕以竹自規焉。竹亦冀勿棄焉。移了向竹清風吹來，鏘然有聲，竹亦如領余意，其風姿淡淡洒洒，抗然而直立，嗚呼！君子哉！何其清潔也乎？為是移竹記。

苑

題百里奚飼牛圖

有牛數十頭，有一老翁秣之飲之，怡然如自得，即是百里奚飼牛圖也。傳曰：百里奚虞人，以虞公不用去，自鬻為人養牛，虞終為晉所滅，後之秦扶穆公，為霸業矣。嗚呼！百里奚在虞而虞滅，在秦而秦霸，非不才於虞而才於秦也，唯其在得主與

不得焉，其始也自賣飼牛於姓人家，其終也相秦而顯其君於天下，非不智於始而智於終也，唯其在遇時與不遇焉，君子之處世亦難哉，乙未夏日某題家藏圖後。

一五六

祭日治上人文

恭惟和尚天資穎敏，以說法之妙爲古今獨步，其登座說法也，丁寧懇切，能使垂髫輩得解，一世之轉法輪一萬有餘回，而布教飛錫之足跡遍天下，嘗當明治之始，物論囂然，又廢佛毀釋，盛論時也，供身犧牲，荷一宗重任，當路常紛骨擢身以從事布教興學，或釐革宗綱，又明治壬申歲當教部省開設時，奉總本山日健尊者台命，應政府之召喚，援薩鑑等諸師以執宗務，當是時和尚年既七十數餘，而筋力耳目未覺衰老，惟憂國患宗爲忘身焉，於是乎宗制定教學，與衆志大固宗風，終大振，嗚呼偉哉，今茲壬辰歲會和尚十三回之忌辰，依是法子法孫及有緣

之檀越相謀而集於靜岡感應寺，營盛大法要，以酬和尚慈恩萬一，不肯敢瀆席末，欣喜何堪，因聊綴菲文，以報浩恩涓埃，伏尚饗。漢文處女作

金衣公子傳

公子名黃鸞，字宇久比須，號金衣公子，其先嘗爲梅花鄉之吏，子孫相嗣，世仕於春帝，掌音樂之事，至乎公子，最善歌舞，而特長於法華之謳，君出自幽谷，而遷喬木，婉轉其音，嚶曉其調，其東帝之一回駕也，梅櫻笑迎，桃李爭聘，東風習習有媒，紅霞靄蕨，百物和暢，山河長閑，乃君揚揚，弄其美調，頻唱法花之謳，於此百花益耀乎錦繡，闔乎紅粉，呈嬋娟之美，獻爛熳之麗，亦競聘君，而後於他，惟是恐也，乃文人騷客，詠於詩，吟於歌，叙於文章，於是各稱揚君不一而足，一時君之盛名，海內喧傳焉，蓋君可爲以亦榮也，然而逮九十之韶光，匆匆去，東帝之駕亦告還，百花散落，綠陰寂寞，天下亦無君之知己矣，而君悲歌慷慨，猶欲留其春，而遂不能

一五七

仍伏于草叢，隱于竹藪，蕭然自適，尙作法花之誕，而世遂不顧焉。嗚呼！盛名之士，末路可悲，獨如君者，豈可不惜乎？而君高節清素，不粧不誇，且篤于友情，然晚年高蹈幽隱，遂莫知其終處云，仍戲作之傳。

雜興漫筆

田子既行于一昨，野子亦行于昨，芳言有味，頻挑於石生，生無意，偶今遇天曇雨，和風光良可娛，於茲興情催乎內，誘引起乎外，猿馬馳心王，六窓遂發動，零時出山林，過紅塵之街，遊風色之鄉，玉臺珠閣，兄弟和樂，翠帳紅帷，同胞暢懷，有酒不及亂，山海方丈，珍菓奇味，菟靜府之粹，百媚千嬌，其態婀娜，德風所薰，和氣霽靄，焉伴佳人於清浴，浴餘一身爽，擇芳房於閑靜，白日夏尙冷，金龍奔跳，蟠于峻嶺，維嶽巖巖，石維磊砢，生說東道，女語西教，龍世得雲，交情且密，變化風雨，雷電震烈，時方晚，日既傾，散會向林，步且遲遲，浴于櫻湯，宴于綠亭，購其所要，携菓還林，

此行愉悅，足慰悶，解隊之後，考試之前，金龍一出，晁水之邊，長還隱於貞松之嶺。

日曜紀行

朝來雨氣，四顧濛濛然，身心清冷，頻想長足之行，况精養軒上，昨有兆言，笑人羨殺，幾指西方之街，又今朝會侶于吾房，喫茶味菓，菓中所插之芳讖，有悅同人，成不成之日成，有因焉，有兆焉，午後議起乎第一房，與第二房少年之盟，延及其房之元老，調衣作資，芳議熟矣，有侶相會，三少先發，老雄後繼，出貞松之門，向清流之畔，陰雲朝來，凝不開，沛然之雨，時方至，行益遠，而雨益大，托制衣於村家，購洋烟于美店，急行侵難，遂達，有訪友之意，不顧他所論，捨新就舊，決然入某舍，金發山中，鶴鳴荻園，石殿契老，靜乎原奇，味其所好，娛于宴席之間，談其所喜，靄然開胸，智人別地，各個異領，其衣艷而潔，其袵與裙，錦色而紅，雨氣益健，蛟龍冲于空，一吟起雲，再吟霹靂，天地晦濛，四色暗愴，余不知此裡之景，黃昏解會，東行曳筇，

喫食于一亭、愉悅忘帽、携菓贈村家、又願僑侶、西風與東風、雨篠相撞、爭蒼天兮、吹乾坤、考試愈逼、課習如敵、二三子悠悠、長携天地之景狀、忘人間之煩悶、

送臘迎正之感

易曰、小往大來、蓋謂陰陽消長之氣運、夫理無古今、寧有東西、時間與空間、固絕其名、從有生民、聖賢出而設其名、則實於虛、有於無、以誘其蒙愚、然後世徒執其名、而失其實、迷想空慮、不達宇宙之理、固可憐哉、蓋時世推遷、新陳代謝、年紀悠悠、乃區劃建制、曰一年十二月三百六十五日、一回消過了、更復其舊名、名同實則有新與舊、其前年之末、謂之臘、其後年之始、謂之正、而昨非今是、惡舊喜新、勿勿送臘、丁寧迎正、以為舊者一去、遂不可追及、新者初來、事可創建、如斯每歲、年月代謝、而空後悔哀惜、嗚呼、何夫誤乎、人生而皆有其事業、而志操一貫、自幼至老、精勵追序、追續不倦、後日大成、功舉名遂、此人自主其志、不必捨舊取新、志意

靈 ←

泉

集 →

文 ←

與年併進、五十餘年、亦如一日矣、此人何關夫區劃建制之假名乎、由是觀之、新舊皆年之名也、而其不異者實也、自其達者而見之者、為新而有舊、新也者即舊之所出、年次相追、來者愈可貴、小往大來、於是乎見、嗚呼、聖人既去、舉世混濁、名實皆不知、豈管一二而已乎哉、

苑 →

鐵火餘情

初旅や満月上る柳樹屯
満月や知らぬ旅路の露管かな
何其目減りし心地や垢と露
外國の草木も塵く旭日影
吹く風も東の空もなつかしき
木枕は船より早き故郷かな
故郷も同じ色なり山と水

新體詩集「日蓮上人」を讀む

予は新體詩を知らず、特に批評の識に疎なり、故に之を評すればとて、門外漢の贅言にして、新體詩集としての「日蓮上人」に些の貢獻なかるべし、されど熟ら著者の意を測るに、詩集としてのそのみならず、却て日蓮上人の爲の詩集なるに似たるものあり、故に詩に疎なる予も、日蓮上人に信仰ある點に於ての予は、著者若くは著者以外の思想を有する點に於て、僅に所感を記し、敢て眞摯なる態度に於て、他の批評を容るゝの宏量ある著者に寄す、其眼識の淺近にして、批評の當らざる所あるは自ら深く謝する所なり。

先づ此書に於て最も喜ぶべきは、新體詩集として吾國の文壇に一新機軸を出し、全篇一貫して一の主義の爲に歌ひ、一の偉人の爲に讚美せしこと是なり、其文字に於て意匠に於て、最も莊重森嚴に、最も謹厚敬虔に、篇中一

の浮華纖弱の跡なく、淺薄卑近の韻なく、仙骨玲瓏、靈氣馥郁、筆々雄渾、句々典雅、或は紅淚熱血、字々法を説き、或は悲愴悽然、句々腸を斷ち、時に幽玄の理を歌ひ、深淵の妙を發し、長風の萬里を馳せ、天馬の空に驅くるの概あり、一讀再讀、魂躍り肉飛ばんとす、上人の如き一大偉人を頌するに於て、甚だ遺憾なきに似たり、予は此大體の點に於て著者の勞を多とし、日蓮上人の詩として稍成効せるを喜ぶものなり。

「二月蓮華」は構想幽遠にして神韻縹渺、想に於て勝れたり、「有朋記」は調流麗にして情致味ふべし、情を以て勝れり、予好で此篇を誦す、「龍口」の中「頸の座」の三節、蓋し著者最も筆力を傾けたる所にして、豪宕雄渾、筆々生動せんとす、誦して此に至り詩としての字句を忘れ、文字としての章句を忘れ、神魂飛動、身は六百年前龍口の地にあるの想あり、乃ち詩形以外の詩を認め、文字以外の文を讀む、著者の筆此に至りて亦遺憾なしと云ふべし、蓋し筆力を以て勝れり、「大曼荼羅」の末節、句に力あり、筆に靈あり、蓋し

雄健を以て勝る、「本化淨地」意氣豪壯、文に光彩あり、蓋し叙景を以て勝る、「頸の座」に次ぐの好詩形なり、「涅槃の巻」は「下篇」情趣あり、結末卷首に照應して妙なり、詩としては物足らぬ心地せらる、殊に泰堂居士の眞實傳其儘を直譯せしは、技量あり手腕ある著者として再考ありたき所なり、

之を要するに「二月蓮華」より「本化淨地」に至り、首尾一貫、前後照應の妙は確に在り、たゞ脱兎の如かりし首篇に比して、處女の如き末篇ありしは惜むべきか、附録ともいふべき「富嶽に對して高祖を懷へる詩」一篇は、別に奇想妙筆あるに非ざれども、其コントラスト即ち高祖の偉人と富嶽の雄靈との對比に於て、最好對比なりしを喜ぶ、此偉大と雄靈との詩題に伴ふの筆が是に伴はざりしは、亦止むを得ざる事にして、余は此篇の句調壯快にして、一氣奔放の中に緊縮の妙あるを愛せり、勿論、卷中の諸篇に比して、深邃幽遠の妙なきは、著者其人も亦首肯する所なるべし。

以上、局外者門外漢なる見地より試みたる妄評のみ、當否は自ら専門に

← 靈

泉

→ 集

← 日蓮上人を讀む →

任すべし、終りに一言冀望を言はば、各詩篇の題目が聖祖の嚴的方面のみに偏傾して、他の慈愛的方面が描かれざりし事是なり、「有朋記」の如き聊か此方面を寫したるが如きも、そは日昭上人が主體となりて、聖祖は客體なりしなり、「本化淨地」の經一丸付囑の如き亦慈愛の面目に乏し、「龍口」に於ける四條氏に對する同情も未だ盡されず、之を御一代に拜するに日朗上人への御同情、船守彌三郎及び阿佛房其他弟子檀那に注がれたる慈愛、若くは師の道善房又は學友の淨顯義淨に對する、又は兩親に對する御心情、例へば「牢獄のたちばな」、「報恩抄」、「思親閣」の如き題下に美しく優しき聖祖の慈愛的大同情をも、添へて描寫し奉りたらばと、聊か著者の用意に對する冀望を言ふのみ、されど詩題として描き難き彼諸篇を以てして、此の比較的寫し易かるべき、愛的方面を略したる著者の特趣なる着想を賞すべしとせば、予亦強て門外評を固執するものにあらず、更に一章一句を數へて批評するが如きは、別に専門家あるべければ、予

は言はず以上僅に略評としての管見のみ、表装、口繪の意匠に於ては、聊か
説なきにあらざれども、末節に關するを以て之を略せり、妄評多罪

劍光銃影

二月六日某師團動員下令の當日、予は午後二時梅田驛發の汽車にて歸
郷すべく、其日召集を受けたる横山仁秀氏と共に大阪立正閣なる本化宗
學研究大會の師徒諸君に訣別して四ツ橋の會門を出でぬ、爾後三十日親
愛なる故郷の人となり、慈愛深き師親の膝下に侍養しつゝ待命の中に日
を送り、もどかしき一ヶ月を此間に消し、三月六日漸やく吾管轄師團の動
員となり、午後二時赤色紙なる充員召集令狀を受領し、八日大決心の勇氣
を以て郷里を發し、九日屯營地静岡に達し、十日入隊の身となり、補充大隊
に編入せられ、同廿六日迄營外宿泊の事にて補充大隊四個中隊の全員數

千名は三人五人づゝ市街の家屋の餘室に舍營の氣樂なる境界に引替へ、
三月廿六七兩日を以て野戰聯隊出發せらるゝと同時に、予等補充大隊は
外泊を廢せられ、同日午後入營の堅苦しき生活となりぬ、大阪出發已來殆
ど二閱月「待命」又は「外泊」中の身にて安閑悠然の餘暇あるに非るも、入
營以後に比すれば天地雲泥の緩急の別あり、今迄隨分筆執りて物書くべ
き時間と餘裕あり、特に山川編輯主任より何か書き送れとの音信ありた
るに拘はらず遂に筆執るに疎く、原稿紙に臨みて書き付くる勇氣なく今
日に至りぬ、昨廿七日午後四時入營して疊敷かざる、板敷の兵舎に毛布に
身を裹みて劍戟縱横銃槍參差の下に西部利亞の陸戰を夢み、旅順浦鹽の
海戰を談笑するの人となりぬ、櫻の老樹兵舎の窓外に今を盛りと咲き香
ひ、富岳の白雪皎々として清麗神々しき計りなるを近く望みつゝ、法皇の
寵臣今は國家干城の武夫として、名譽限りなき今日何心なく筆取りて原
稿紙第一頁に臨めば、細雨霏々絲よりも長く、濛雲漠々霧よりも淡く、天地

蕭條として春猶ほ秋の如し、噫何れの日か暴露の不義を膺懲して、滿達の野に横はる迷雲を一掃し、正義の天日赫々としてウラルの第一峰に輝かん……………

二

軍隊の事固と祕密に屬す、猥りに公にするを憚るものなり、而して今此題を掲げて誌上に掲載せんとするは、其の宗教と關係して吾人に參考たるべき條項、即ち軍隊に於ける精神的教育と自己の所感とにして、敢て軍機を洩すの禁を犯すことなし、予在營僅か九十日間其見聞甚だ少し、況や魯鈍事情に通曉せざるの予に於てをや、其感其論固より正鵠を失ふもの多かるべし、今は唯だ條項の下に略して説明を加ふるのみ、他日更に訂正することあるべし。

一 死と敵との觀念 軍人の頭腦には常に此二個の確乎たる定想あり、一身は國家の爲に捧げ、君皇の爲めに斃れんとす、故に如何なる困難にも、

缺乏にも克ち得らるべくして、身も命も決して愛惜する所なし、是れ死なる觀念常に其腦中に存在するによる、又軍人の一たび營外に出づるや、必ず劍を佩びざるとなし、其兵舎にあるや亦不時の異變に備ふるの整へあり、其練習にも流汗怒色、高聲確實、決して優柔不活潑なる所なし、これ常に敵たる觀念を抱きつゝある所なり、吾は想ふ宗教家にして、死の觀念と、煩惱、惡魔、睡眠、怠惰等の強敵に對する準備なきものなかる可らざる乎。

二 蓄ふる所なく餘す所なし 軍人は質素なり、清麗なり、寡欲高潔なり、日常須ゆる所悉く官供品にして、固より満足整備と云ふべからず、然れども決して餘物を蓄へず、粗服惡靴以て足れりとし、食物小品皆質樸なるを主とせり、是れ亦一朝の事變に當て、狼狽することなきの素養にして、前項の大定想あるを以てなり、宗教家にして美服を好み贅物を貯へ、奢侈華粧以て自ら得々たるもの、亦聊か省すべきなり。

三 社會と隔絶すること 兵營は概ね賑繁なる市街に設置せられ、平民

稠人の聚る所に存せり、然れども其營門内外の區畫は、實に嚴重なるものにして、豈嘗に「山門禁葷酒」位のことならむや、營外を稱して地方を呼び、郷里と言ひ、人を指して平民又は外人と云ふ、之に對して陸軍又は軍隊と言ひて、其の兵隊なるものが、日本國を代表するが如き稱呼と、實際とを存せり、故に其外出の困難なるも亦偶然に非ず、斯くの如くにして始て高潔の思想も養はれ、嚴肅なる規律も行はるべし、宗教家にして社會に直接密着なる可き道理あるの外、不規律の爲めに又は卑陋なる爲めに、在家に戯れ、俗人に遊び、白衣の世塵に混しつゝあるは、實に其の節操なきと、高潔に非ざるとを示すものにはあらざるか、予は此に於てか、軍隊の此の規律あるを感ずるものなり。

四戰友の信義 其の兵舎内に在て自己の隣側なる左右の二兵卒は、表面上之を戰友と爲し、其者の病氣、負傷、過失、犯罪、凡ての事皆關係せらるるものにして、假令中心意氣相投せざるも、表面は始終之に提携せざるべか

らず、其練習中に於ても、亦一朝實戰の時も必ず斯の如くなるべきなり、故に自然親密なる交情を結び、情誼兄弟の如きものなり、其他戰友に非ざるも、他中隊他班の故新兵を撰はず各同情信愛の義あり、上級は下級を愛し、下級は上級を仰ぎ、規則的階級の禮義の外、一種言ふべからざる親愛なる感情あり、予は宗教家として、其學生として、同級同室相親むのみならず、廣く和合の情あらむことを望むものなり。

五實科と學科 軍隊の教練に實科と學科とあり、「文事あるものは必ず武備ある」所以なり、是れ實に始て文明の軍と言ふを得るの素地なり、翻て吾が宗教學校等を見るに、「草採り」「掃除」の不都合なる姿勢運動の爲めに却て有害なる體操あるの外、完全なる體育の方法なし、眞に遺憾とする所なり、予は實に入營して始て之を實檢し、其勞動の舉作と、其姿勢歩調等の不整頓なるに於て、自己の體育の發達の爲に、非常なる苦痛を感じたり、「千代田文學」に毎號濱野氏の熱心なる體育論あり、予は甚だ氏の責任

ある論筆なるを喜ぶものなり、將來の宗教家は坐禪觀法面壁九年の迂のみを學ぶべからず、宜しく天下を跋渉し、宇内を踏破し、以て文明的體育法を採り、身體を健全にして高潔なる氣品を養ひ、時世に適應せるの導師たらずんばあるべからず。

六神社佛閣に對する敬禮 軍隊の敬禮は甚だ嚴肅なり、其有形の事は今措て言はず、其無形なる神社佛殿に對するもの亦眞に嚴格なり、平時、戰時、何時にも其帽を脱がざるも、神佛を拜する時は脱帽注視して至敬の態を爲し、若し軍裝の時は銃に着劍して捧銃し、敬虔の意を表示するものなり、虎狼龍獅の軍に馳せて自若たる壯快の武夫にして此の事あり、豈に欽慕すべきに非ずや、宗教家にして神を崇めず佛を信せず、禮拜不慎なるが如きは、實に宗家の罪人たるのみならず、實に天下の賊に非ずや。

七軍旗は軍隊の本尊なり 軍旗は 大元帥陛下の親授せられたるものにして、實に聯隊の本尊として崇奉し、精神として之が爲めに活動する

ものなり、故に軍旗の向ふ所は奈何なる水火危難の處と雖も、死を以て奮進すべく、平時に在ては陛下に對するの敬禮を爲すものなり、軍旗は固と形式的標本にして陛下を代表するものなれば、猶ほ宗旨に於ける本尊曼荼羅等と似たるものなるべし、本尊曼荼羅は固と紙墨を以て圖し形式標示を以て尊崇すべき代表依托と爲すものなり、軍人は精神的意志を以て軍旗を尊崇せり、蓋し甚だ宗徒の本尊に對する觀念と相似たり。

八軍隊布教師 凡そ軍隊に於て其の傳道布教師を歓迎する所以のもの、蓋し軍人をして確乎たる精神的素養あらしめんとするに外ならざるなり、吾人宗教家は既に精神的安心を備わたり、唯だ體育と云へるものを欠けり、「文事なるものは必ず武備あり」と云ふ、豈に茲に鑑みざらんや、因に云ふ静岡聯隊の布教師は下の如き肩書あるものなり、「眞宗大谷派本願寺第三師團布教係曾我守導、静岡縣駿河國安部郡清水町専念寺副住職」……。

九野外要務令と云へる軍書の緒言に於て左の意味の語あり。
軍の目的は戦闘に在り、戦闘の目的は勝を得るにあり、上下一致其軍の
名譽を重んじ、不屈不撓なるべし……

今日の兵式機械皆歐洲諸國に倣へり、然れども其模倣する所は唯形而
下のものにして頼むに足らず、幸に吾邦大和魂なる忠君愛國の義膽あり、
以て外國に比して勝を得る所以なり、宗教家亦目的、方法、網格なるもの嚴
然として存せり、一宗の網格宗粹なるもの、決して他宗に對して綽々餘裕
なくんばあるべからず。

十分業と兼業、陸軍の兵種に六科五部の種別あり、各科互に自分の要
務ありて決して他の範圍を犯さず、然れども歩兵に工作事業ありて工兵
學の一部分を修め、騎兵にして歩兵と同様の戦闘を爲すことあるが如き
其他各科互に相學ぶ所あるもの亦實に已むを得ざるに出るものなり、宗
教家にして普通學を修め、自己の専門の外に他に汲々として得る所あら

んとするもの、亦茲に出るものにして、苟も社會に立ちて事業を爲さんと
欲するもの、一日も是れなかるべからざるの要より來るものにして、分
業と兼業と區分なかるべからず。

十一射撃の練習 射撃の必要は獨り歩兵のみならず、騎兵其他陸軍軍
隊の總てが、文明的機械上の戦闘を爲すに於て必ず有要なるものなり、是
を以て兵卒は最も善く此術に長せざるべからざるなり、故に平素に於て
豫行演習、狹窄射撃、標的、人身的、各射撃、戦闘射撃等各種の方法あり、其練習
甚だ確實にして嚴重なり、其射撃學理なるものは、皆物理數學の理論を應
用するものにして、之を實際に射撃するに當つては、熟達の妙所に至りて
自然に姿勢動かす、眼點亂れず、氣息通はず、彼此の雙點感應冥合して、彈丸
一發、百千回にして誤たず、命中必ず差はず、是れ故意に得んとして得る能
はざる所、其妙は不可言に在り、想ふに宗教家の日常用ふる要機は如何、辯
舌文筆等なるべし、此等を以て人心を感動せしめんとす、亦軍人が射撃に

於ける練習と妙所なかるべからず、四辨八音と云ひ、文上文底と云ひ、皆達人の其法を得たるの名にして、鬼神を感動せしめ、天下を動かすに至るもの、固より偶然に非ざるなり。

十二居睡の許可、軍隊の規律は嚴格にして、起居坐臥敢て猥りに其法を侵すこと能はず、彼の寢臺なるものは日夕點呼より起床喇叭迄の間を除きては、腰を掛くも尙罰則あり、横臥睡眠等は勿論、常時に於て夢想すべからざるなり、余在營中四月下旬夜間演習の爲め、大雨の夜午前零時起床、雨を侵して阿倍川附近に行軍、近傍の村落に於て演習を爲し、午前八時歸營、始て朝食後慰勞として、實は武器、被服等雨後の手入にて甚だ忙し、其日の練兵を休み、腰懸に倚りて坐睡することを許さる、是れ決して寢臺に倚る能はざるを以てなり、坐睡の許可是れ實に非常なる恩典なりしなり、嗚呼在營中の困苦なる生活、以て想像すべし、而して余歸林以來課業の暇時には、散歩、高談、午睡、外出、自由自在にして、而して猶口に美味を貪り、眼に

好装を求むるが如き、欲望益強くして停止する所を知らず、然れども此の居睡許可の事實に忘れ難きの逸話、以て諸氏に紹介するを惜まざる所以也。

十三不動の姿勢——服装——長髪 折伏的の姿勢、山海震裂するも亦驚動せざるものを不動の姿勢と云ふ、其意氣以て百萬の敵を睨殺せしむべきの勇を示すものなり、服装は正しく且つ堅固ならざるべからず、以て風紀を示す可く、以て不時に備ふべし、長髪是れ制限あり、頭髮の長さは二三分を適當として、少くとも月次一回斬髪するなり、頭髮長き時は「フケ」を生じ、帽及び上衣を汚し、且つ外見懦弱にして、勇壯活潑の態度を失ふに至ればなり、其他長爪を禁じ、入浴洗濯等清潔に一身を保護し、空氣流通掃除等室内を爽淨にすること等、皆實際に行はれつゝあり、姿勢、服装、衛生此の三者吾學林の如きは如何、抑も亦敎家たるものの此等の須用あらざる乎。

學課多忙中吹螺の友人に接待しつゝ、探筆走成するものなれば、文字の粗漏と

意味の難解とあるべし、願くは恕せよ、唯予の意のある所を知れ。

一七八

己亥第六月十五日夜

三

一たび北海巡教の教令を受け、満身の喜悅宛も蟄龍冲天の勢を北海の曠野に逞ふしつゝありし身は、忽ち「九ガツ一ニチセウシウキコク」の電報に接し、第三回の布教地なる石狩國旭川町を發し、八月廿三日伊東先生中川兄に辭して二宿の昇旭館に袂を分ち、汽笛一聲旭川驛を出るや、神居古潭の絶勝も友なき車窓に語るものなく、雨さへ降出て孤影蕭々午後二時室蘭に着し、其夜陸奥丸に眠りて直航青森に達し、翌朝東京に翌夜郷里伊豆下田町に、行程四百里の山海一步を踏まずして第三日にして歸郷の人となりぬ、師親の限りなき喜び知友の歡びの情三四日の短日は僅に夢の中に過ごしつ、三十日夜再び郷地を辭して翌静岡に着し、去る一日入營しぬ、暫く 聖祖の弟子としての身は 大元帥陛下の御召に依りて三週

集 泉 靈

日間軍隊の人となりぬ、「或現將軍身」のそれにも似て、王佛冥合の身の冥加うれしく、拙き筆に感じたる事ども書付け、聊か在閣諸兄に音信いたすべく候

△九月一日午前八時召集に應じて豫後備兵員の集るもの一千百八十餘人、營門の内外に雲の如く霞の如き和服洋服百姓町人房主醫者、さては高利貸の息子も學校の教師も、その千態萬狀の形装は一時間計の程に忽ち一樣白夏服の兵隊と化しぬ、其職業も境遇習慣も此に至りては跡方もなく昔の面影を認めず、宛も研究大會の講學生諸君が四方雲集一日の中に制服制帽の姿に儀相の統一を實行せられし様に今更の如く感せられたり、あゝ儀相の統一の如何に必要なるよ。

△兵舎の前に庭木を植へ朝顔を培養せり、朝々咲出る優しき姿、此殺風景なる劍戟世界の裡に風流の趣を示しぬ、誰れ愛賞する人のありや無しや、

影 鏡 光 劍

一七九

花は無心に咲香ひて秋風涼しき今頃なほ其色を損せず、予は彼によりて多くの慰藉を得つゝあるなり、嗚呼兵營の花、如何に面白き配合なるかな、△入營の日部隊配屬の指揮の下に廣き營庭を彼方此方に引率され、忽ち雨忽ち晴の息苦しき天氣に曝さるゝ事數時間、早や艱苦の第一歩に入りぬ、既に入るや渡さるゝ物破れたる衣袴、破れたる靴脚絆帽子、さて食事となれば臭き飯に塵の浮たる湯水、我儘勝手の習慣に育ちし我等には不快の念なきにあらず、然れども是れ官給品なり、軍備擴張に資力の瘦疲れたる軍營に在て亦止むを得ざるとなり、況や質素を旨とするの軍人生活は誰一人の不平洩すものなく、襤褸を纏へる大和錦、言語動作自ら是れ「花は櫻に人は武士」の精華を失はず、彼佛家の「形こそ深山かくれの朽木なれ心は花になさはなりなん」の真意をも想起せらるゝなり、△坐席不暖といふ語があるが軍隊ほど時間の貴重にして閑隙なきは少かるべし、命令の下に進退動止を爲すは舍内と營外とを問はず、假令休暇

時間とはいへ不意の命令ある也、軍隊生活に疎き予の如きは、煙草一本全く吸ひ終らぬ半ばにそを捨て行くの遺憾なる事幾回なるを知らず、入營の翌夜の如きは十時就寢、終日の疲労に厭聲雷の如き夢心地の時、不時に夜十一時卅分非常呼集ありて、名残惜き夢を破らるゝのみかは、脚絆よ靴よ銃器背囊よと數分時間の混雜安閑の眠を一變して殺氣鋭き號令の聲舍内に響き渡り、夜間數里の行軍の後翌朝始めて歸營したりき、臥榻の間も敵といふ觀念を忘れてならぬ生活にては固より當然の事なるべし、親子身に刀杖を帶する僕の今日は、涅槃經に見へたる行門折伏の導師なるかな、さりとて忙しき此間の消息なり、△上佛界より下地獄界に至る果報境界の別なる、予今軍隊を以て之れを況へん、軍旗の旭章光明を放ち神文神武威徳八紘に及ぶは佛界也、上官の下を愛撫し慈仁衆卒を導くは菩薩界なり、下士見習士官、特別教育者の單獨銳意事を勉むる二乗の人にあらずや、酒保の一醉終日の勞を忘れて歌

笑し悦樂す、自らは是れ天上の樂、上長官より下兵卒迄賢愚利鈍才同からず苦樂相交りて喜怒哀樂す、此間自ら人界の本色、砲火相交り兵及既に接して叫喚し呼號し目眚裂け怒髪逆に立つ即ち脩羅界なり、兵卒の多き或は賤劣貪汚の性行なるもの餓鬼畜生にも比すべきか、鐵窓周圍の裡罪を營倉に受けて殘月滴露幾夜陰雲凄風の間にあるもの是を地獄界となすべし、觀來れば此間自ら宛として十界あるなり、予は今同時に此十界の衆生に接しつゝあり、而して自ら亦十界の間に彷徨して迷悟の中に輪廻しつゝあるなり。

△嘗て研究大會に「軍隊布教と監獄布教の緩急」を討論せし時、予は兵役服務の經驗ある身にて益山、横山、泉の諸兄に反對して「監獄布教急なり」と主張せしは議論の上にも實際の上にも自ら適當の論旨なりと信じたりし故なり、諸兄が「軍隊急なり」との論旨は予の耳には軍人なれば軍隊を振回はすの感情論とのみ苦々敷聞きたりしが、此時の予の意見は

← 泉 集 →

← 劍 光 銃 影 →

今年第三回の入營以後に於て大に議論の根據を動搖せしめたり、そは「義勇奉公」「一死鴻毛」の軍人の精神教育も口と身には或は表示せらるべし、而も根底なき忠節、立脚地なき奉公は決して確乎不拔なる眞の軍人精神となるに足らず、彼軍人の多くは教育なく理解なく、平素勅諭の訓誡を口に耳にすれども其眞精神を奉體して、實踐躬行生死渝らざるもの殆ど幾許かあるべき、況や腐敗混濁せる郷里に感染せられたる惡思想惡習慣に養はれたる軍人が一朝軍隊に入りたればとて、容易に軍人精神の成立すべくもあらず、即ち此點に於て予は軍隊布教の急務なるを發見せり、況や郷里を離れて久しく親戚妻子を放棄し、生死を賭して勞苦煩悶の間にあるの彼等には先天的に何物かの慰安と希望とを要求しつゝあり、即ち彼等自身既に宗教心の發動とそれが欲望とを有せり、予は乃ち前論を撤回して大に軍隊布教の急を叫ばんと欲す、而して短き兵營生活の期間に於て二三見聞したる吾人の多少參考ともすべき軍人の宗教思想の少許を